

加賀山の石造文化財

# 加賀山の石造文化財

滝沢村教育委員会



岩手山



お鉢の三十三観音石像と頂上薬師岳



お鉢に立ち並ぶ三十三観音石像



不動平と山頂

# 岩手山の石造文化財



盛岡講中建立三十三觀音第一番如意輪觀音像  
(岩手山頂お鉢・柳沢口取付地点)

## 発刊にあたつて

わたしたちの祖先が長い歳月をかけて営み、造り、築いてきた文化財は、所有者はもとより社会の貴重な相続財産であり、歴史文化の理解に欠くことのできないものであり、また天然の所産である文化財は、人間の生命と均しく尊重されなければならないと識者はことあるごとに指摘しています。

しかし、近年の技術革新と情報網の発達など激しい社会情勢の変化とともに、わたしたちの住む地域も著しく変化しております、祖先の人々が長い間培ってきた伝統的な習慣や信仰が薄れてきております。

わたしたちのふるさとを代表する靈峰岩手山は巖鷲山や南部片富士などと呼ばれ、滝沢村はもとより岩手県民にとってシンボル的な存在であり、古来より山岳信仰が盛んであったことを裏付ける数々の石造文化財が現存しています。

このたび幸いにも岩手県立博物館のご協力を得て、この岩手山を有する当村から岩手山の石造文化財について調査を実施し報告書を刊行することができました。

ここに、調査にご協力いただきました岩手県立博物館に感謝申し上げますとともに、ご多忙にもかかわらず執筆と編集、ご指導、ご助言を賜りました岩手県立博物館・主任専門学芸調査員の大矢邦宣先生（滝沢村文化財調査委員）に深く感謝申し上げる次第です。

本書が、村民の皆様に文化財の再認識と郷土理解の促進に資することを期待申し上げ、文化財関係者はもとより山岳関係者など広く活用されることを願つてやみません。

昭和六十一年三月三十一日

滝沢村教育委員会 教育長  
高濱 善太郎

# はじめに

岩手山の石仏をはじめて拝んだのは昭和五十九年晚秋のことであった。西根町教育委員会の依頼で西根町内全石造文化財調査を実施したときのことである。上坊口から石の祠や道標を調査しながら登り始め、五合目からは新雪を踏みながらの調査となり、お鉢にたどりついて立ち並ぶ三十三観音を拝んだときにはもう下山時刻が迫っていた。やむを得ず翌日も頂上まで登つて調査を続けたが、奥宮の調査は西に傾く太陽を気にしながらであり、とうとうもう一回登らねばならない羽目になつた。このとき調査した数は一七一基である。寒風烈風に吹きさらされながらのお鉢での調査は忘れることができない。

今回は、これに柳沢口、零石口登山道の調査を加え、総数二四九基の石造文化財を調査し収録することができた。朝な夕なに岩手山の秀峰を仰ぐとき、お山にかくも多数の石碑石仏が建てられていることが、そして、そのひとつひとつの表情が改めて想い起こされる。

岩手山の石造文化財は、建碑が一般的になる江戸後期以降のもので、それほど古いものではない。しかし、石碑石仏は悉皆調査を行えばその後の信仰の歴史を自から語りかけてくれるのである。その意味でもこれらの石造物は文化財として大切にされるべきものなのである。

調査には万全を期したつもりであるが、悪条件下でのこともある、銘文を読み切れないものもあり、見過してしまった石碑もあるに違いない。この書を基に補足・追加・訂正がなされるならば幸いである。

岩手山神社宮司小原實麿氏には石碑のほか、岩手山信仰とそのかつての状況、登山路の拝所など全般に亘つて懇切な御教示を得た。本書が単なる石碑石仏の報告書にとどまらず、信仰の諸相をある程度浮き出させることに成功したとすれば、それに小原宮司によるところが大きいのである。特に記して感謝の意を表するものである。

また、岩手山石碑調査の端緒を開き、山頂の調査に同行してくれた西根町史編纂係長渡辺義光氏、さらに、その後の調査及び報告書刊行を推進してくれた滝沢村教育委員会諸氏ならびに協力者に対し感謝申し上げる次第である。

昭和六十一年二月十日

岩手県立博物館

大矢邦宣

# 目

## 次

発刊にあたつて  
はじめに次  
一覧

五 山頂の石造文化財概説  
三九 山頂の石造文化財一覽  
四四 三十三觀音石像  
三四 三十三觀音対照一覽

六 平笠口の石造文化財概説  
八三 平笠口の石造文化財一覽  
八四 岩手山上坊神社講中の祈禱詞  
七八 平笠口の石造文化財一覽

七 零石口の石造文化財概説  
九六 零石口の祈禱詞  
九八 零石口の石造文化財一覽

八 岩手県内の岩手山・岩鷲山信仰碑一〇二  
一〇二 概説  
一〇五 岩手県内の岩手山・巖鷲山信仰碑一覽表

二 岩手山と岩手山信仰  
(一) 岩手山  
(二) 岩手山信仰  
(三) 岩手山年表  
一〇一 一〇一 一〇一  
五五五  
四四四  
三三三

三 岩手山の石造文化財  
(一) 造立数・種類  
(二) 造立年代順一覽  
一七一三一〇一〇  
一一一

四 柳沢口の石造文化財  
概説  
二五二三二二  
柳沢登山口の祈禱詞  
柳沢口の石造文化財一覽  
二六二五二三

参考・引用文献  
一一二

# 一、調査の概要

## (一) 調査の目的

北東北第一の高山岩手山は古来<sup>がじめ</sup>岩鷲山<sup>いわわしやま</sup>大権現<sup>だいごんげん</sup>として崇められ、江戸時代以降は登拝者・登山者も増え、岩手山信仰の高まりを反映して石碑や石仏も多く建てられている。今回の調査は、①岩手山に所在する全石造文化財を悉皆調査し記録すること、②その特色を明らかにすること、③石造文化財と岩手山信仰との関りを明らかにすること、を目的に行われた。

## (二) 調査地域

岩手山には東、北、南の三方に登山道があり、それぞれの登山口には岩手山神社がある。即ち、滝沢村柳沢（柳沢口）、西根町平笠（平笠口）、上坊口）、零石町長山（零石口）の岩手山神社がそれで、藩政時代には新山堂と呼ばれ、山頂の奥宮に対する里宮であり、それより神域とされていた。今回の岩手山の石造文化財の調査地域はこの各岩手山神社の神域から登山道を経て岩手山頂までである。但し、柳沢口には、岩手山神社の手前ではあるがその神域とされた「王子」と、鹿角街道からの入口である分れをも調査地域に加えた。

## (三) 調査対象

調査地域内の全石造文化財を調査対象とした。即ち、

石碑（文字碑）……神仏信仰碑・記念碑・祈願碑などのほか、道

標（追分石）・道程石（合夕石）。

像容……ゴンゲンサマ・神仏像・石宝劍・狛犬など。

建造物……石祠・石燈籠・石鳥居及び扁額、手水鉢など。

## (四) 調査日程及び調査員

第一回	昭和五十九年十月十日	平笠口	一合目～頂上薬師岳
第二回	リ	十月十一日	リ
第三回	リ	十月二十七日	リ 山頂お鉢、岩手山神社
調査員	大矢邦宣（岩手県立博物館主任学芸調査員）		
調査補助員	渡辺義光（西根町史編さん係長）		
岩佐浩子・上田吹黄（岩手県立博物館解説員）			
第四回	昭和六十年十月十日	零石口	一合目～不動平
第五回	リ	十月十四日	柳沢口 馬返し～不動平
第六回	リ	十一月五日	零石口 岩手山神社
第七回	リ	十二月六日	柳沢口 岩手山神社
調査員	大矢邦宣		
調査補助員	沢村 勉（滝沢村教育委員会社会教育係長）		
	桐生正一・桜井芳彦（滝沢村埋蔵文化財担当）		
	岩佐浩子		

## (五) 調査のまとめ及び執筆

調査のまとめと本稿の執筆は大矢邦宣が担当し、県内各地の岩手山信仰碑の資料収集・整理については岩佐浩子の、また、岩手山信仰史の文献調査は白沢千賀子（岩手県立博物館解説員）の助力を得た。

# 二、岩手山と岩手山信仰

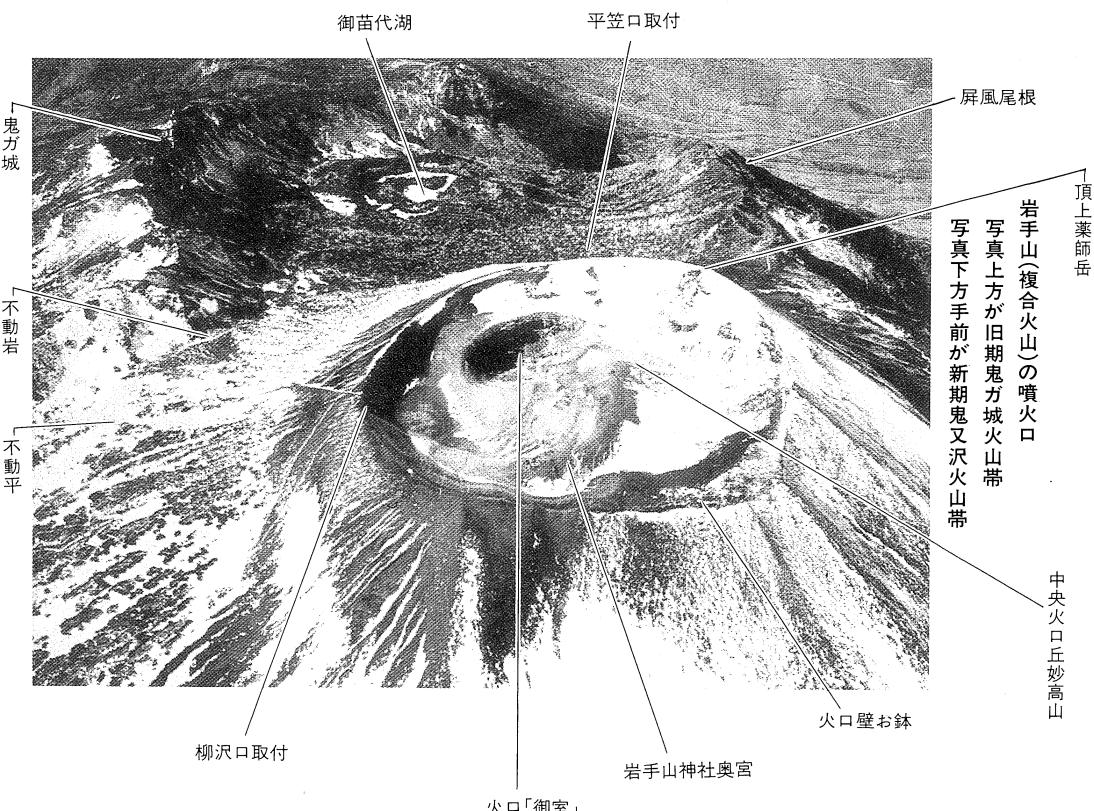
## (一) 岩手山

北奥羽における最高峰岩手山は「奥の富士」とも呼ばれ、その美しく雄々しい山容を愛され、岩手の人的心を育んできた。奥羽山脈から大きく東に張出した標高二〇四一米のこの火山は真東の玉山村付近からみるとコニード型の均整のとれた姿をみせるが、東南の盛岡からは「南部の片富士」にみえ、南側の零石町からは西側の尾根に続く長く低い山稜にみえ、富士型を美とする心は裏切られる。これは岩手山の複雑な成立時に起因している。

「初めに西岩手の噴火があつた。現在その火口壁が、北側の屏風尾根、南側の鬼が城尾根として残っている。そしてその中央の凹地は、東西三糠、南北二糠のほぼ橢円形の旧噴火口であつて、そこに御釜、御苗代と呼ぶ二つの火口湖がある。その後、その東部が爆発して、現在の最高部を形作つた。東の山麓から臨む秀麗な南部富士がそれである。その頂上の噴火口はお鉢と呼ばれ、その中に更に火口丘が盛りあげて二重式火山となつてゐる。」深田久弥は名著『日本百名山』の中で、その過程を簡潔に、しかも、全ての要素を盛込んで解説している。

## (二) 岩手山信仰

この複雑な山容が鬼が城の鬼の伝説を生み、坂上田村麻呂の悪鬼退治の伝説を生んだ。田村麻呂が陣をしいたところを巖鷲山田村明神として祀り、後、巖鷲權現として山頂に勧請したとも伝える。しかし、偉大な自然景観に畏敬の念を抱くのは日本人の素朴な宗教感情であり、岩手郡



にあつて秀抜な山容を誇る岩手山が信仰されるのはごく自然のことであろう。この自然信仰に組織的な宗教が入り込むとき、権現号や神号が定められる。岩手山を岩鷲山・巖鷲山とするのは通音によるものであろうが、この呼称はそれほど古いものではなく、江戸時代以降のことと考えられている。

鎌倉時代初期に、源頼朝から岩手郡を与えられた工藤小次郎行光が、岩鷲山大宮司に任せられ、代々奉祀したという。岩鷲山の名称はともかくとして、岩手郡の領主ならばその第一の名山を祀るのは当然であろう。盛岡に居城を定めた南部氏もその守護として崇敬した。神体は岩手山自体で、岩鷲山大権現と号され、本地垂迹（日本の神の本来の姿（本地）は仏教の仏・菩薩であつて、それが仮の姿を取つてあられた（垂迹）も）の考え方から、本地は阿弥陀如来・薬師如来・觀音菩薩とされた。奥宮は山頂で、柳沢口・平笠口・雲石口の各登山口には遙拝所として新山堂が建てられた。盛岡からの正参道である柳沢口は特に重視せられ、寛永三年には盛岡城下に新山堂が建てられ、まもなく創建された羽黒派修驗系の大勝寺が別当寺になった。雲石では田村麻呂ゆかりの大宮（大宮神社、雲石町西根）がご本社であると伝えている。

平笠口（上坊）は大蔵院、雲石口は田蔵院が別当であるが、柳沢口では厨川工藤家から祭祀権を引継いだ大勝寺と、一方井の出で信直以来の正統性を主張する自光坊、および工藤家三勇士の一人斎藤藤三郎の子孫と伝える篠木斎藤家がその祭祀権を争っていた。篠木斎藤家は京都の吉田神道に入門、明暦四年には柳沢祢宜（柳沢新山社神主）として家老連判の証文を給されている。

岩手山が世間の耳目を驚かせたのは貞享三年（一六八六）から始まる噴火活動である。この時の噴火は有史以来の大噴火で、山頂の火口（御室）から噴出したものであった。空は暗黒になり、北上川は白濁し、盛

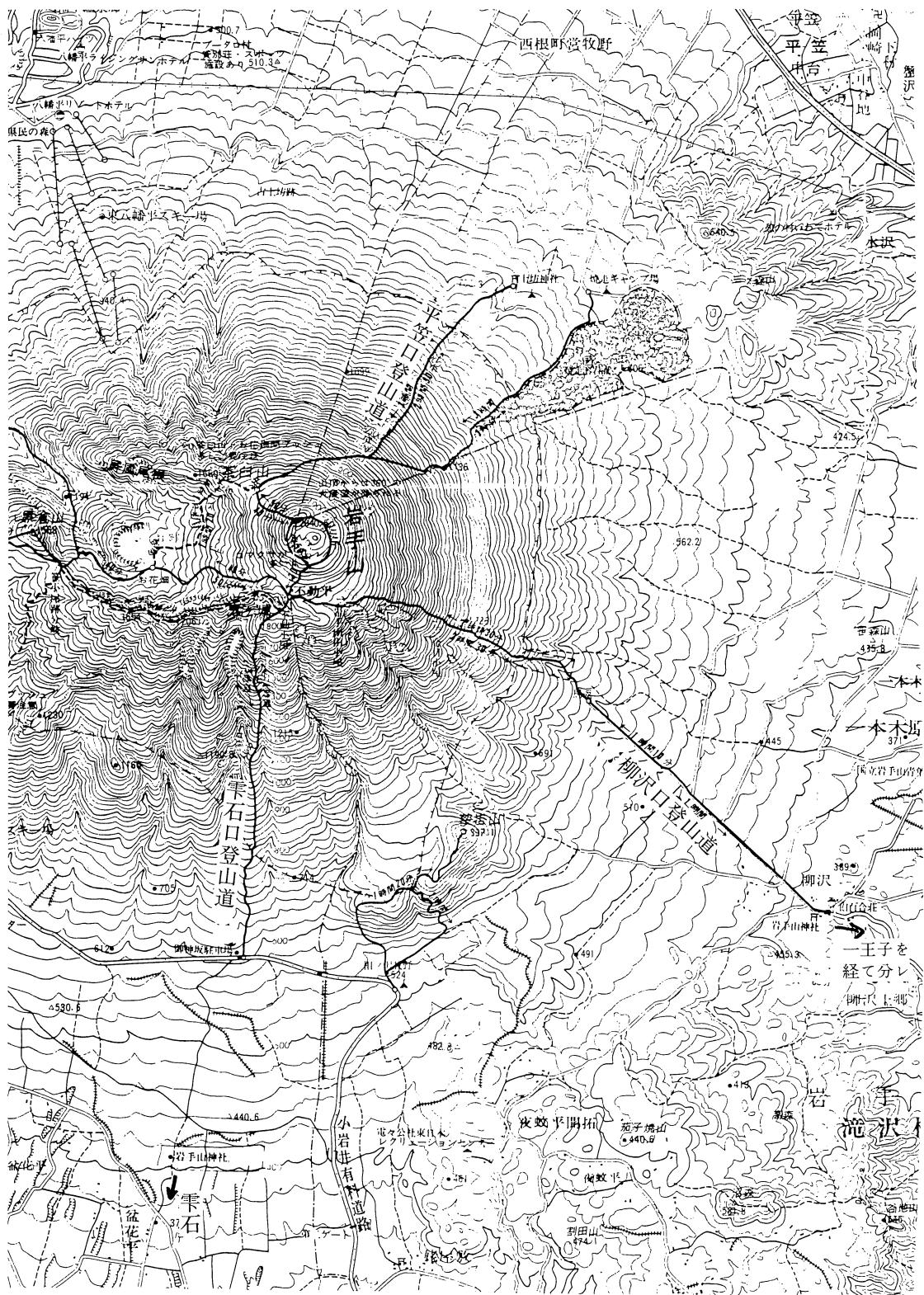
岡でも火山灰は激しく降り、一本木では一尺ほど積り、焼石は姥屋敷まで飛んできただと記録されている。この一大事に当たり、藩では早速京都吉田家へ奏上し、正一位権現の位を岩鷲山に贈った。雲石別当円蔵院の記録では、以前は巖鷲山田村明神と号していたが、このとき巖鷲山大権現と唱えるようになつたという。

この噴火では山頂に自光坊が建立した阿弥陀・薬師・觀音の石像も火口から噴出した砂石のために失われた。火山活動は元禄年間も続き、享保四年（一七一九）にはついに岩手山北東部中腹から熔岩を噴出、「燒走り」をつくりた。享保十六年（一七三一）から翌年にかけても小活動があつたが、ようやくその後は鎮静化している。

岩手山に現存最古の石造物が奉納されたのは明和八年（一七七一）である。それまでの岩鷲山信仰を考えると案に相違してそれほど古いものではない。これはすべてが噴火のせいではないようである。この地方の石造文化財の造立は遅く、特に山岳信仰に関するものはこの頃から造立が始まる。（13頁参照）。これはこの頃から町人や農民に参詣の余裕ができ、建碑の風習が高まってきたためであろう。

一八〇〇年代に入ると岩手山への参詣者が急増したらしく、文政二年（一八一九）には登山道に道標が建てられ、不動平に沼宮内（せうない）設置された。文政五年には平笠口には道標が建てられ、翌六年には平笠不動にも接待小屋が新設されている。安政四年（一八五七）には盛岡の町人講中により山頂お鉢に三十三觀音の石造が建てられた。この頃が岩鷲山信仰の最盛期で、参詣登山路の拝所も整い、参詔者の唱える祈禱詞が定まつたのもこの頃であろう。

明治維新は地方の信仰も大きく改変させた。神仏分離政策により、岩鷲山大権現号は廃止させられ、新たに祭神を顕國魂大神（天国主命）と定められた。宇迦之御魂命、倭建命の三神と定めて岩手山神社と改



第1図 岩手山登山道地図

名、別当大勝寺全教は還俗し神官となつた。

### (三) 岩手山年表

(「岩鷲山」の初見資料)。

洪

積世 旧期火山活動（西岩手火山、鬼ガ城火山）

（第四紀）第一期 大地獄火山活動

二〇万年以前 鬼ガ城と屏風尾根が出来る（火口壁）

第二期 御苗代火山・御釜火山活動

御苗代湖と御釜湖ができる（火口）。

新期火山活動（東岩手火山、鬼又沢火山）

約一万年前 第一期 西岩手火山大地獄カルデラ東斜面中腹部に火山

活動（鬼又沢火山）、不動平の形成（カルデラ）

第二期 薬師火山活動、薬師岳・お鉢ができる（外輪山）

第三期 妙高火山噴出、妙高山ができる（中央火口丘）

\*なお、岩手山の火山灰編年を研究している土井宣夫氏（日本重化学工業・滝沢村在住）によれば、カルデラの形成に伴って大規模な山体崩壊を起したといわれる。西根町にみられる「流れ山」は山体崩壊による堆積物である（県立博物館大石雅之氏の教示による）。

一六一六（元和二）頃、工藤如光、零石村安樂坊（繫温泉湯守）を岩手山に代参させる（厨川工藤氏系図）。

一六二六（寛永三）利直、盛岡新山堂を建立と伝える（封内郷村志）。

一六三三（リ一〇）重直の姿勝山、岩鷲山大勝寺を創建。住職羽黒派

山伏行海上人、安樂院二世を称し、岩鷲山權現社の別当となる。

一六四四（リ二一）領内旱天により大勝寺、自光坊とともに岩鷲山麓

柳沢に雨乞の法を行う。

一六四八（慶安元）重直、柳沢新山堂を建立。

一六五六（明暦二）重直病いにつき、岩鷲山に三十三騎代参を命ずる。

一六五八（リ四）篠木斎藤家は柳沢祢宜（柳沢新山堂の神職）として御堂掃除のため諸役を免除される。

一六八六（貞享三）岩手山噴火、先年山頂に自光坊が建立した弥陀、

薬師、觀音の石仏や三十六童子の岩も噴出した石砂

で不明となる。以降享保年間まで火山活動が続く。

京都吉田家より正一位權現上陞の宣旨御幣出る。

参詣前の四足二足の禁、行屋籠り他の精進潔斎を通達する。

八〇一（延暦二〇）坂上田村麻呂、岩手山の悪鬼を退治すると伝える。

八〇七（天同二）後、巖鷲山田村明神として祀り（大宮、田藏坊伝）。

更に巖鷲権現として山頂に勧請したという（自光坊伝）。

一一九〇（建久一）岩手郡を領した工藤小次郎行光が、この頃岩鷲山

大宮司に任せられ、岩手山に参拝登山すと伝える。

一五四六（天文一五）南部信貞、岩手郡一方井に生れる。男子出生を岩

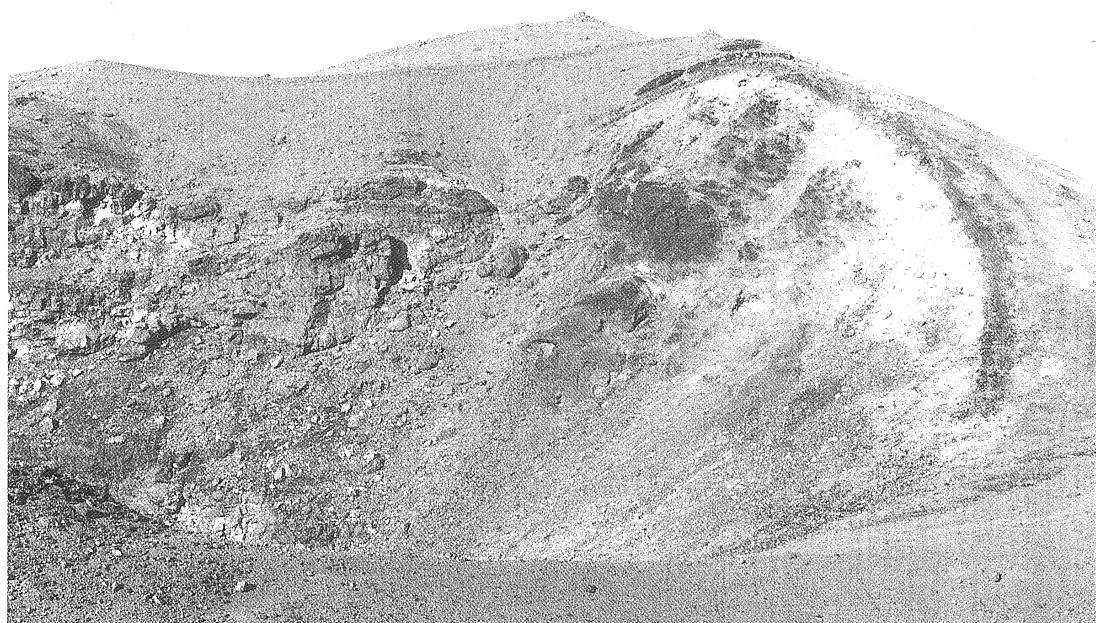
鷲山に祈願したという（自光坊伝）。

一六〇三（慶長八）南部利直、滴石の岩鷲祢宜（円蔵院木村家）を公

認し、手作地を祈念料として寄進（木村家文書）

一八〇二（享和二）不動平・御不動の不動明王石像が建てられる。

一八一九（文政二）柳沢口改所（受取権現）に岩鷲山の碑が設置さる。



岩手山頂の火口(御室)と火口丘(妙高山)

柳沢口登山道に道標十本が設置される(『内史略』に記録あり。但し、現物は確認できず)。

不動平に休息所の小屋が建てられる(『内史略』(沼宮内接待小屋がこれであろう。))。

一八二三(文政五) 平笠口登山道に道標(道程石)を設置(現存)。

一八二三(ノリ六) 平笠不動に接待小屋が建設される(石室劍銘)。

一八二八(ノリ一二) 柳沢口一合目に石祠建立(笠詰權現)。

一八四七(弘化四) 柳沢口一王子に巖鷲山の碑が建てられる。

一八四九(嘉永二) 山頂清水権現に十一面觀音石像が建てられる。

一八五六(安政三) 分レに巖鷲山の標柱(追分石)が建てられる。

一八五七(ノリ四) 八日丁を中心とする盛岡講中により、山頂お鉢から奥宮にかけて三十三觀音石像が安置される。

一八六六(慶應二) 盛岡城下夕顔瀬橋中島に巖鷲山常夜燈を建立。

一八六九(明治二) 新政府の神仏分離政策により、別当大勝寺全教、巖鷲山大権現を停め、三神を定めて岩手山神社と改めることを願出る。

一八七一(ノリ四) 岩手山神社、郷社となる。

一九〇六(ノリ三九) 花巻町中村巳吉、お鉢に三十三觀音石像を建てる。日露戦争以後、岩手山神社の復興氣運高まる。

一九一六(大正五) 岩手山神社、県社に昇格する。

一九二七(昭和二) 分レに岩手山神社の石造大鳥居が建てられる。

一九二九(ノリ四) 山頂に岩手中学校により大石碑が建てられる。

一九三五(ノリ一〇) 岩手山測候所が建設される。翌年から観測。

一九七〇(ノリ四五) 岩手山で岩手国体の山岳競技が行われる。

### 三、岩手山の石造文化財

#### (一) 造立数・種類

**总数** 各登山口の岩手山神社から岩手山頂までにある石造文化財は総数二四九基にのぼっている。三十三体を祀る三十三觀音や二基一対で奉納される石燈籠、狛犬など一組のものは一件として数えると一三四件となる。

**地点別造立数** (第1表) 柳沢口(分レ～岩手山神社～不動平)は五九基、平笠口(上坊岩手山神社～平笠不動～お鉢手前)は四一基、雪石口(岩手山神社～不動平手前)は十七基、山頂(お鉢～頂上薬師岳～奥宮)は一三二基である。即ち、分レからの柳沢口コースをたどって山頂まで登ると、その間に実に一九一基もの石碑や石仏その他の石造文化財が立ち並んでいることになる。但し、今回の零石口の調査は不十分であり、更に増えると思われる。

山頂が最も多いが、これはお鉢に三十三觀音像が二組(現存数六三体)、奥宮にゴンゲンサマが十五頭も祀られていることによる。柳沢口と平笠口の登山道には一合目、二合目などの道のりを刻んだ道程石が建てられていて基数が多くなっている。

**種類別造立数** (第二表) 形態別では石碑六八基、像容一二四基、建造物五七基で、石仏やゴンゲンサマなどの像容が最も多い。種類別でみると①三十三觀音六三基(二組)、②石燈籠三三基、③道程石二九基、④ゴンゲンサマ二三頭、⑤石祠一六基、⑥石宝剣一二基、⑦狛犬一二頭などである。

(第一表) 地点別造立数

〔件数〕は石燈籠一基一対で1、三十三觀音は一セットで1、として計上したものである。

零石口		平笠口		山頂		柳沢口				造立地點		主な石造文化財	造立数	
登山道	岩手山神社	平笠不動	登山道	岩手山神社	奥宮	御上	お鉢	不動	登山道	馬返し	岩手山神社	分レ・王子		
3	14	8	16	17	41	8	83	11	27	5	11	5	追分石(庚申塔・寛政12)、追分石(巖鷲山・安政3)	文化4
3	10	7	8	11	36	6	17	8	11	5	7	5	狛犬(明治10)、石宝剣(明治29)	狛犬(明治45)、大正15
石鳥居	武運長久祈願(昭和15)	ゴンゲンサマ(寛政12年計15頭)	石祠(天明9)	石燈籠(天保9、安政2、慶応1、慶応2)	石燈籠(天保4、手水鉢(嘉永7))	道程石(文政5、9基)	石燈籠(馬形大権現、慶応2)	不動明王立像(享和2・2基、嘉永3)	石燈籠(文政5か)	奥の富士(文政2)、石祠(文政11)	奥の富士(巖町人建立、10本)、石祠(文政11)	ゴンゲンサマ(安永年間、花巻中村奉納・安政4)	ゴンゲンサマ(巖手富士、昭和5)	第10回村民登山大会記念(昭和50)
(13件) 17基		(26件) 41基		(59件) 132基		(36件) 59基				合(件数)		合(件数)	合(件数)	
(134件) 249基														



お鉢に立ちならぶ三十三觀音石像



山頂奥宮の石造物群

(第二表) 種類別・地点別造立数(基數)

計		建造物						像容								石碑			形態			
		石 階	手 鉢	扁 額	石 居	石 籠	石 祠	狛 犬	石 劍	地 藏	大 天	八 神	藥 如	不 動	觀 明	三 十三 觀音 の 觀音	ゴ ン ゲ ン サ マ	道 程	道 標 (追 分 石)	石 碑 ・ 石 柱	種 類	地 点
5					1													3	1	分レ・一王子	柳	
11	1				4		4	1											1	岩手山神社		
5																	1			4	馬返し	沢
27						3											3	18	1	2	登山道	
11					4			2							3			1	1	御不動	口	
59	(1)			(1)	(8)	(3)	(4)	(3)							(3)		(4)	(19)	(4)	(9)	(計)	
83					4								1	1	2	63	2	1	1	8	お鉢	山
8	1				1	2	1					2							1	頂上		
41		1	1	6	2	2	6			1						15			7	奥宮	頂	
132	(1)	(1)	(1)	(6)	(7)	(4)	(7)		(1)	(3)	(1)	(2)	(63)	(17)	(1)	(1)	(16)			(計)		
17				11		2		1					1						2	岩手山神社	平	
16				1	5			1									9			登山道	笠	
8					1	2						1				1			3	平笠不動	口	
41				(12)	(6)	(2)	(2)	(1)	(1)			(1)	(1)		(1)	(9)		(5)		(計)		
14	1		1	7		2													3	岩手山神社	雪	
3			1													1			1	登山道	石	
17		(1)		(2)	(7)		(2)									(1)			(4)	(計)	口	
249	1	2	1	4	33	16	12	12	1	1	1	3	5	3	63	23	29	5	34	合計		
	57						124								68							

## (二) 造 立 年 代

最古の石造文化財（第三表） 最古のものは①山頂奥宮の明和八年（一七七二）石宝剣で、②安永八年（一七七九）石祠（山頂奥宮）、③安永年間の石祠（お鉢・平笠口取付）、④天明六年（一七八六）石宝剣（山頂奥宮）、⑤天明九年（一七八九）石祠と続き、山頂奥宮に古いものが多い。

記録の上での初見は貞享の頃である。『巖手山記』所載文書の貞享三年

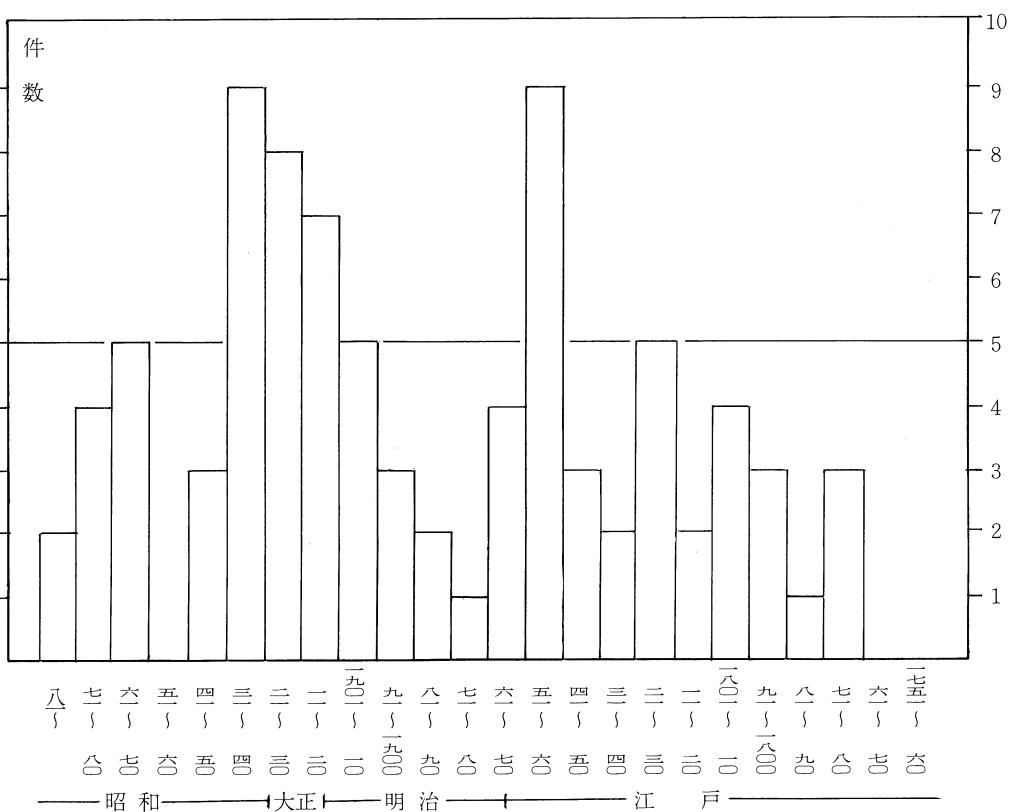
（一六八六）岩手山大噴火の記録に、先年自光坊が建立した「弥陀薬師観音石佛」も押上げられた石砂のために見えなくなつてしまつたとある。この噴火はその後も断続的に続き享保四年（一七一九）には「焼走り」を噴出し、享保十七年（一七三二）頃までほぼ半世紀に亘つて続いている。したがつて現存最古の石造物は噴火活動がおさまつてから約四〇年後の造立となる。

岩手山に江戸後期以降の石造物しかみられないのは何故であろうか。

噴火により古い石造物が失われ、その後活動がおさまるまで造立できなかつたためであろうか。

岩手県全体の石造文化財の造立状況をみると元禄頃（一六八八）一七〇四）から各地で建てられ始め、享保（一七一六～一七三六）以降は次第に増えてくる。岩手山の石造文化財は県内においては決して古い方ではない。但し、出羽三山碑などの山岳信仰碑だけでみるとその造立はやや遅れ一七五〇年前後となる。岩手郡内で古い山岳信仰碑をみると、西根町は明和六年（一七六九）湯殿山大権現塔、零石町は明和九年（一七七二）湯殿山碑、玉山村は若干早く元文五年（一七四〇）出羽三山塔、但し次は安永八年（一七七九）湯殿山碑、岩手町は天明七年（一七八七）出羽三山碑、滝沢村では岩手山にあるものを除いた山岳信仰碑では篠木

（第二図）一〇年単位造立件数分布





山頂奥宮（背後は妙高山）

の文政七年（一八二四）田村神社・岩鷲山碑、盛岡市内の最古の巖鷲山碑は文化十二年（一八一五）である。こうしてみると岩手山の石造文化財が江戸後期以降のものばかりであることは決して不思議ではなく、噴火のせいかりでもなく、むしろ、この地方の石造文化財の造立状況によるものであることがわかる。

**造立年代分布** 第二図で十年単位の造立件数分布をみると世情を反映して変動がみられる。一七七〇年代から造立され始め、一八二〇年代に若干多く、江戸末期の一八五〇年代に最も多く造立されるが、明治維新後は急減し、その後ようやく一九〇〇年代に入つて回復、一九四〇年代まで大正・昭和前期は最盛期となる。敗戦とともに全く造立をみなくなり、一九六〇年代に至り造立されるようになつていている。

これを第三表の造立年代順一覧とともに考察するといくつか興味深いことが知られ、次の六期に区分できる。

#### 第一期 奥宮・御不動の整備期（明和～享和年間）

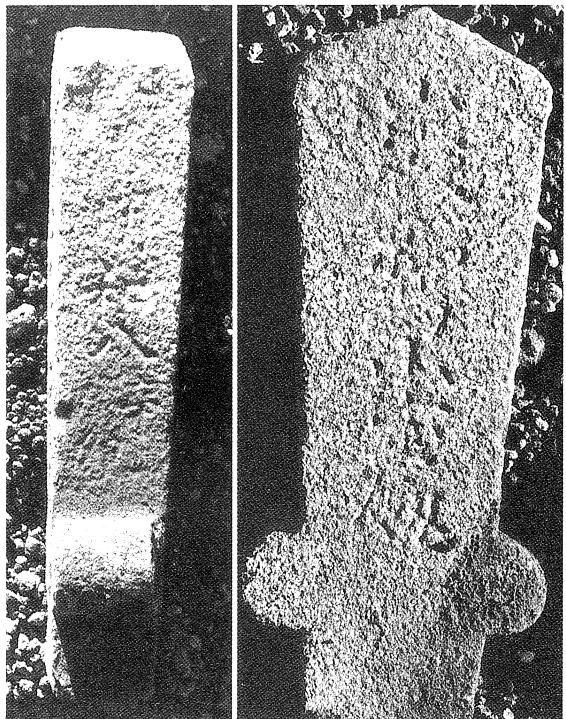
一七七一年の最古の造立から一八〇二年までは、一王子の庚申供養道標を除くと、全て山頂か山頂直下の不動平にあり、その内容は石祠、ゴンゲンサマ、石宝剣、石仏である。このことはこの時期に奥宮を中心として石造物が奉納され整備されたことを示している。山頂には本来お宮が無く「ただちに山を神体とあがめ奉り候」（円蔵坊記録・天保十年、『巖鷲山記』所載）とあるが、江戸後期になると石碑造立が流行し、山頂にも石造物が奉納され、そのことが拝所を明確にし、石造物奉納を増幅させていったものであろう。

#### 第二期 参詣道拝所の整備期（文政・天保年間）

この時期は麓から山頂までの参詣道全般に石造物が建てられた時期である。先ず文政二年には登山道入口の関門である改所に「奥の富士」の



清水権現の十一面觀音立像（嘉永二年）



碑が建てられた。『内史略』文政二年の頃に「巖鷲山へ参詣道するべの碑を麓より頂上迄十本建。信仰の町人共寄附也。即ち一合目より一升目迄也。頂上の一升目は大慈寺八世惠觀和尚寄附也。」とあつて一合目、二合目を示す道程石が設置されたことがわかる。柳沢口登山道に現存する道程石には年号がないが江戸期のものである。次いで文政五年には平笠口に道程石が設けられ、これは九基現存している。また、翌六年には平笠不動に接待小屋が設けられたことが石宝剣の銘によつて知られる。『内史略』の前掲箇所に続いて「この時、山上に参詣の者休息所共建。是又諸人の寄附也」とあり、柳沢口の不動平にも文政二年頃に小屋が建てられたことがわかる。沼宮内接待小屋がこれであろう。文政十一年には一合目笠詰（笠注連）権現の石祠が建てられ、天保年間に入ると雪石口・平笠口の新山宮（現岩手山神社）に初めて石燈籠が建てられている。現存はしないが柳沢新山宮にもこの頃には石造物が奉納されていたことであろう。

### 第三期 巖鷲山信仰の高揚期（弘化～慶応年間）

幕末のこの時期は神仏習合の巖鷲山信仰が最も高揚した時期である。お鉢の清水権現や七合目鉢立権現、八合目接待権現にも石祠や石仏が置かれ、分レには巖鷲山の入口を示す立派な追分石が建てられた。この時期を象徴するものは盛岡購中による三十三觀音石像の造立（安政四年）であろう。この時の賑いは『内史略』に記されているが、同時に「麓より御殿（山頂御室）迄の間、参詣の道しるべ」も建てたとあり、この時も道程石が設置されている。

この時期は前期を受けて拝所の整備が一段と進み、参詣者が各拝所で唱える祈禱詞もこの頃に現行の形に整えられたものであろう。



中央火口丘妙高山 右手前は三十三観音石像

#### 第四期 明治維新による低迷期（明治前期・明治二〇年頃まで）

この時期の造立はわずかに柳沢岩手山神社の明治十年狛犬一件のみである。これは維新政府の神仏分離政策により、巣鴨山大権現号が廃され、修驗が廃止となり宗教活動が著しく阻害され、一般人の岩手山への信仰心も冷え切つてしまつたためであろう。

#### 第五期 神社神道の高揚期（明治後期～昭和前期）

再び石造物が増えるのは日清戦争以後である。日露戦争の後は急速に岩手山神社の復興気運が高まり、柳沢岩手山神社は明治四十一年に社殿を修築、四十三年に岩手山一萬講社を結成、大正四年には北白川宮の登拝をみて一層盛上り、翌五年には県社に昇格した。このような情勢を反映して、各岩手山神社や奥宮には石燈籠や石鳥居が多く建てられている。また、武運長久祈願や紀元二千六百年奉祝関連の建碑も多い。

#### 第六期 終戦による断絶と新生期（昭和二〇年以降）

終戦後初の建碑は昭和三十九年であり、実に二〇年の空白があった。

これは戦前の岩手山神社信仰が国家神道と不可分の関係にあり、敗戦によってその拠りどころを失つたためであろう。その後登山関係の造立が増え、岩手山登山は信仰とは関係の無いスポーツとして発展してきた状況を反映している。

岩手山神社も再び地元の人々によつて石造物が奉納され、再興されつつある。但し、零石口岩手山神社の岩鷲山新山宮由来碑（昭和五十六年）にみられるように、戦前の国家神道への單なる回帰ではなく、江戸後期の素朴な巣鴨山信仰的要素がうかがわせている。

造立年代順一覧（紀年銘のあるもののみ）

																		順位	石碑No.			
																		西暦	紀年			
21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
4	204 ・ 205	241	24	172	225	51 ・ 52	209 ・ 232	113	22	55	50	112	5	160	179	227	180	116	166	181		
一八四七	一八三八	一八三三	一八二八	一八二七	一八二三	〃	一八二〇	一八一九	〃	一八〇二	一八〇一	〃	享和 2 ・ 5 ・ 吉	文政 2 ・ 5 ・ 吉	〃	2 ・ 5 ・ 吉	奥の富士	〔浮彫不動明王立像〕	〔浮彫不動明王立像〕	〔浮彫不動明王立像〕	〔浮彫不動明王立像〕	〔浮彫不動明王立像〕
弘化 4 ・ 5 ・ 吉	弘化 9 ・ 7 ・ 吉	天保 4 ・ 5 ・ 吉	11 ・ 5 ・ 吉	10 ・ 5	6 ・ 5	5 ・ 5	21	27	5	5	3	5	吉	〔標柱〕	〔標柱〕	〔標柱〕	〔標柱〕	〔標柱〕	〔標柱〕			
巖鷲山	〔石燈籠〕	〔石燈籠〕	〔石燈籠〕	〔石燈籠〕	〔石燈籠〕	〔石燈籠〕	〔石燈籠〕	〔石燈籠〕	〔石燈籠〕	〔石燈籠〕	〔石燈籠〕	〔石燈籠〕	〔石燈籠〕	〔石燈籠〕	〔石燈籠〕	〔石燈籠〕	〔石燈籠〕	〔石燈籠〕				
柳沢口	平笠口	雪石口	柳沢口	山頂	平笠口	柳沢口	平笠口	山頂	山頂	御不動	御不動	お鉢	改所・受取権現	柳沢口	山頂	柳沢口	山頂	山頂	山頂			
二王子	岩手山神社	岩手山神社	一合目・笠詰権現	一合目・笠詰権現	一合目・笠詰権現	一合目・笠詰権現	一合目・笠詰権現	一合目・笠詰権現	一合目・笠詰権現	一合目・笠詰権現	一合目・笠詰権現	一合目・笠詰権現	一合目・笠詰権現	一合目・笠詰権現	一合目・笠詰権現	一合目・笠詰権現	一合目・笠詰権現	一合目・笠詰権現				

																				順位	
42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	順位
173 174	16	183 184	245 246	7 8	214	167	194 195	198 199	243 244	185 186	53 54	149	63 148	40	2	192 193	237	47	56	143	石碑No.
一八九九	"	一八九六	一八九〇	一八七七	"	"	一八六六	一八六五	一八五九	"	一八五八	"	一八五七	"	一八五六	一八五五	一八五一	一八五四	一八四九	西曆	
"	"	"	明治 32	29 旧5 吉	23 5 吉	10 2 5 吉	"	"	慶応 2 6 吉	1 5 吉	6	5 5 吉	4 5 吉	"	27	安政 2 3 3 吉	2 3 5 吉	嘉永 2 3 5 吉	紀念		
〔狗 大〕	奉納	〔石 宝劍〕	御神燈	〔石 燈籠〕	〔石 燈籠〕	〔狗 大〕	〔石 祠〕	〔石 燈籠〕	〔石 燈籠〕	〔石 燈籠〕	〔石 燈籠〕	〔石 燈籠〕	〔石 燈籠〕	〔石 燈籠〕	〔石 燈籠〕	〔石 燈籠〕	〔石 燈籠〕	〔石 燈籠〕	〔石 燈籠〕	〔石 燈籠〕	
山頂	柳沢口	山頂	零石口	柳沢口	平笠口	山頂	"	平笠口	零石口	山頂	柳沢口	"	山頂	"	柳沢口	平笠口	零石口	岩手山神社	山頂	地区	
奥宮	岩手山神社	奥宮	岩手山神社	岩手山神社	駒形權現	奥宮	岩手山神社	岩手山神社	岩手山神社	奥宮	奥宮	奥宮	奥宮	御不動	御不動	御不動	御不動	御不動	御不動	地點	

																			順位		
																			石碑No.		
																			西暦		
63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	
120	18	61	188	60	3	9 ・ 10	215	225	47	176 ・ 177	11	6	189	14 ・ 15	65 ・ 66	182	61	62 ・ 147	234	161	
一九三一	一九三〇	"	"	一九二九	一九二七	一九二六	"	一九二三	一九二〇	一九一九	一九一八	"	一九一六	"	一九一二	一九一〇	一九〇九	一九〇五	一九〇一		
" 7 ・ 7 ・ 3	" 5 ・ 8 ・ 3	" 4 ・ 9 ・ 8	" 4 ・ 9 ・ 5	昭和 2	15 ・ 5 ・ 20	" 12 ・ 7 ・ 吉	" 12 ・ 7 ・ 27	" 9 ・ 5 ・ 3	" 8 ・ 5 ・ 23	" 7 ・ 7 ・ 4	" 5 ・ 7 ・ 4	" 5 ・ 7 ・ 4	大正 5	" 45 ・ 7	" 45 ・ 5	" 43 ・ 27	" 42 ・ 7 ・ 25	" 39 ・ 4 ・ 4	" 38 ・ 5 ・ 27	明治 34 ・ 旧 5 ・ 27	
[石祠] 南無薬師如来 (薬師坐像あり)	[ゴンゲンサマ] 八幡神社	[標柱] 奉納縣社岩手山神社奥宮	[道標] 向正面下ル奥宮参道 左御鉢廻り道	[石鳥居]	[石燈籠] 奉納	[石祠] 駒形	[石燈籠] 奉納	[石寶劍] 奉納	[石宝劍] 奉納大聖不動明王	[ゴンゲンサマ]	[標柱] 岩手山神社	[石階]	[石燈籠] 奉納	[標柱] 岩手山神社	[石燈籠] 奉納	[石燈籠] 奉納	[石燈籠] 奉納	[ゴンゲンサマ]	[ゴンゲンサマ] 奥宮		
山頂	柳沢口	"	"	山頂	"	柳沢口	"	平笠口	柳沢口	山頂	"	柳沢口	山頂	柳沢口	"	"	"	山頂	山頂	地区	
頂上・薬師岳	馬返し	お鉢	奥宮	お鉢	分レ	岩手山神社	駒形権現	平笠不動	八合目・攝待権現	奥宮	岩手山神社	奥宮	岩手山神社	お鉢	お鉢	お鉢	お鉢	お鉢	奥宮	地點	

順位	石碑No.	西暦	紀年	主銘(種類)		地区	地点																		
				西暦	紀年																				
85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	昭和9・旧5・27	〔石燈籠〕奉納	〔石燈籠〕奉納	〔石燈籠〕奉納
233	242	20	220	19	206	21	208	195 ・ 196	207	17	71	150	247	190	235	200 ・ 201	191	170	175	239 ・ 240	237 ・ 238	西暦	西暦	西暦	
一九八三	一九八一	一九七九	一九七七	一九七五	(一) 〃	一九七一	一九七〇	〃	一九六七	一九六四	一九四三	〃	〃	〃	一九四〇	〃	一九三九	一九三七	一九三六	一九三四	一九三四	西暦	西暦	西暦	
〃	58 ・ 7 ・ 吉	〃 56 ・ 11 ・ 吉	〃 52 ・ 7	〃 50 ・ 8	〃 46 ・ 5 ・ 吉	〃 45 ・ 10	〃 45 ・ 10	〃 45 ・ 10	〃 42 ・ 12	〃 39 ・ 12	〃 18 ・ 9	〃 15	〃 15	〃 15 ・ 9	〃 14 ・ 10	〃 12 ・ 9	〃 11 ・ 16	〃 10 ・ 25	〃 9 ・ 27	昭和9・旧5・27	〔扁額〕巖手山	〔石宝劍〕奉納岩手山	〔石宝劍〕奉納岩手山		
〔標柱〕	岩手山神社	鎮守奉獻	岩驚山新山宮由來	山紫水明風俗淳朴之所	滝沢村山岳会創立十五周年記念碑	〔石祠〕	第10回村民登山大会記念	誠実・明朗・躍進	岩手山新山神社	〔聖観音立像〕	巖手山神社植林記念碑	巖手山神社	〔石燈籠〕巖手山神社	岩手山登山道路改良記念	〔浮彫不動明王立像〕	武運長久祈願	天壞無窮	北白川宮成久王殿下御登拝記念碑	大正天皇御即位記念神林碑	皇軍將兵武運長久祈願	〔狛犬〕奉納	〔狛犬〕奉納	〔狛犬〕奉納		
〃	零石口	柳沢口	平笠口	柳沢口	平笠口	柳沢口	〃	〃	平笠口	柳沢口	〃	山頂	零石口	山頂	奥宮	山頂	零石口	平笠口	山頂	奥宮	零石口	零石口	零石口		
岩手山神社	岩手山神社	馬返し	三十六童子	馬返し	上坊岩手山神社	上坊岩手山神社	上坊岩手山神社	上坊岩手山神社	上坊岩手山神社	上坊岩手山神社	上坊岩手山神社	上坊岩手山神社	上坊岩手山神社	上坊岩手山神社	上坊岩手山神社	上坊岩手山神社	上坊岩手山神社	上坊岩手山神社	上坊岩手山神社	上坊岩手山神社	岩手山神社	岩手山神社			

(四表)

地点別・造立年代別造立件数

計	雪石口		平笠口			山頂			柳沢口					地點		時代	紀年銘	
	登 山 道	岩 手 山 神 社	(計)	平 笠 不 動	登 山 道	岩 手 山 神 社	(計)	奥 宮	頂 上	お 鉢	(計)	御 不 動	登 山 道	馬 返 し	岩 手 山 神 社	分 レ ・ 一 王 子		
																1751～ 60	江戸	紀年銘のあるもの・年代が特定できるもの
																61～ 70		
3							(3)	2		1						71～ 80		
1							(1)	1								81～ 90		
3							(2)	2			(1)					91～1800		
4							(1)			1	(3)	2				1801～ 10		
2							(1)			1	(1)		1			.11～ 20		
5			(2)	1	1		(1)	1			(2)	1	1			21～ 30		
2	(1)	1	(1)			1										31～ 40		
3							(1)			1	(2)	1				41～ 50		
9	(2)	2	(1)			1	(2)	1		1	(4)	1	2			51～ 60	明治	大正
4			(3)		1	2	(1)	1								61～ 70		
1											(1)			1		71～ 80		
2	(1)	1	(1)	1												81～ 90		
3							(2)	2			(1)			1		91～1900		
5	(1)	1					(4)	2		2						1901～ 10		
7							(3)	2		1	(4)		1	3		11～ 20		
8			(2)	1	1		(3)	1		2	(3)		1	1	1	21～ 30		
9	(2)	1	1	(1)		1	(6)	4	1	1						31～ 40		
3	(2)	2					(1)			1						41～ 50		
	(2)															51～ 60	昭和	和
5			(3)			3					(2)		2			61～ 70		
4			(2)		1	1					(2)		2			71～ 80		
2	(2)	2														81～		
7			(2)	1		1	(3)	2		1	(2)	1	1			江戸期(推定)		
8			(1)			1	(4)	1	2	1	(3)		2		1	明治以降(〃)	な紀い年も銘のの	明
34	(2)	2	(7)	3	4		(20)	14	3	3	(5)	2	3		1	不 明		
134	(13)	3	10	(26)	7	8	11	(59)	36	6	17	(36)	8	11	5	7	5	計

## 四、柳沢口の石造文化財

### 概 説

範囲 分レから柳沢岩手山神社・馬返し・登山道を経て山頂直下の不動平・御不動までを「柳沢口」とした。

造立数 柳沢口の石造文化財の造立数は三六件、五九基で最も多い。これは拝所が所々に設けられていることと道程石が建てられていることによる。

分レ 鹿角街道からの分岐点であり、国道四号線と東北本線の開通後は岩手山登山道の入口となつた。岩手山神社の大きな石鳥居（No.3、昭和2）の下に田村大明神碑（No.1、文政4）と巖鷲山碑（No.2、安政3）があり、共に追分石を兼ね、岩手山の入口を示している。巖鷲山大権現はもと坂上田村麻呂伝説により田村大明神とも号されていた。

一王子（一王子権現） ここから神域とされ、かつては社堂がありここで祈禱詞を唱えてから新山堂へ向つた。現在は巖鷲山碑（No.4、弘安4）と庚申塔兼追分石（No.5、寛政12）がある。

岩手山神社（新山堂、新山権現） 里宮である。ここで山役錢（戦前は十銭）を徴収していた。岩手山正参道の里宮として早くから整備されたところであるが、現存する石造物は明治以降のものしかない。江戸期にも造立されたはずであるが、維新後の神仏分離と神社としての整備等のために整理されたものであろう。

馬返し（馬止め） 堀野から急坂な山道にかかるところで、現在も車道の終点で、実質的な登山口となつていて、ここには拝所はない。全て

昭和の造立で、岩手国体記念（No.21、昭和45）や第10回村民登山大会記念（No.19、昭和50）など登山関係の碑が多い。

改 所（受取所・受取権現） 馬止めから登山道は谷へ下る。その急坂を「解體坂」といい、鎖場があつた。ここで草鞋をはき替え唱名を唱え身心の汚れを捨てたと云う。まもなく改所の小屋があり不淨の者を改め、水錢（戦前は五銭）を徴収していた。大正の初頃までこの山番はチヨンマゲ姿であったという。ここには拝所があり祈祷詞に受取権現とある

が、現存する石造物は「奥の富士」碑（No.22、文政2）一基のみである。角柱の立派な碑で側面に俳句と漢詩が刻まれている。ここから急坂になり「受取坂」といは鎖場があつた。解體坂、受取坂とも昭和十年の岩手山測候所建設にあたり道がつけ替えられた。『巖手山記』に、受取坂を登り切つた所に一合目の標石（道程石）があり、頂上を一升目として五勺目毎に標石が建てられているが、これは旧藩時代に盛岡穀町藤島長兵衛が獨力で建設したもの、という伝えを載せているが、その一勺目の道程石とはNo.22「奥の富士」（穀丁高屋長兵衛とある）碑のことであろうか。一合目（笠詰権現・笠注連権現） 左下に深い谷を見下してその縁を通る「桶の椽」を過ぎると一合目に着く。笠詰権現の石祠（No.24、文政11）があり、中にゴンゲンサマ（No.25）を祀っている。一合目を示す道程石は新しいものである。

二合目 二合五夕目 拝所ではなく、道程石のみが建てられている。柳

沢口の道程石には新しいものと江戸期のものがある。No.28・30は江戸期のもので「紺屋丁市兵衛」など複数の奉納者名が刻まれている。「改所」の項で紹介した『巖手山記』の伝える「穀町藤島長兵衛」独力建設による道程石ではない。二合五夕目にNo.30とともにあるNo.29は下部が失われていて決定できないが、あるいはこれが藤島長兵衛の造立したものであ

ろうか。他の箇所では四合目No.33、八合目44、九合五夕目No.72には奉納者の刻名がなく、その可能性のあるものである。

**三合目（御立場権現・小立場権現）** 祈祷詞にある拝所であるが、新しい道程石しか確認できなかつた。

**四合目** 拝所はなく道程石三基のみであるが、No.32は奉納者名入りの江戸期のもの、No.33は下部が欠けているが江戸期とみられるもの、No.34は新しいものである。

**五合目** ここも拝所はなく道程石三基のみであるが、うち一基は「五夕」以下しかない。

**六合目（御藏権現）** 「御藏石」という巨岩があり、拝所になつていてるが、ここも江戸期の道程石No.39と新しいものNo.38しか確認できなかつた。

**七合目（鉢立権現）** 長い急勾配の登山路がやや平坦になるところで頂上も見え安堵する地点である。ここは拝所で安政三年の石祠があり、石工八日丁長太の名がみえる。長太は翌四年に盛岡講中奉納の三十三觀音像No.63—No.148を刻んだ石工である。ほかに道程石二基がある。

**八合目（沼宮内権現）** 八合目小屋の前に新しい道程石No.43があり、そこから三〇mほど先に、江戸期の八合目道程石No.44がある。ここがかつての沼宮内接待所跡である。前述の通り(15頁)『内史略』文政二年(一八一九)の項に「此時山上に參詣の者休息所共建。是又諸人の寄附也」と小屋の建設の事が見え、さらに割註で「參詣時刻後れる者 或は暁の御来迎を拝せんとする者 多く此休息所に一宿の為也と云」とその目的を記している。沼宮内の講中により運営されたので沼宮内接待と称したという。ここに「用地八丁四方 沼宮内接待所」と刻む碑(No.45)がある。八丁四方とは方八丁(一辺約八七〇mの正方形)のことと律令時代の官衙(役所)区割りと同じである。

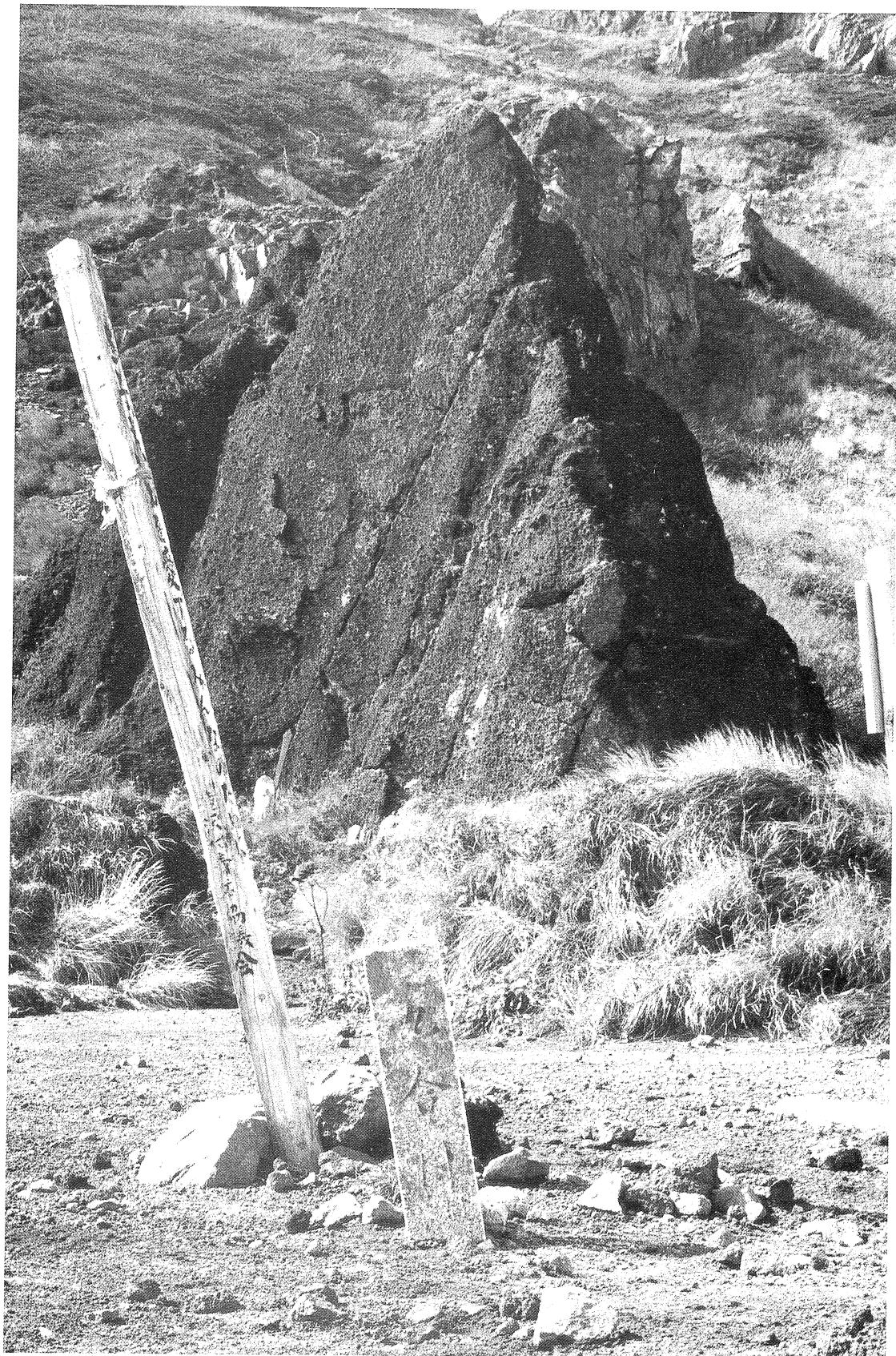
また、ここも拝所沼宮内権現で、石祠(嘉永4、No.46)とゴンゲンサマ(大正9、No.47)がある。接待所の建設が文政二年であれば拝所としての沼宮内権現の成立はその後であろうから、現行の祈祷詞の成立も江戸後末期であろう。

No.44八合目道程石には奉納者名がない。『巖手山記』の伝える穀町藤島長兵衛独力建設によるものであろうか。あるいは『内史略』に伝える接待小屋建設と同じ文政二年か、または、盛岡講中三十三觀音奉納と同じ安政四年の造立であろうか。

**八合五夕目** 八合目小屋から九合目御不動までは殆んど平坦で不動平と呼ばれていて、途中に仙北御山講中建立の道程石がある。

**九合目（御不動権現）** 山頂を右手に見上げながらハイマツの茂る不動平を進むと旧外輪山である鬼ヶ城が始まるあたりに屹立する尖頭の大岩があり、これを不動石と呼び御不動権現として拝んでいる。ここには浮彫の不動明王三体があり、No.50享和二年、No.55同年、No.56嘉永三年と古いものが多く、岩手山の拝所の中で御不動は奥宮とともに早くから成立了ことを示している。石燈籠二組も文政(五年か)と安政五年の建立である。戦前は岩根神社とも称していた。すぐ近くに不動小屋があり、南からの零石口登山道はここで合流する。

御不動のすぐ前に九合目の道程石があり、ここから急勾配の直登路となり約三〇分で山頂お鉢(火口壁)に取付く。



不動岩「御不動」、直下に不動明王石像・石燈籠がある。手前は「九合目」道標石

# 柳沢登山口の祈禱詞（『巖手山記』による）

祈禱詞には登山道の拝所順が示されているので参考のため掲げる。

礼拝

八幡菩薩（お鉢）

新山権現（お鉢・平笠口取付）

熊野権現（お鉢・平笠口取付）

新山権現（お鉢・平笠口取付）

南無大金剛童子ノ一時礼拝

オシメニハ八大金剛童子ノ一時礼拝

薬師如來（頂上薬師岳）

妙光ヶ岳（お鉢から内部の中央火口丘）

南無精進菩薩ノ一時礼拝

南無禮佛（お鉢）

南無岩手山大権現シメノゴウ御峯ハ三十六童子御宮本社ハ三社ノ権現

田村明神ノギノ王子一時二御本尊ワラハバキ一時礼拝

七瀧権現（奥宮）

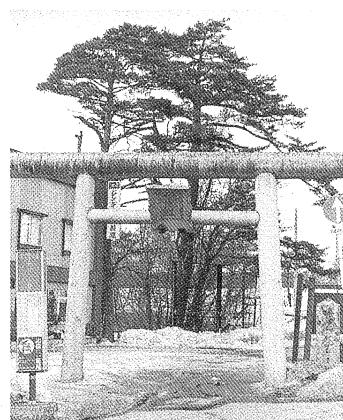
南無帰命頂礼懺悔々々六根罪消南無大悲ノ松山地藏ノ一時礼拝

南無空二ハ梵天帝釈日流日月八流雷王子天皇天皇雷日天月天

南無帰命頂礼懺悔々々六根罪消南無大悲ノ一ノ王子権現一時礼拝  
新山権現（新山堂・岩手山神社）  
南無帰命頂礼懺悔々々六根罪消南無大悲ノ一ノ王子権現一時礼拝  
新山権現（改所・受取所）  
受取権現（笠注連権現・一合目）  
南無帰命頂礼懺悔々々六根罪消南無大悲ノ受取権現一時礼拝  
笠詰権現（笠注連権現・一合目）  
南無帰命頂礼懺悔々々六根罪消南無大悲ノ笠詰権現一時礼拝  
小立場権現（御立場権現・三合目）  
南無帰命頂礼懺悔々々六根罪消南無大悲ノ小立場権現一時礼拝  
御藏権現（六合目）  
南無帰命頂礼懺悔々々六根罪消南無大悲ノ御藏権現一時礼拝  
沼宮内権現（七合目）  
南無帰命頂礼懺悔々々六根罪消南無大悲ノ沼宮内権現一時礼拝  
御不動権現（九合目）  
南無大慈大悲ノ不動如來上り夜叉下り妙見王子御注連二八大金剛童子ノ一時礼拝  
虚空藏権現（お鉢・柳沢口取付か）  
南無帰命頂礼懺悔々々六根罪消南無大悲ノ虚空藏権現一時礼拝  
月山権現（お鉢）  
南無ツキ山月山鳥海羽黒ハ二所ノ権現御注連二八大金剛童子ノ一時礼拝

第五表 柳沢口の石造文化財一覧

											石碑No.	柳沢口地點
16	14 15	12 13	11	9 10	7 8	6	5	4	3	2	1	
新岩手山神社							一王子	分レ				
11	9 10	7 8	6	4 5	2 3	1	2	1	3	2	1	石地碑点No.内 1
〔石宝剣〕 奉納	(石燈籠) (竿石)	(狗犬) (石階)	(石燈籠) (竿石)	(狗犬) (台座)	(標柱) 巖手山	(大正十五年七月 奉納)	申 五月 吉祥日	弘化四丁未歳 鷲山	〔石鳥居〕 奉納 岩手山神社 中村巳吉	五 穀 成 就 （人名）	奉納正一位田村大明神 卯五月吉日	文化四年 右かつ之道 左おん山道
明治四十五年七月 旧 明治二十五年五月吉日	(台座横書) 岩手縣二戸郡一戸町本町八九番地	大正七年七月 (人名あり)	大正十五年七月吉辰	明治十丁丑歳 五月吉日	大正五年七月四日 奉納	大正十五年七月四日 神社	十月庚寅 申供 養	〔扁額〕 〔脚部〕 奉納 花卷市 中村巳吉	五 鷲 山 申 月 吉 祥 日 申 供 養 大正五年七月四日 奉納 花卷市 中村巳吉	五 穀 成 就 （人名） （人名） 昭和貳年丁卯五月二十日 中村巳吉	奉納正一位田村大明神 卯五月吉日	文化四年 右かつ之道 左おん山道
一一九二六	一一九一二 明	一一九一八	一一九二六	一一八七七	一一九一六	一一八〇〇	一一八四七	一一九二六	一一八五六	一一八〇七	年代	
53.5	238	像高55		216	像高39	153		112		179	83	高寸
15				台高68	29		68			44	52	巾法
					27.5		28		35.5			奥行cm
		他の銘は不明。		高橋徳次郎町ほか。	頭取葺手町	若干移動。 一王子商店前分岐。 18)あり。	二十三夜塔（明治					備考



3



2



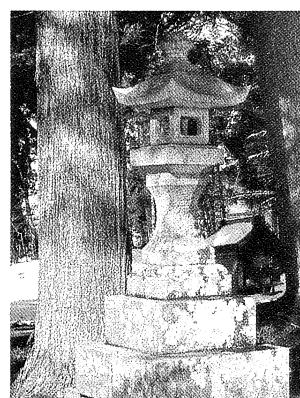
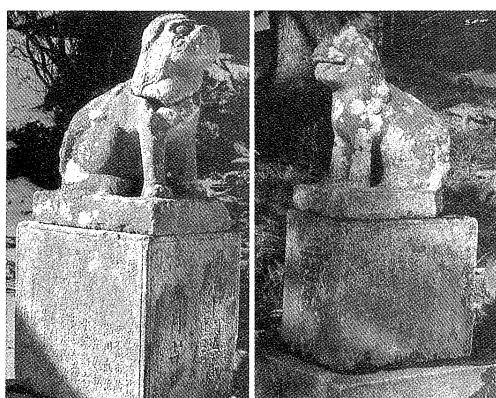
1



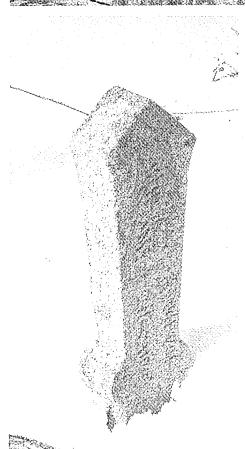
5



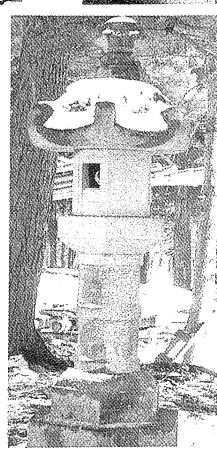
4

9  
107  
8

6

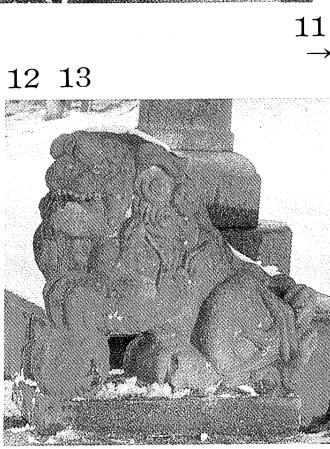


16



14

15 12 13



11



石碑No.	柳沢口							
年代	寸法							
奥行cm	備考							
23	22	21	20	19	18	17		
笠一 詰合 権目 現	受改 取 權所 現			馬 返 し			地點	
1	1	5	4	3	2	1	石碑点 No.内	
〔道程石〕 一合目	(裏面) 〔左側〕 奥の富士 (漢詩あり) 文政二乙卯 櫻仲夏甘露日	(右側) 〔俳句あり〕 奥の富士 五穀成全 國家安全 敬白	躍明誠 進朗実 岩手国体記念 滝沢村	(横書) 山淳朴之明風俗 (裏面) 滝沢村山岳会四十周年記念之碑 昭和四年十一月吉祥日建立 柳村兼見謹書	(横書) 第10回 村民登山大会記念 滝沢村長年8月 柳村兼見謹書 昭和50年8月 柳村兼見謹書	〔ゴンゲンサマ〕 (下部角柱) 巖手富士 昭和五年八月八日 三十一回登山記念 大坊直治 昭和五年八月八日 六十七才 十才	建立 岩手山登山道路改良記念 施工者 陸上自衛隊第三〇九施設隊 西根町 盛岡市 玉山村 滝沢村 昭和三十九年十二月 昭和三十九年十二月 施設隊	銘文・種類
	一八一九	一九七〇	一九七九	一九七五	一九三〇	一九六四	年代	
37.5	138	57	92	90	柱122 ゴンゲン 20	110	高寸	
15	35.5	70	122	120	33 26	19	巾法	
15	35	20	11	33	24 25	17	奥行 cm	
新しい標柱	愛する。 漢詩と読解困難のため割 少年の像の前にあ る。号あり。 〔俳句は「巴山」の 岳会員名あり。 裏面に趣旨文と山 の写真参照)						備考	

20



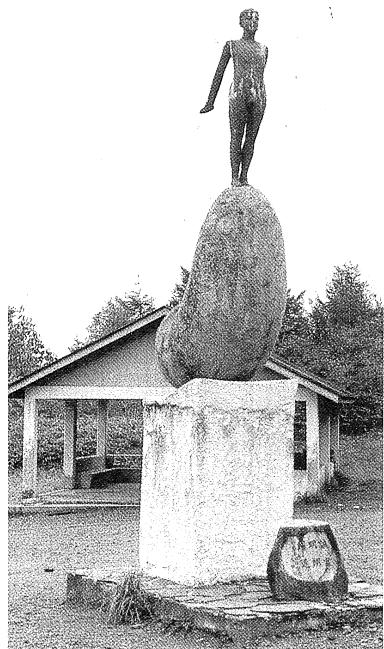
18



17



21



19



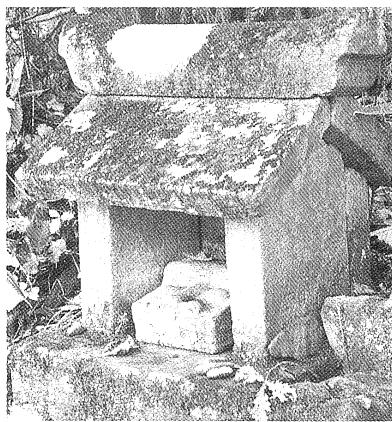
22



23



31	30	29	28	27	26	25	24	石碑No.	柳沢口
御三立場合権現目	二合五夕目	二合目			(笠詰權現)	一合現目		地點	点
1	2	1	1	5	4	3	2	石碑地點No.	3
〔道程石〕三合目	〔道程石〕二合五夕 六日丁 高屋全助	〔道程石〕二回 紺屋丁 米谷甚兵衛	〔道程石〕二合目 紺屋丁 市兵衛	〔道標〕 左一本木 右盛岡	岩手毎日新聞社 寄付者 米沢勘一	〔ゴンゲンサマ〕	〔石祠〕 別当佐次右工門 (正面奥壁)文政十一 五月吉日年 大權現	銘文・種類	
	(江戸)		(江戸)			(一八二八)	一八二八	年代	
40	84	33	64	38	11	15	81	高寸	
15	15	15	15	15.5	23	20	73	巾法	
15	12	13	14	12.5	24	24	57	奥行cm	
新しい標柱					祠がある。もと石祠があつたらしい。	置21の石祠の中に安		備考	

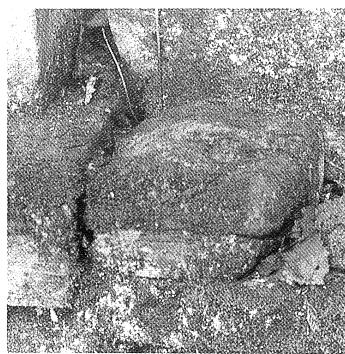


24 25



26

一合目笠詰権現



27



27



↑ 28

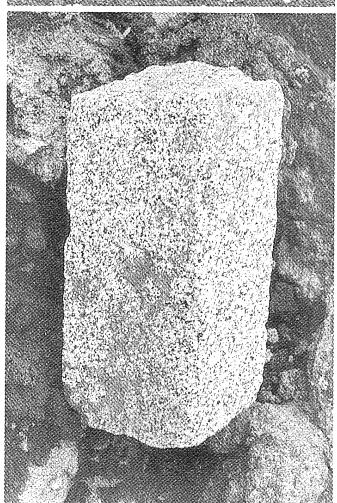
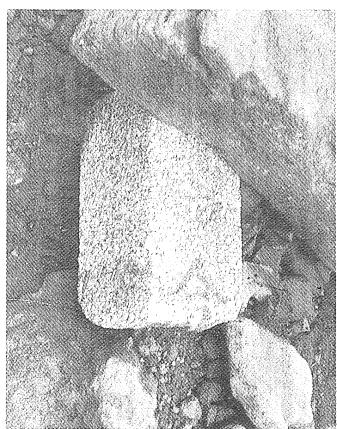


← 31



→ 30

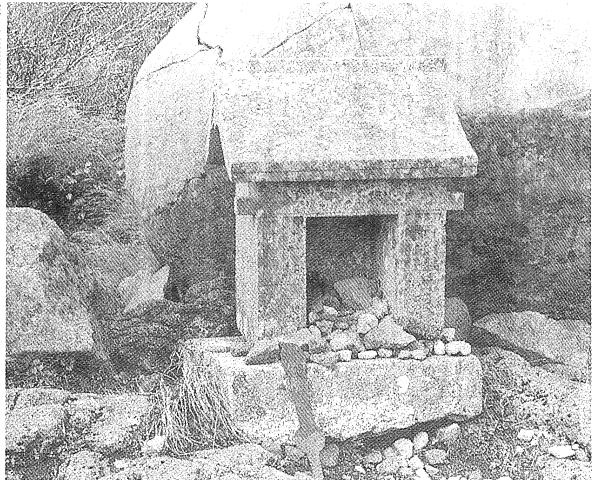
39	38	37	36	35	34	33	32	石 No. 碑	柳 地 点
御六 藏合 權現目	五 合 目				四 合 目				口
2	1	3	2	1	3	2	1	石地 碑点 No.内	4
〔道程石〕 六合目 新道 蠟燭師	〔道程石〕 六合目	〔道程石〕 五合目	〔道程石〕 （上欠） 米屋彌助 田島屋	〔道程石〕 （五夕） 同 大工	〔道程石〕 五合目 穀町 大工 金助	〔道程石〕 四合目	〔道程石〕 四合目 （以下欠） 大工 重之助	〔道程石〕 四合目 翻屋丁 油屋	銘文 ・ 〔種類〕
					（江戸）			（江戸）	年代
65	66	47	33	52	56	28	72	高 寸	
15.5	15	15	15	15	15	15	16	巾 法	
12	15	12	11.5	12.5	15	12.5	12	奥 行 cm	
	//	新しい 標柱			新しい 標柱				備 考



48	47	46	45	44	43	42	41	40	石碑No.	柳沢口
八合五夕目	沼八宮内合権現目					小八屋合前目	鉾七立合権現目			地點
1	4	3	2	1	1	3	2	1	石碑点No.内	5
〔道程石〕 八合五夕 仙北御山講中	〔ゴンゲンサマ〕 七月三日 大正九年	〔石祠〕 荷箪□ 嘉永四亥 五月吉 小吉野衛門 工兵助吉	四方用地 八丁 摂沼待宮所内 嘉永四亥 五月吉 小吉野衛門 工兵助吉	〔道程石〕 八合目 八合目	〔道程石〕 八合目	〔道程石〕 七合目 七合目	〔道程石〕 七合目 見孫村作中	〔石祠〕 (前面) (左側) (不明) 納奉	(右側) 世話人 八四同同同八 日家 丁丁丁丁丁丁 □德政画藤福春 助助右吉吉固松 工門 八安面 日五政 石丁月三 長工吉辰 太天	銘文・種類
	一九二〇	一八五一						一八五六		年代
78	20	51	78	54	42	50	73	67	高寸	
16	25	38	80	15	15.5	12	15.5	55	巾法	
12.5	33	38		12	15	15.5	12.5	49	奥行cm	
					新しい標柱	新しい標柱	折損。合のところで			備考



42



41



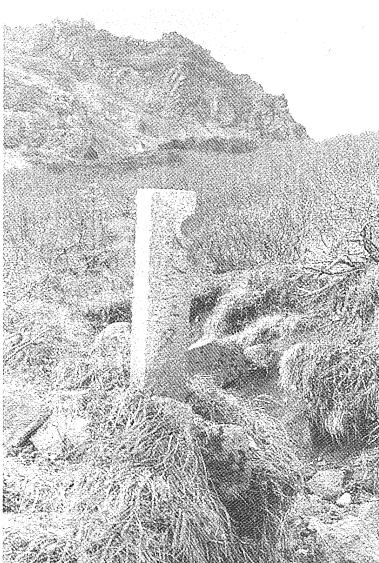
45



44



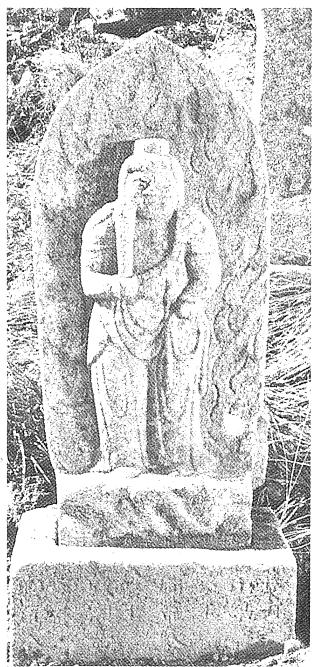
43

←  
48

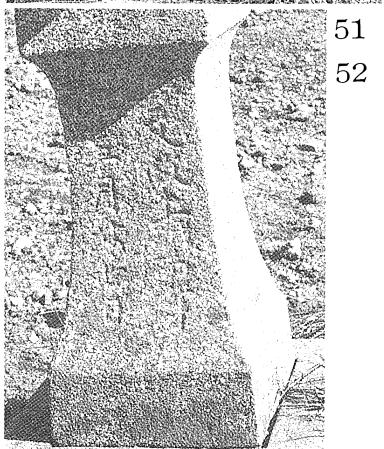
47

46

56	55	54	53	51 · 52	50	49	石 No. 碑	柳
御 九 不 合 動 目							地 点	沢 口
8	7	6	5	3 · 4	2	1	石地 碑点 No.内	6
〔浮彫不動明王坐像〕 志和新田村全□因	〔浮彫不動明王立像〕 嘉永三戊五月吉日	〔浮彫不動明王立像〕 享和二年 五月吉日	〔石燈籠一対〕 別當 円蔵院 石工 武兵衛	(竿石) 奉 五穀成就 国家安全 納 五月吉日 安政五戊午年 文政 八講台 圓石日中石 工丁	〔石燈籠一対〕 (正面) (左側) 國 嚴 五 穀 鷲 成 安 山 就 五月廿七 午 年 全 山 就 五月廿七 午 年 全 山 就	〔浮彫不動明王立像〕 小田島 八幡丁 篠木村正面 丁 原 面 年 和 享 五 月 吉 日 工 石 工 兵 清 (不明)	〔道程石〕 材木丁 九合目	銘文 ・ 〔種類〕
一八五〇	一八〇二	一八五八		(一八二三)		一八〇二		年代
総 48 像 27.5	本体 71	像 46	100	60	116	本体 56	像 37	高 寸
総 29							15.5	巾 法
							12.5	奥行 cm
	台 高 14.5 cm	火袋を失う。	竿石・台石のみ。		台 高 11 cm			備 考



49



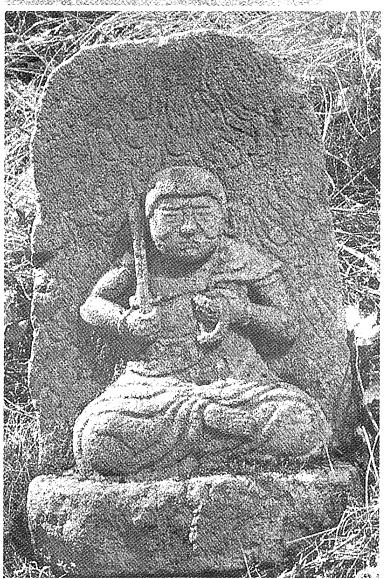
51

52

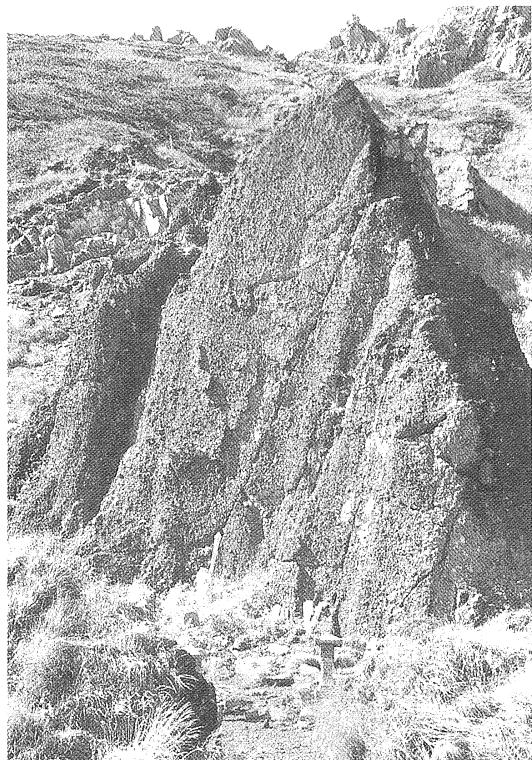


53

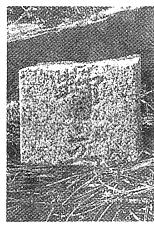
54

←  
56

↑ 55



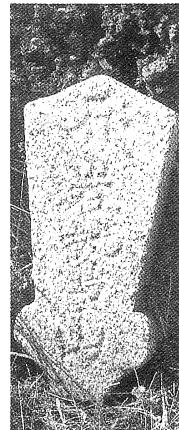
不動岩 「御不動」



59



58



57

59	58	57	石碑 No. 碑	柳 沢 口
御九 不合 動目			地 点	
			石碑 点 内 No.	7
11	10	9	石碑 点 内 No.	
(標柱) (上欠) 野立	(石宝劍) 不動明王 内村佐兵衛 (右側)定次 (下欠)	(石宝劍) (裏面) 大平 中平 中村圓五	銘文 ・ 種類	
		六 六 六 六	岩驚山 施主 平野村氏	
				年代
12	57	36.5	高 寸	
13	19	17.5	巾 法	
13.5	12	7	奥行 cm	
			備考	

## 五、山頂の石造文化財

### 概説

**範囲** 山頂の火口壁であるお鉢を左手に進み、最高地点薬師岳を経て、お鉢の内部（御殿）に入り、中央火口丘妙高岳の麓にある奥宮を経て再びお鉢の柳沢口取付きに戻るまでを「山頂」の範囲とした。

**造立数** 山頂の石造文化財の造立数は五九件、一三三基である。お鉢には二組の三十三観音石像が立ちならび、奥宮にはゴンゲンサマ十五頭をはじめ多くの石造物が奉納されている。

**お鉢・柳沢口取付（一升目・虚空蔵権現か）** お鉢取付地点の不動平側に石柱が倒れている。No.60道標（昭和4）がこれで、「向正面下ル奥宮参道 左御鉢廻り道」と刻まれている。ここからお鉢内部へ下れば奥宮はすぐなのであるが、参詣の道は左手にお鉢を進み、頂上薬師岳を踏破してから内部に入つて奥宮に向う。祈祷詞もその順であり、三十三観音石像もこの地点に第一番があり、お鉢上に並べられ、頂上を経て奥宮の側に第三十三番が建てられている。盛岡講中奉納三十三観音像は安政四年、花巻町中村巳吉奉納像は明治三九年（大正四年）の建立である（66頁以下参照）。この地点に石祠がありゴンゲンサマが祀られている。祈祷詞の順では、「虚空蔵権現」にあたる。

『内史略』によると文政二年に盛岡の町人により一合目から一升目まで道標十本が建てられ、「一升目は大慈寺八世恵觀和尚寄附也」とあるが（15頁参照）、この一升目の道程石は発見できなかつた。

**お鉢・柳沢取付・平笠口取付** お鉢内部の直下には噴火口「御室」が口



お鉢・柳沢口取付、左奥宮、右不動平



お鉢・平笠口取付「熊野権現」

を開け、その奥に頂上薬師岳が見える。お鉢の道筋には三十三觀音石像が御室に顔を向けてたち並んでいる。柳沢取付から平笠口取付までの石造物は殆んどがこの二組の三十三觀音で、この間の全石造物四〇基のうち盛岡講中奉納の觀音像は十六基、花巻中村巳吉奉納は二二基である。

また、この間の拝所として祈祷詞は「月山権現」と「八幡菩薩」を掲げている。月山権現を示す拝所は見つからないが、祈祷詞に「月山鳥羽黒」とあるところからこれら出羽の山岳のある方向のお鉢の西南部あたりに登り道がやや緩かになるところがあり、このあたりにあつたものであろうか。東側が見え御来迎を拝する頂上に対して西端にあたるこの場所は月を拝する意味を兼ねていても知れない。八幡菩薩は平笠口取付の手前に八幡神社の石祠（No.109・昭和4）があり、ここかも知れない。平笠口すぐ手前には享和元年の薬師如来坐像No.112がある。

**お鉢・平笠口取付（熊野権現）** 北口平笠不動からの登山道取付地点で安永年間の石祠No.116の中にゴンゲンサマが祀られ、No.114熊野大権現と刻む碑が建てられている。熊野権現の拝所である。熊野権現は紀伊國（和歌山県）の熊野の神で日本第一の靈場とされ、本宮、新宮、那智の三三所権現と称し、阿弥陀如来、薬師如来、觀音菩薩を本地としている。この三尊はNo.116石祠にも種子（仏・菩薩を表わす梵字）で刻まれているが（亂キリーグ阿弥陀、キベイ薬師、ササ觀音）、仏さまの中で古来最も人気のある三尊で、実はこの三尊は岩鷲山大権現の本地仏である。

**お鉢・平笠口取付～頂上** 頂上までは緩かな登りで、盛岡講中奉納三十三觀音像が二基、花巻中村巳吉奉納觀音が一基建てられている。  
**頂上薬師岳（薬師如來）** お鉢の北西端に岩手山の最高地点（標高二〇四〇・五m）があり、薬師岳と呼ばれている。岩鷲山大権現の本地三尊のうち薬師如來がこの峰にあてられ拝所となっている。石祠No.120の中に



お鉢・平笠口取付付近から頂上薬師岳を見る

薬師如来坐像が安置されているが昭和の奉納で、その他の石造物も古くはない。最も風雨にさらされる所なので欠損が早いせいであろうか。ここには三十三觀音像も見当らない。

**お鉢・頂上へ清水觀音** 頂上からお鉢廻りの道は急勾配の下り坂となる。内部の乳房形の中央火口丘妙高山が美しい。その麓に下りる地点に岩塊があり清水觀音（キヨミズサン）としている。この間の石造物は全て三十三觀音石像で、盛岡講中奉納七基、花巻町中村巳吉奉納五基の計十二基である。風化のため札番を読み取れないものもあるが、この地点の觀音像は札順通りに建てられていないものが多い。

**清水觀音** お鉢の内部を「御殿」（ごでん）と呼び、その入口にある岩塊（かい）が清水觀音で拝所となっている。ここには嘉永二年本丁八百屋勘之丞建立の十一一面觀音立像No.143があり、細部まで丁寧に彫つた優品である。

觀音菩薩は岩鷲山大権現本地三尊仏の一つであるが、特に清水觀音とされるのは、征夷大將軍坂上田村麻呂が東征の際、京都東山の清水觀音（清水寺・十一面觀音）に深く帰依し、私邸を寄進して伽藍（がらん）を興し、征夷を成し遂げた由緒によるものであろう。岩鷲山大権現は田村大明神とも号され、岩手山にまつわる田村麻呂伝説は多い。

そのほか盛岡三十三觀音二基と持経觀音像もある。

**清水觀音へ奥宮** 妙高山の麓の道は全く平坦で奥宮もすぐ近くにある。この間に三十三觀音の最終の札番の石像が並んでいる。花巻町中村巳吉奉納觀音は三十一番No.145、三十二番No.146、三十三番No.147と順に並び、盛岡講中奉納觀音は三十二番No.144があり、奥宮のすぐ手前の胎内潜りの岩の所に三十三番千手觀音立像No.148がある。この像には安政四年の年号があり八日丁新八他の名が刻まれている。同所には三十三觀音を刻んだ八日丁石工勘治子供長太の建立した碑No.149がある。柳沢口取付を起点にお

鉢に並べられた三十三觀音像は、奥宮をもつて詣り納めの三十三番とするのである。

**奥宮**（御本社）

妙高山の東南麓にあり、石積により奥殿・拝殿の如く二つに区画されている。奥殿の部分は一段高くつくられ、石祠とゴンゲンサマが祀られている。石祠は現在まで形を保っているのは二棟で、安永八年（一七七九）永井清太郎奉納のものNo.166と慶応二年（一八六六）零石町大和屋権治奉納のものNo.167である。『巖手山記』に「三祠の石殿並建されたるは即ち岩手山神社奥宮にして三柱の大神を祀る」とあり、近年まで三棟の石祠があつたことがわかる（一棟は崩壊）。岩手山神社の三神とは主神頭國魂大神・大穴牟遲命（大国主命）、宇迦之御魂命、倭建命で、この三神をそれぞれの石祠に祀つたものであるが、これは明治以降のことである。奥宮（御本社）の祈祷詞には「御宮本社は三社の権現」とあり、江戸後期には三祠の形ができ上がつていたことが知られる。ではこの三祠に祀っていたのは阿弥陀、薬師・觀音の岩鷲山大権現三本地仏であろうか。筆者は否と考える。零石では古来から中央の堂宇を零石の御本社と考えていたという（『岩手山』）。これは「零石町大和屋権治」奉納の石祠（慶応2、No.167）であろう。安永八年石祠No.166には「正一位岩鷲山大権現」とあり、おそらく当初はこの一祠で、次第にそれが他の御本社として石祠を奉納したか、あるいは田村明神として祀つたかして、三祠の形になつたものであろう。

石祠のまわりにゴンゲンサマが十五頭奉納されており、最古のものは

寛政十二年（一八〇〇）No.160である。そのほか奥殿にあたる場所には石宝剣（No.172文政10）や狛犬（No.173・174明治32）、石燈籠（No.176・177大正8）などが奉納されている。

奥殿の前、拝殿にあたる所は岩手山中で最も古い石造物が奉納されている地点である。即ち、明和八年（一七七一）「巖鷲山石宝剣」銘の石宝

剣No.181がそれである。また、No.180天明六年石宝剣、No.179寛政九年石宝剣も岩手山の中では最古の時期に属す。奥殿の石祠No.166もこの時期の建立であり、このことは岩手山の中で奥宮が信仰の場所として最初に整えられたことを示している（前述、14頁参照）。もつとも、前述の通り（13頁）、貞享三年（一六八六）の噴火以前に自光坊が阿弥陀・薬師・觀音（岩鷲山大権現本地三尊）の石仏を御殿（お鉢の内部）に建てており、同じく噴火関係文書に「御幣、山上に納め候事 岩屋焼崩れ、小社立て候も風烈にて罷成らず……」（『巖手山記』）とあり、当時既に石祠があつたことをうかがわせている。しかし、これらは別当などによる特別な例とみられ、それから八五年間は石造物が見当らず、岩鷲山信仰が一般化し、各拝所が整えられるのは一七〇〇年代の後半からである（13・14頁）。

社前の石造物は安政五年石燈籠No.35・36以外は全て明治以降で、もう一対の石燈籠No.33・34は明治二十九年、石鳥居No.32は明治四十三年であり、岩手山神社興隆期の建立である。社前でひときわ目を引く石塔は岩手中学校旗樹立記念の岩手山神社奥宮碑（昭和4、No.188）と、北白川宮御登拝記念碑（昭和15、No.190）である。前者は岩手山中最大の石材を用いた碑で高さが三四〇cmあり、後者は石材を積み重ねているが総高四二〇cm程で最大の石塔である。ともに岩手山神社の最盛期を象徴する石造物である。また、興味深いのは皇軍將兵武運長久祈願碑No.191である。「背負揚人」として二人の名があり、「石重量五十一貫」とある。五十一貫は一九一・二五kgに当たる。

奥宮は火口丘妙高山の麓にあり、丁度妙高山を拝むような位置関係にある。妙高山とは本来は仏教の世界観で世界の中心にある高山の名である。須弥山ともい、仏壇を須弥壇というのもこれに由来する。岩鷲山の三本地のうち、薬師は頂上「薬師岳」、觀音は「清水觀音」にあてられるが、「妙高山」こそ主尊阿弥陀如来にふさわしいものであろう。



「清水権現」十一面觀音石像（嘉永 2 年）

第六表 山頂の石造文化財一覧

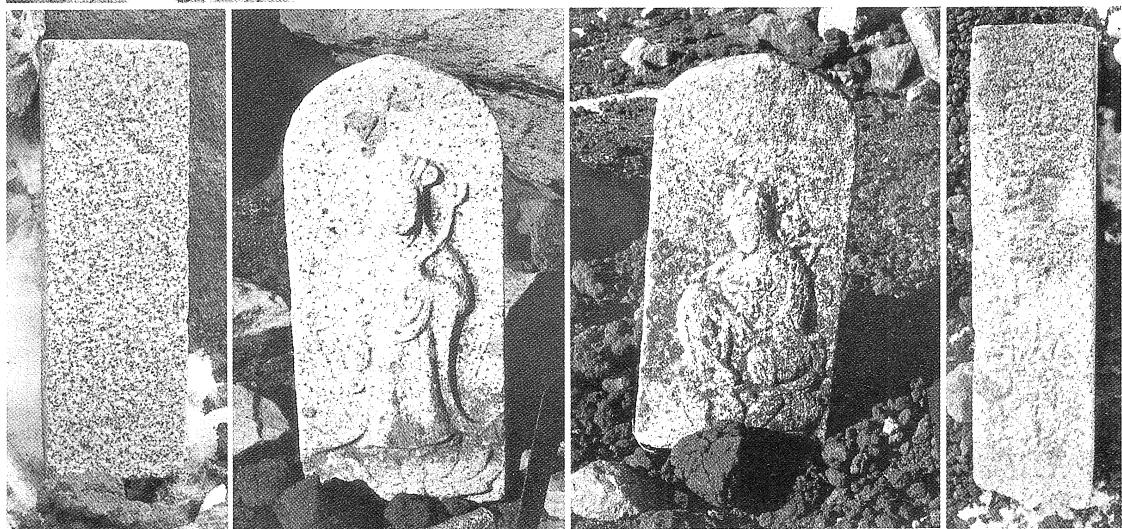
										山 頂	地 点	石 碑 No. 碑	
69	68	67	66	65	64	63	62	61	60				
柳沢口取付鉢													
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	1	石地 碑点 No.内		
〔石祠〕	〔ゴンゲンサマ〕	〔石祠〕	〔石柱一対〕	奉 明治四十五年 旧五月	天照皇太神宮 大和町	番 二 八日丁年寄春松	〔浮彫如意輪觀音坐像〕 〔浮彫十一面觀音立像〕	〔石柱〕 巖手毎日新聞社 明治四十二年七月二十五日	〔裏面〕 壹萬講社入講記念 登山会記念 石工 米沢勘兵衛	(右側)協賛碑貫郡大澤村 (正面)向正面下ル奥宮参道 (左側)昭和四年八月建之 島軒十次郎書	小原康造 左御鉢廻り道	銘文 ・ 〔種類〕	
			一九二二				(明治)	一九〇九	一九二九		年代		
58		88	62	36.5	総 58.5			53	183	高 寸			
40		48	14	10.5	像高 38.5			14	22	巾 法			
39		36	13.5	7.5				13.5	23	奥 行 cm			
新しい	られてい る。中 に祀	67の 石祠の 中に祀				盛岡講中奉納觀音 の第2番。	中の第1番とみられ る。中村巳吉と奉納 觀音				備 考		



60



お鉢柳沢口取付

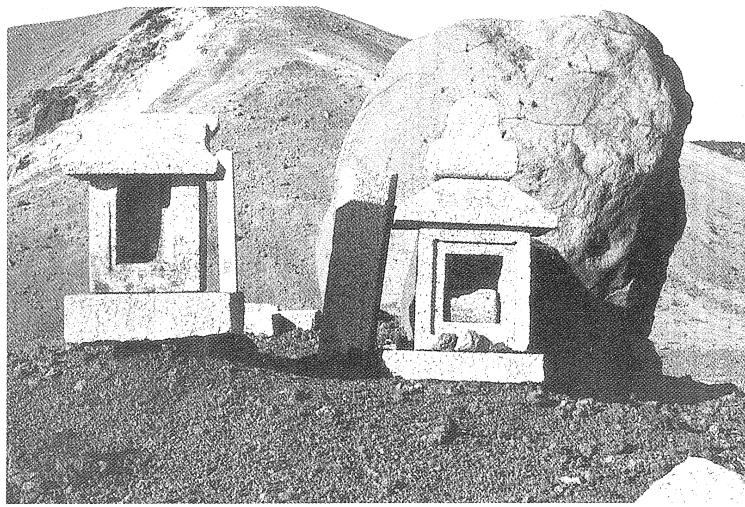


64

63

62

61



69

67 68



65

66

77	76	75	74	73	72	71	70	No. 碑	山
		柳沢 ↓平笠 口取付 鉢	お			柳沢 口取付 鉢	お		地 点
5	4	3	2	1	13	12	11	No. 碑 点 内	頂
五番 〔浮彫千手觀音坐像〕	中村已吉 〔浮彫千手觀音立像か〕	四番 〔浮彫千手觀音立像〕	花卷 □丁 久助	二番 〔浮彫十一面觀音立像か〕	〔道程石〕 九合五夕目	一 昭和十八年九月十七日 〔浮彫不動明王立像〕 施主 朝田紀	八日丁 五一 同八百屋田太 〔浮彫如意輪觀音坐像〕	銘文 ・ 〔種類〕	
						一九四三		年 代	
総 60	総 72	総 75	総 65	総 68	上 45	総 46.5	総 71.5	高 寸	
像高 19	像高 37	像高 41	像高 34	像高 35	15	像高 38	像高 31.5	巾 法	
					12			奥 行	cm
同第 5番。	中村已吉奉納觀音 の第4番か。	盛岡講中奉納觀音 の第4番。	同第3番か。	中村已吉奉納觀音 の第2番か。	「夕」の下で折損。 上部は72の次の地 点にある。		盛岡講中奉納觀音 の第1番。	備 考	



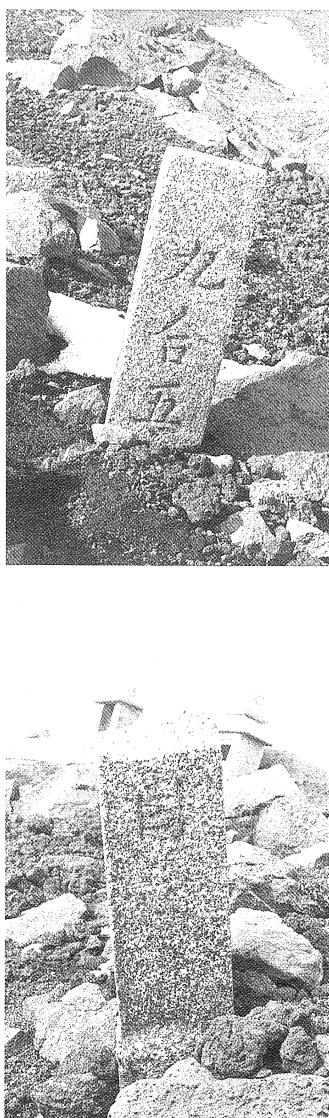
72



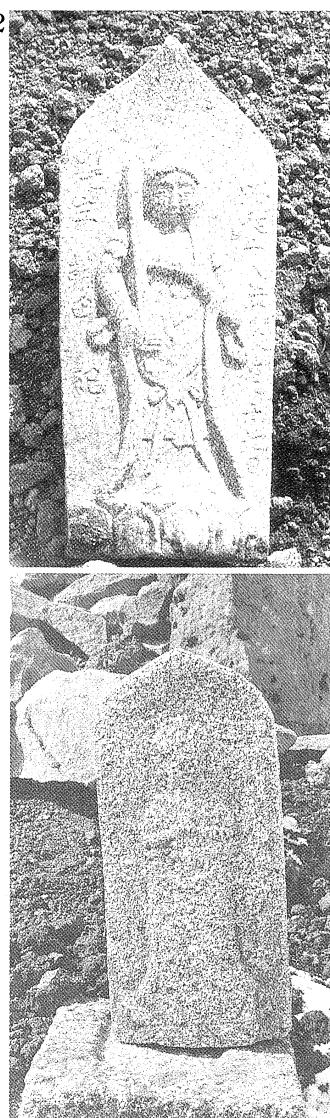
71



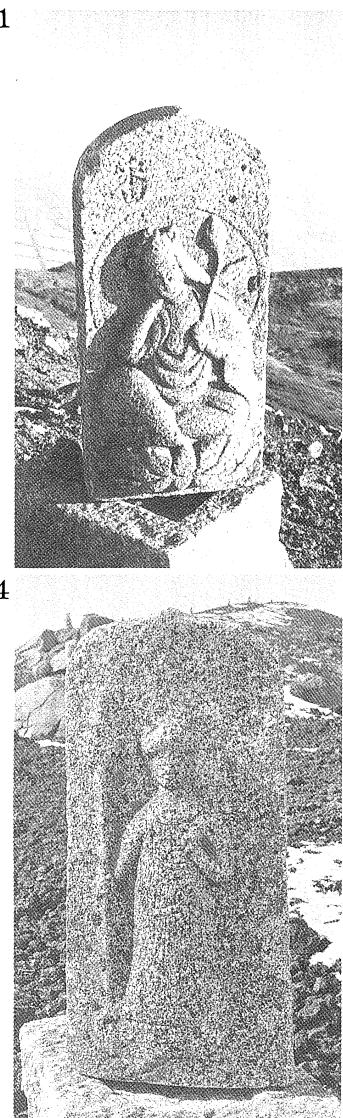
70



72



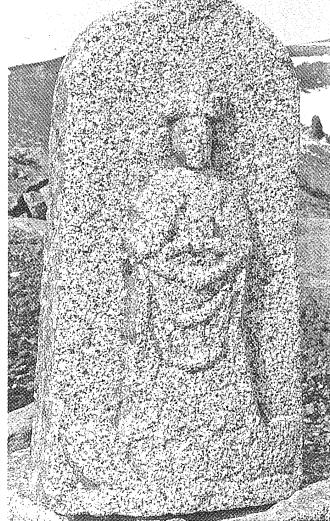
71



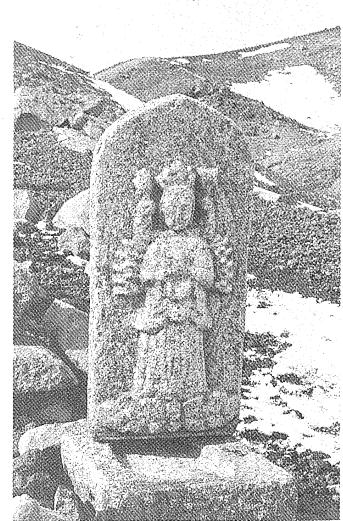
70



72



71



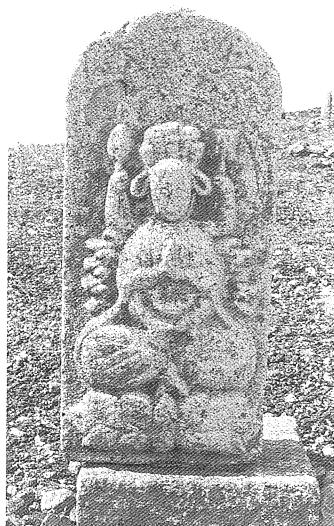
70

石碑No.	山頂	地點	碑石No.	種類	銘文	年代	寸法	備考
85	84	83	82	81	80	79	78	中村巳吉 の第6番。
								盛岡講中奉納觀音 の第5番。
								中村巳吉奉納觀音 の第6番。
								盛岡講中奉納觀音 の第7番。
								盛岡講中奉納觀音 の第8番。
								中村巳吉奉納觀音 の第9番。
								盛岡講中奉納觀音 の第7番。
								中村巳吉奉納觀音 の第8番。
								大工丁 八兵衛 花巻町 中村巳吉
								花巻町 十文子 世話人 傳助 八番 〔浮彫如意輪觀音坐像か〕
								花巻町 番六 〔浮彫千手觀音坐像〕
								花巻町 番七 〔浮彫千手觀音坐像〕
								花巻町 番五 〔浮彫千手觀音坐像〕
								中村巳吉 八日丁 世話人作之助
								六番 〔浮彫千手觀音立像〕
								中村巳吉
								中村巳吉 〔浮彫十一面觀音立像〕
								花巻町 九番 〔浮彫不空羈索觀音坐像か〕
								花巻町 八番 〔浮彫如意輪觀音坐像〕
								花巻町 七番 〔浮彫十一面觀音立像か〕
								花巻町 六番 〔浮彫千手觀音坐像〕
								花巻町 五番 〔浮彫千手觀音立像〕
								花巻町 四番 〔浮彫千手觀音坐像〕
								花巻町 三番 〔浮彫千手觀音坐像〕
								花巻町 二番 〔浮彫千手觀音坐像〕
								花巻町 一番 〔浮彫千手觀音坐像〕
13	12	11	10	9	8	7	6	3

80



79



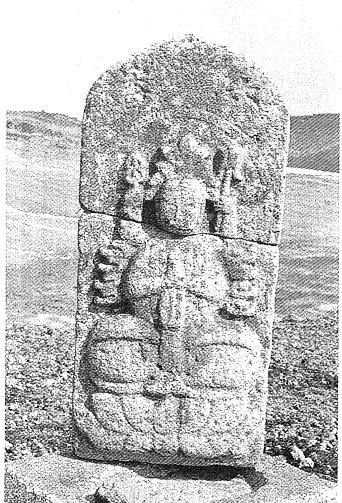
78



83



82



81

85



石碑No.	上	地點
93	92	91
90	89	88
87	86	柳沢口お鉢
↓平笠口取付		
21	20	19
18	17	16
15	14	三 〔浮彫千手觀音立像〕 八日丁 福治 八日丁 千助
十 〔浮彫千手觀音立像か〕 花卷町 中村巳吉	十一 〔浮彫不空羈索觀音坐像〕 明治四十二年五月 花卷町 中村巳吉	十二 〔浮彫准胝觀音坐像〕 明治四十二年五月 中村巳吉
十一 〔浮彫聖觀音立像か〕 番田 明治四十二年 八日丁 同右	十二 〔浮彫千手觀音立像か〕 花巻町 同右	十三 〔浮彫如意輪觀音坐像〕 番田 明治四十二年 八日丁 同右
山岸村 長右工門 中村巳吉 像容は千手觀音にみえる。	中村巳吉 同右 八日丁 銅屋 泰治 〔西国十番三室戸寺は 千手觀音である。〕	中村巳吉 同右 八日丁 鉄之助 〔浮彫不空羈索觀音坐像〕
		一九〇九
総高74	総高71	総高70
像高35	像高35	像高41
の第11番。	中村巳吉奉納觀音 の第13番。	盛岡講中奉納觀音 の第10番か。 中村巳吉奉納觀音 の第12番。
盛岡講中奉納觀音		盛岡講中奉納觀音 の第9番。 同第11番。
		中村巳吉奉納觀音 の第10番。
		盛岡講中奉納觀音 の第3番。
		備考

88



87



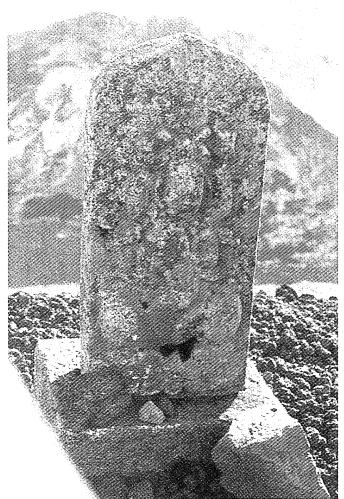
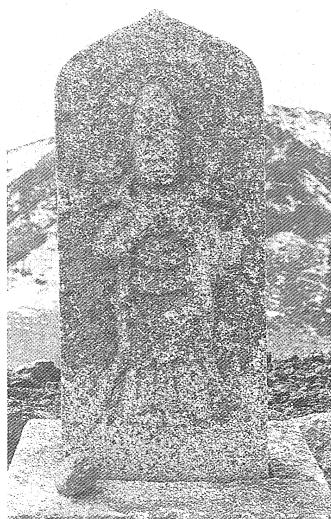
86



91

90

89



91

93

92



石碑No.	上
地點	頂
101	100
99	98
97	96
95	94
柳沢 ↓平笠口 取付	鉢
29	28
27	26
25	24
23	22
14番〔浮彫如意輪觀音坐像〕	11番〔浮彫千手觀音立像〕
中村巳吉	八日丁赤川 長之助
銘文・種類	
十七番〔浮彫十一面觀音立像〕	十六番〔浮彫千手觀音立像か〕 像容は十一面觀音のよう にみえる
□吉松	八日丁同 新郎
十七番〔浮彫十一面觀音立像〕	八日丁久治
中村巳吉	
年代	
総高72	総高75
像高40	像高45
盛岡講中奉納觀音 の第17番。	中村巳吉奉納觀音 の第17番。
盛岡講中奉納觀音 の第16番。	中村巳吉奉納觀音 の第16番。
盛岡講中奉納觀音 の第13番。	中村巳吉奉納觀音 の第15番。
盛岡講中奉納觀音 の第12番。	中村巳吉奉納觀音 の第14番。
寸法	
cm	
備考	

96

95

94



99

98

97



101

100





104



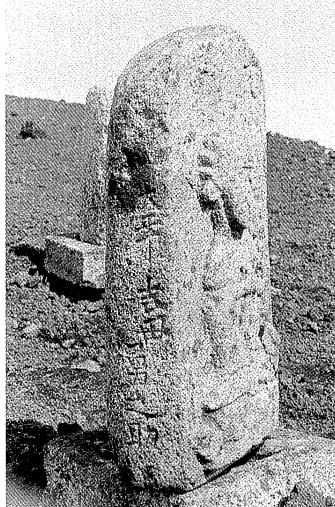
103



102



106



側面

106



105



109



108



107

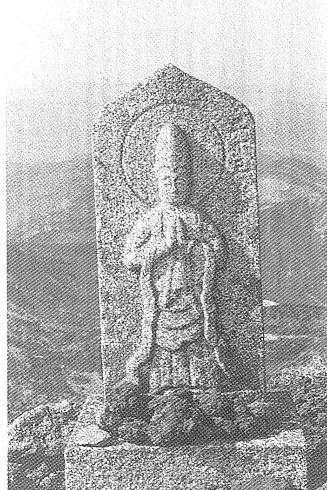


石碑No.	山	地點
116	115	114
平お 笠口 取付鉢	平笠口取付	柳沢口 鉢
4	3	2
(石祠) 諸人為志 (裏側)	(ゴンゲンサマ) 寅丁	熊野大権現 長太
(左側) 奉納大願成就 為父	(右側) 五月 安永 回國 五 月	(後部) 沼宮内 勤右工門
一 一一八 一	一 七 七 二	一 八 二 〇
113	112	111
110		
石碑点No.内	7	銘文・種類
明治四十一年五月 二十二番 〔浮彫觀音立像〕	明治四十三年五月 二十三番 〔浮彫十一面觀音立像〕	るが、この石像は聖觀音の姿である。 二十二番は千手觀音(總持寺)である。
享和元辛酉五月吉日 文政三辰歲五月吉日 同 米沢六兵衛 □治 中村巳吉	花巻四日町 中村巳吉	
如來 〔浮彫藥師如來坐像〕		
沼宮内 勤右工門		
一 八 〇 一	一 九 一 〇	一 九 〇 八
年代		
高寸	20	72
巾法	27	33
奥行cm	27	13
備考	る。113の石祠の中にあ おり、お鉢からやや下に 倒れ落ちている。	同第23番。 中村巳吉奉納觀音 の第22番。

110



111

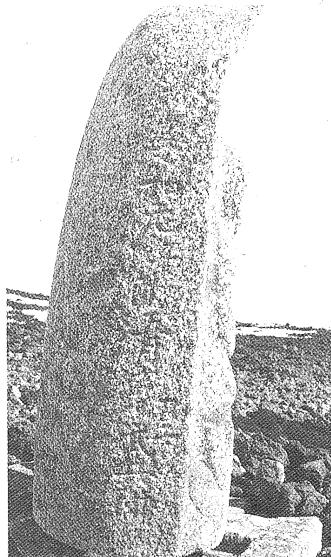


112

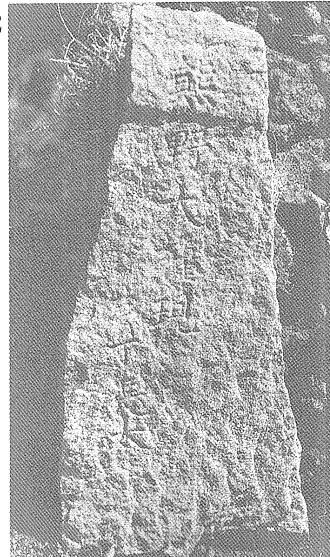


112

側面



114



113



116 側壁



116



115

127	126	125	124	122 ・ 123	121	120	119	118	117	石 碑 No.	山 頂
				薬 頂			平 お 笠 取 鉢				地 点
				師			頂 上 薬 師 岳				頂
				岳 上			上 取 付 鉢				
8	7	6	5	3 ・ 4	2	1	3	2	1	石地 碑點 No.内	8
〔石 柱〕	〔石 宝 劍〕	〔藥 師 如 來 坐 像〕	〔手 水 鉢〕	〔狗 犬〕	〔藥 師 如 來 坐 像〕	〔石 祠〕	番五十二 〔浮彫 觀音 坐像〕	甘三 〔浮彫 十一面 觀音 立像〕	本丁 材木屋 勇助	銘 文	〔種 類〕
						(裏側)	二十五番は千手觀音(清水寺) であるが、この石像は聖觀音の姿 である。	鑄治丁			
						昭和七年七月三日 南無藥師如來 本尊奉納者 田口孝 晴一 正新一	花屋子 源八				
					( 〃 )	一九三二				年 代	
		総高 61	20.5	(例)総高 46	像高 12	50		総高74	総高 66.5	高 寸	
		像高 45	28	像高 24				像高48	像高 48	巾 法	
			19.5							奥 行	cm
銘 文 不 明				(例) 総高 52	120 の石祠内安置		中村巳吉奉納觀音 の第25番。	同第 23 番 か。	盛岡講中奉納觀音 の第21番か。	備 考	



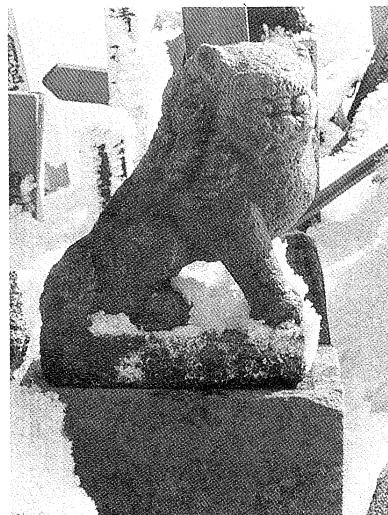
119



118



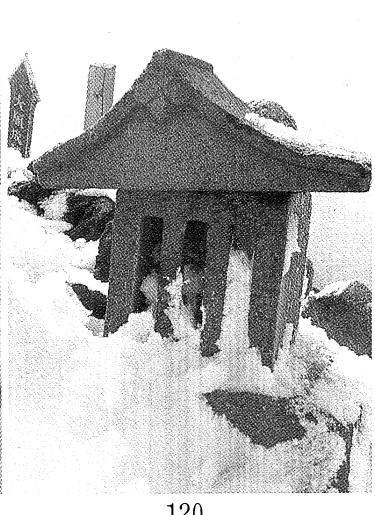
117



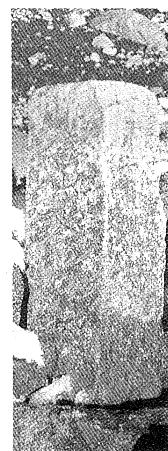
122



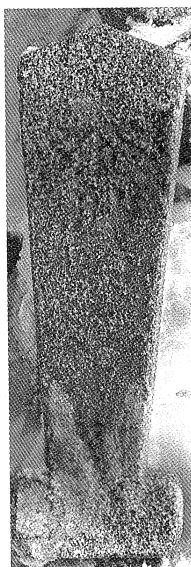
121



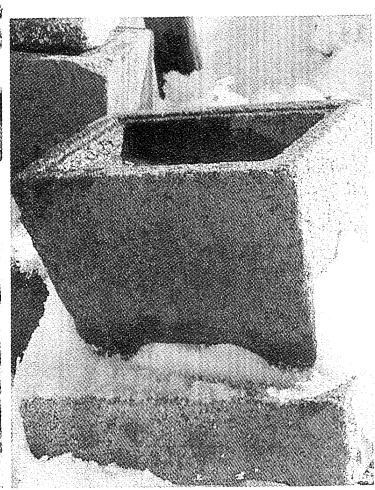
120



127



125



124

126

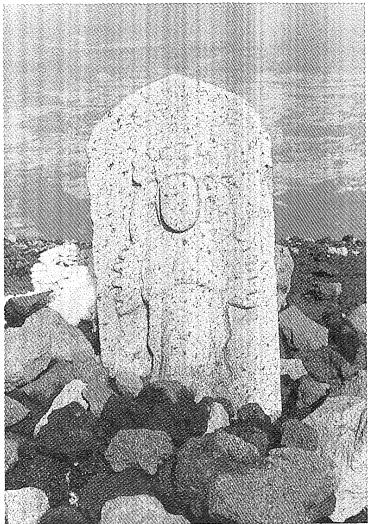
135	134	133	132	131	130	129	128	石碑No.	山頂地點	山頂
8	7	6	5	4	3	2	1	石碑点No.内	9	銘文・種類
廿九番 馬町 中村佐兵衛	〔浮彫馬頭觀音坐像〕	〔浮彫聖觀音立像〕 像容は十一面にもみえる。	三十番 同村	廿七番 同村八日町 花巻町 中村巳吉	〔浮彫如意輪觀音坐像〕 同村仁右工門	〔浮彫聖觀音立像〕	〔浮彫千手觀音立像〕 八日町 當德太郎	〔浮彫十一面觀音立像〕 中村巳吉	〔浮彫千手觀音立像〕 大廻 梅木屋久太	〔浮彫馬頭觀音坐像〕
										年代
総高75	総高66	総高68	総高68	総高72	総高72	総高67	総高53	高寸		
像高40	像高36	像高40	像高31	像高43	像高43	像高39	像高39	巾法		
								奥行cm		
の第29番。 盛岡講中奉納觀音	中村巳吉奉納觀音 の第28番か。	中村巳吉奉納觀音 の第30番。	盛岡講中奉納觀音 の第27番か。	中村巳吉奉納觀音 の第26番か。	盛岡講中奉納觀音 の第22番か。	中村巳吉奉納觀音 の第26番か。	盛岡講中奉納觀音 の第20番か。	台なし。	備考	



130



129



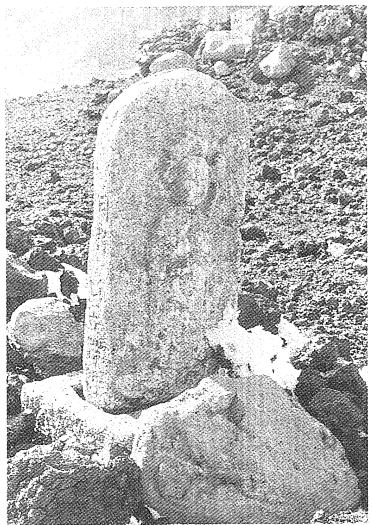
128



133



132



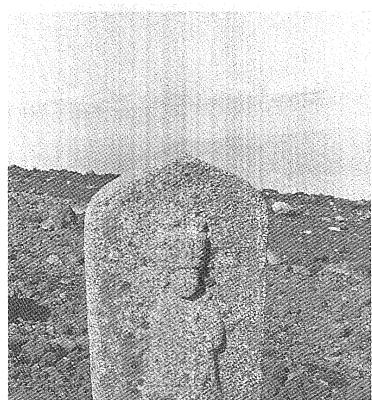
131



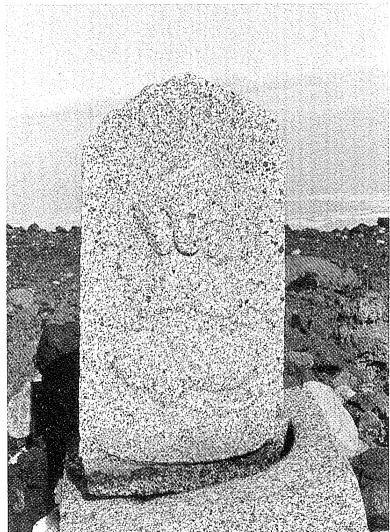
135



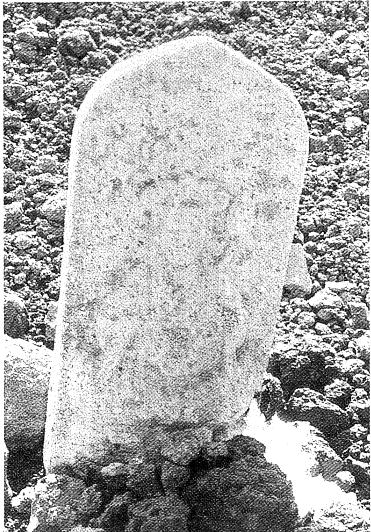
134



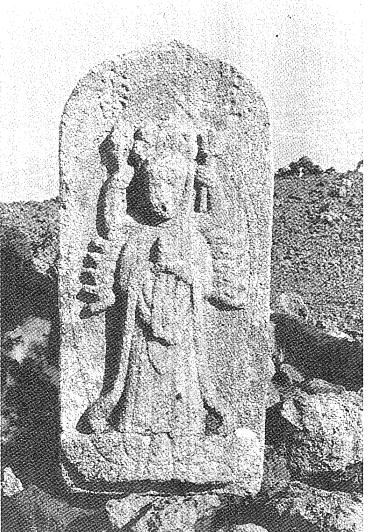
石 No. 碑	136	137	138	139	140	141	142	143
地 点	頂			頂 お 上 鉢	お 清 水 觀 音 鉢			
石地 碑点 No.円	10	9	10	11	12	2	3	4
銘文 ・ (種 類)	〔浮彫千手觀音立像〕	〔浮彫千手觀音立像〕	〔浮彫馬頭觀音坐像〕	〔浮彫千手觀音坐像〕	〔浮彫十一面觀音立像〕	〔浮彫如意輪觀音坐像〕	〔持經觀音立像〕	〔十一面觀音立像〕
年代					一九一五			一八四九
寸 法	高	総高61	総高59	総高59	総高70	総高47	55	総高118
cm 奥行	巾	像高41	像高33	像高33	像高38	像高35		像高65
備考	盛岡講中奉納觀音 の第25番。	台なし。	台なし。	台なし。	同第30番。	同第24番。 盛岡講中奉納觀音 の第29番。	同第27番。	



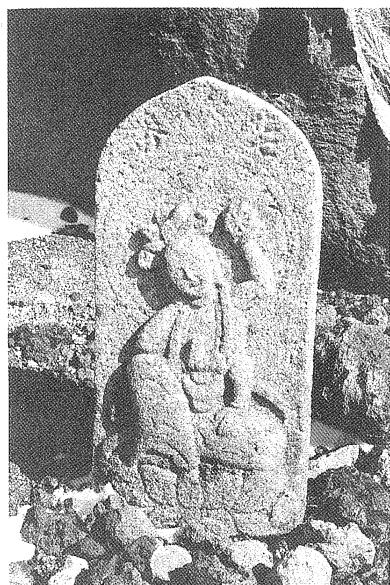
138



137



136



140



139

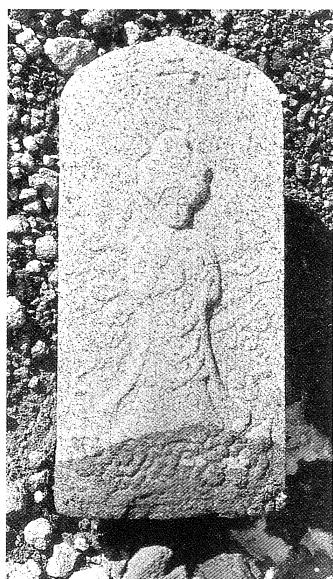
↑  
141  
↔

143

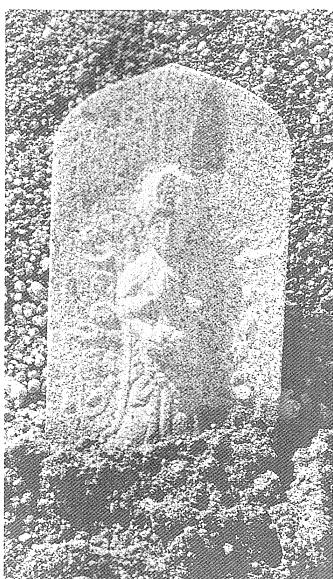


142

石 No. 碑	山 頂	地 點	144	145	146	147	148	149	150
		清水觀音 宮							
		鉢							
7	6	5	4	3	2	1	石碑 点 No.内	11	
皇紀二千六百年紀元節 奥羽電燈株式会社 スキ 山岳部	天壤無窮 五月吉日	卅三番 八日丁石工勘治子供 長太割	卅三番 安政四巳年 五月吉日 五穀成就	(右側) 安政四巳年 八日町 世同話同同同 中原同同人 屋傳勘作福直春千新 助平助治藏治太八	番三卅 〔浮彫千手觀音立像〕 花卷町 中村巳吉	番二卅 〔浮彫千手觀音立像〕 花卷 中村巳吉	番一卅 〔浮彫千手觀音立像〕 中村巳吉	三十二番 〔浮彫千手觀音立像〕 安庭工仁六太歲	銘文・種類
一九四〇	一八五七	(一八五七)					(一八五七)	年代	
		總高76	總高68	總高58	總高58	總高58	高寸		
		像高42	像高38	像高37	像高42	像高34	巾法		
							奥行cm		
		盛岡講中奉納觀音 の第33番。	同第33番。	同第32番。	中村巳吉奉納觀音 の第32番。	盛岡講中奉納觀音 の第31番。	備考		



146



145



144



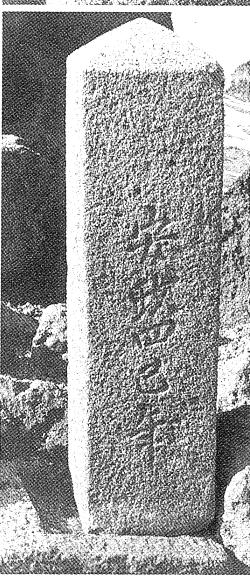
149



148



147

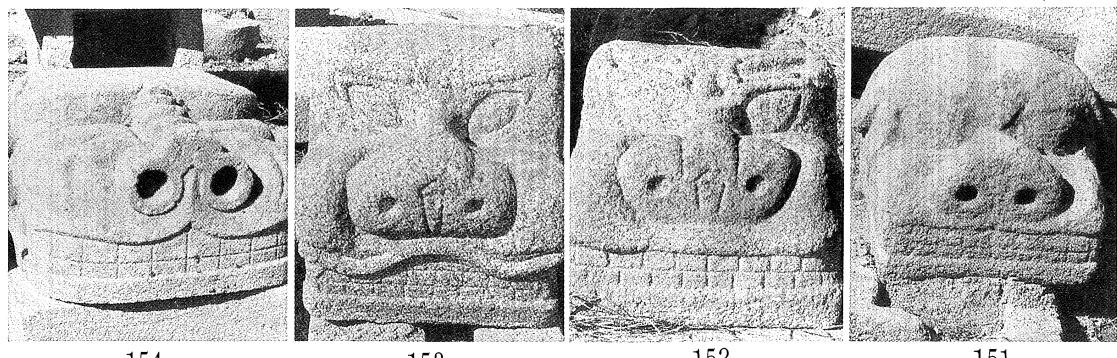


150



奥宮直前

165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	石碑No.	山
15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	石地碑点No.内	地頂
奥殿宮																
(奥殿宮)																
〔ゴンゲンサマ〕 （後部） 匱石三切郎	〔ゴンゲンサマ〕 （後部） 岩手高平笠郡要吉	〔ゴンゲンサマ〕 〔ゴンゲンサマ〕 奉納	〔ゴンゲンサマ〕 〔ゴンゲンサマ〕 （後部） 金旧板明治五月石廿工七日	〔ゴンゲンサマ〕 〔ゴンゲンサマ〕 （後部） 羅權現七月	〔ゴンゲンサマ〕 〔ゴンゲンサマ〕 （後部） 五月石廿工六日	〔ゴンゲンサマ〕 〔ゴンゲンサマ〕 （後部） 零石十二年工治工園	〔ゴンゲンサマ〕 〔ゴンゲンサマ〕 （後部） 大和百太郎	〔ゴンゲンサマ〕 〔ゴンゲンサマ〕 （後部） 米沢勘治	〔ゴンゲンサマ〕 〔ゴンゲンサマ〕 （後部） 木村安兵衛	〔ゴンゲンサマ〕 〔ゴンゲンサマ〕 （後部） 同郡八日丁衛	〔ゴンゲンサマ〕 〔ゴンゲンサマ〕 （後部） 南岩村	〔ゴンゲンサマ〕 〔ゴンゲンサマ〕 （後部） 大和百太郎	〔ゴンゲンサマ〕 〔ゴンゲンサマ〕 （後部） 米沢勘治	〔ゴンゲンサマ〕 〔ゴンゲンサマ〕 （後部） 大和百太郎	〔ゴンゲンサマ〕 〔ゴンゲンサマ〕 （後部） 大和百太郎	銘立・種類
一九〇一																
一八〇〇																
14	19	16	19	16	26	17	20	17	20	24	23.5	23.5	20	18	高寸	年代
6	21	21	21.5	21.5	33.5	20.5	18	23	23	23	36	27	21	27	巾法	
17.5	24	25	23	18.5	30	25	21	22	31	24	36	25	20	24	奥行cm	
															備考	



154

153

152

151

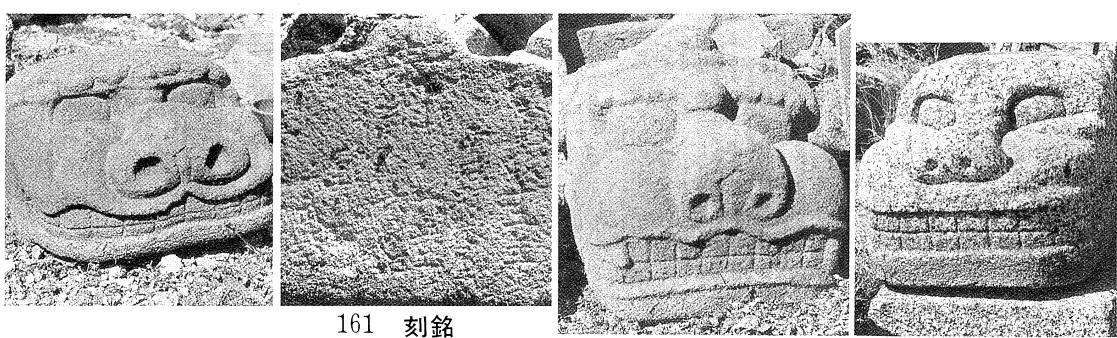


157

158

156

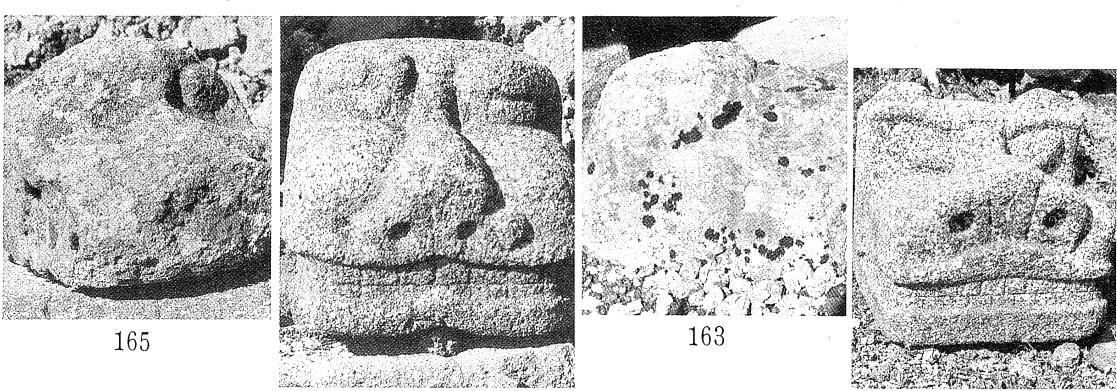
155



161 刻銘

160

159



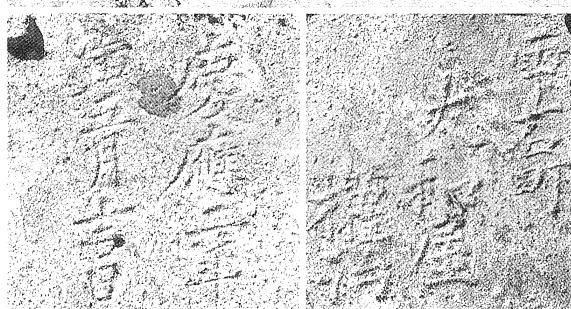
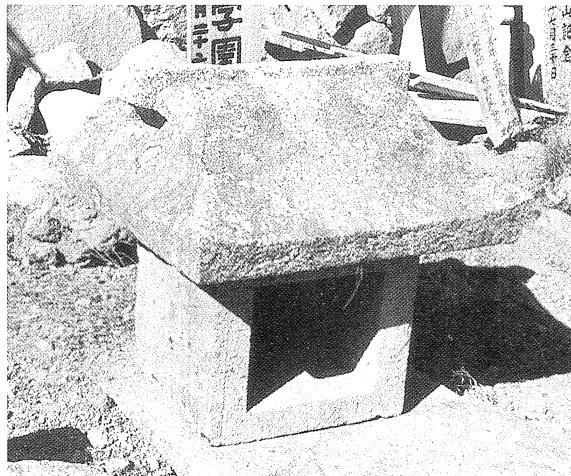
165

164

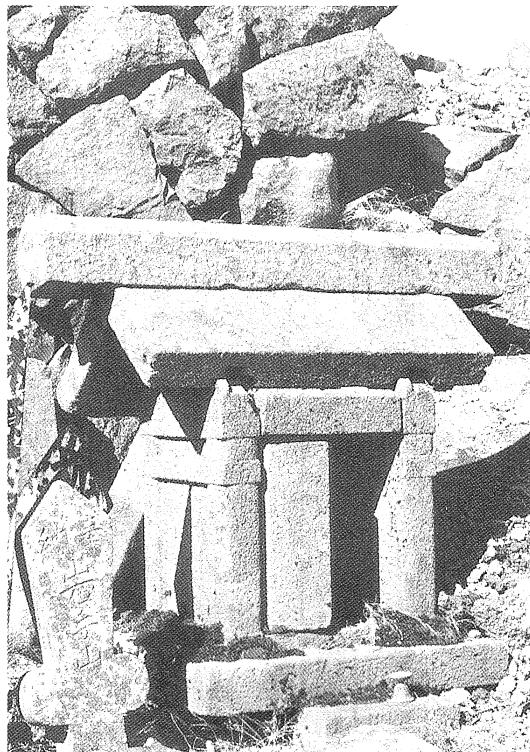
163

162

石碑No.	山	地點	頂							
176 · 177	175	173 · 174	172	171	170	169	168	167	166	
奥殿宮										
(右側)										
26 · 27	25	23 · 24	22	21	20	19	18	17	16	石地碑点No.内 13
〔石燈籠〕 奉納 花屋町 大正八年五月二十三日	〔扁額〕 巖手山 昭和十一年 旧六月十六日	〔狛犬〕 岡奉納 ○連町屋銛 明治卅二年 旧五月 (人名多數)	〔台〕 奉納 子五月川 戊文政十 田頭村工藤龍三 石工工藤善吉	〔石宝劍〕 奉納 奉納 田頭村工藤龍三 石工工藤善吉	〔石宝劍〕 奉納 岩手山 昭和拾二年 九月二十五日 (裏側)	〔石柱〕 室谷永助 姉帶久之丞	〔石祠〕 大雲石町 權治二年 寅五月吉日 (左側)	〔石祠〕 正一位岩鷲山大權現 昭和拾二年 九月二十五日 (裏側)	〔石祠〕 大雲石町 慶應二年 寅五月吉日 (左側)	銘文種類 安永八月二十七日 永井清太良
一九一九	一九三六	一八九九	一八二七		一九三七			一八六六	一七七九	年代
117/91	32		66	60				54	88	寸
	20.5							44	102	巾法
								24.5	36	奥行cm
「二戸郡浪打村」 一基に火袋を失う。										備考

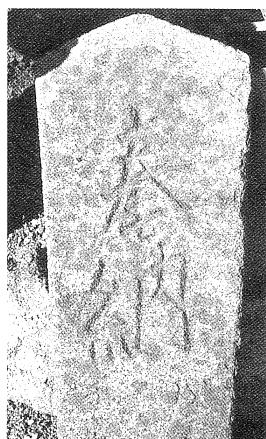


167



168

169



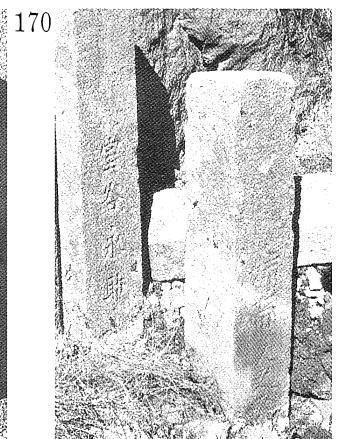
170



171



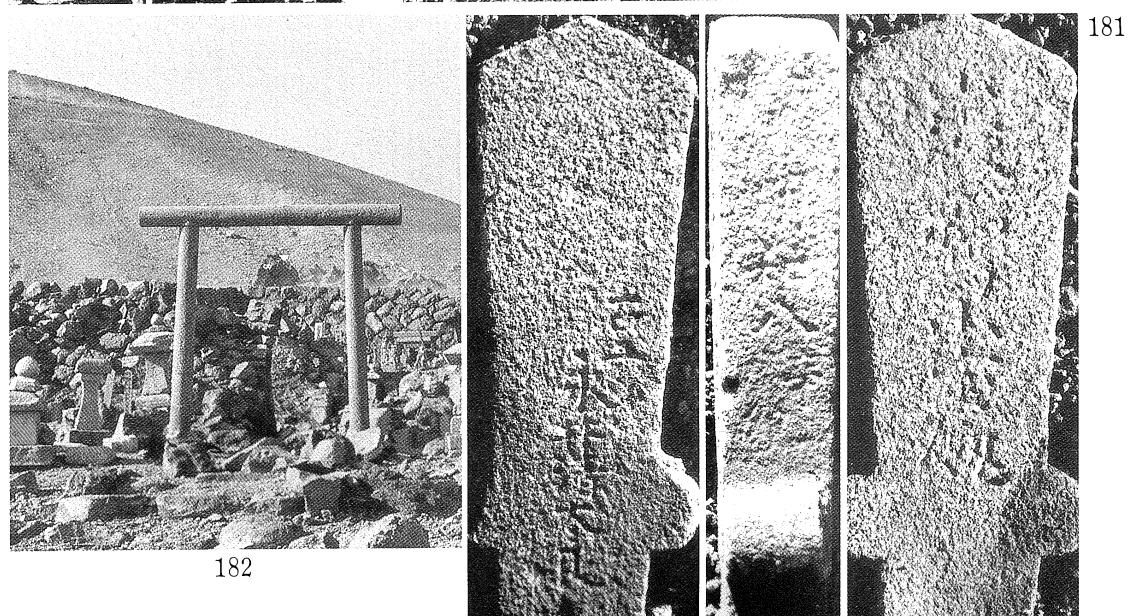
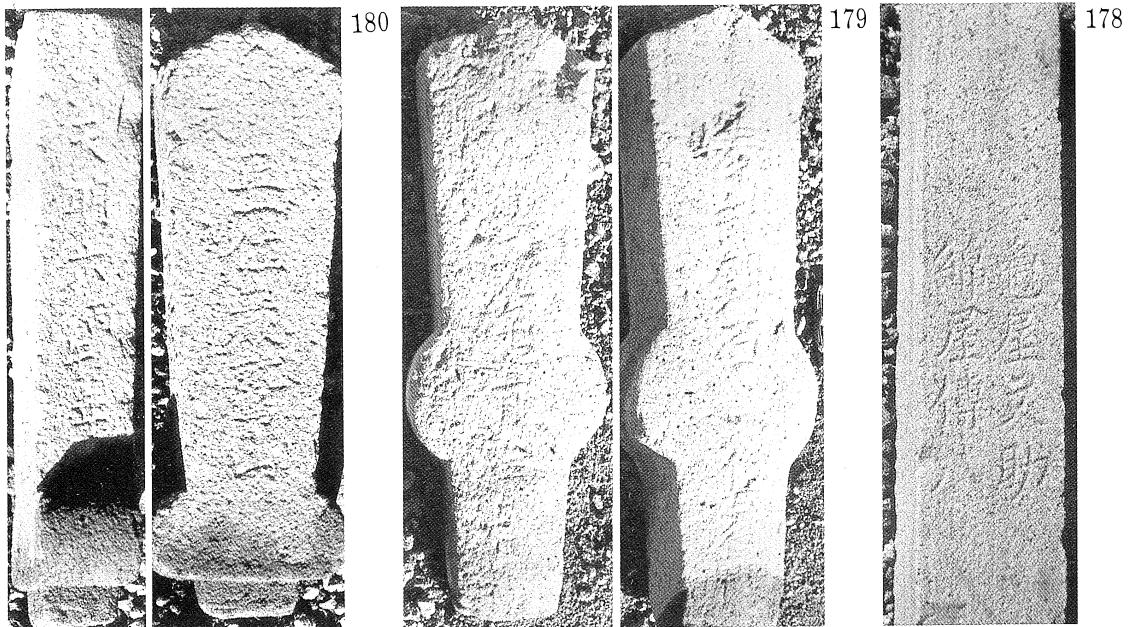
172

173  
174

175

176  
177

187	185 · 186	184 · 184	182	181	180	179	178	石碑 No.	山 地 點 頂
	奥 (拝殿) 宮								
37	35 · 36	33 · 34	32	31	30	29	28	石地 碑点 No.内	14
〔浮彫八幡神立像〕	〔石燈籠〕 (竿) 安政五年 奉納	〔石燈籠〕 (竿) 明治二十九年 御神燈	〔石鳥居〕 (竿石) 申五月廿七日 百講中 奉 五月吉日 国家安 全	〔石宝劍〕 (前面) (裏側) 明治四十三年五月二十七日 御明神村 安本德治郎 渡遠田頭起人 作 藤榮徳松	〔石宝劍〕 (左側) 明和八年 石工永井清太良	〔石宝劍〕 正一位 巖鷲山 天明六丙午年 巖鷲山 宝鉄	〔石柱〕 寛政九年 中夏廿八日 已五月田園日 龜屋文助 綿屋傳八 奉納鋗石 作右衛門 田頭村	銘文 ・ 種類	
	一八五八	一八九六	一九一〇	一七七一	一七八六	一七九七			年代
総高56	49/78	138	170	48	71	71	61	高寸	
像高44			178	21	25	25		巾法	
				8	11	11		奥行cm	
	一基は竿石のみ。 一袋から上 を失う。	台に多数の名あり。							備考



石碑 No.	山 地 點
石碑 点 内 No.	15
銘文	種類
納奉 縣社岩手山神社奧宮	人夫世話人 柳澤
(裏側) 右側 皇風永扇校運隆昌 昭和四年九月五日建之 岩手中学校長鈴木早苗敬書	佐々木市郎 石工川村芳太郎 米澤山口 川村佐次郎 善平
38	大正五年五月廿七日 於山頂
納奉 岩手山神社 家内一同 安本徳治郎 石工	大正五年五月廿七日 於山頂
北白川宮成久王殿下御登攀記念碑 (右側) 石重量五十一貫 背負揚人	大正五年五月廿七日 於山頂
皇軍將兵武運長久祈願 岩手縣知事雪澤千代治書 (左側) 願人上野勘治郎 西山村 田中勇刻 (五十一貫は 一九一、二五kg)	大正五年五月廿七日 於山頂
一九三九	一九四〇
78	約420
25	49
38	7
六角石。	下部銘文は欄外に記す。

[190] (北白川宮登攀記念碑下部銘文)  
 メヨトノ御令旨ヲ賜ハレリ當時金枝玉葉ノ尊貴ヲ以テ高山ニ登攀シ玉ヘル例殆ンド絶無ナリシヲ以テ恐懼感激ヲ措カザル所ナリシガ殿下ニハ更ニ名刀一口ヲ御寄進遊バサレ岩手山神社ノ光榮愈々顯著ナルモノアリ尋テ大正五年十一月十八日社格ヲ縣社ニ進メラル四民ノ崇敬益盛ニシテ登山者年々其數ヲ加フルコトニ至レリ而シテ當社が記元二千六百年ヲ記念センガ爲メ此碑ヲ山頂ニ建ツルニ當リ本縣出身内閣總理大臣海軍大將米内光政閣下親シク題字ヲ賜ヒ又地元出身藤倉潔氏ハ進ンテ建碑一切ノ費用ヲ負擔セラル乃チ其ノ由ヲ碑面ニ勤シテ永ク其篤志ヲ表彰ス

昭和十五年九月

從三位勲二等功五級

上村勝爾謹誌



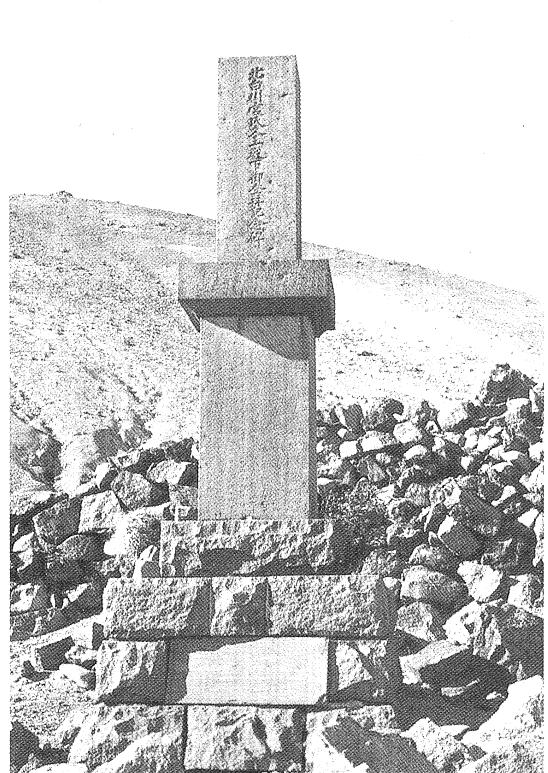
189



188



191



190

### 三十三観音石像

観音信仰と観音巡礼 観音菩薩は日本で最も人気のある仏さまである。

『觀音經』（『法華經』）は三十三身に姿をあらわして人々を救うという観音の現世利益を説き、平安後期以降には来世安樂を求める阿弥陀淨土信仰が高まるとともに観音菩薩に対する救苦的来世信仰が盛んになり、観音靈場を難行苦行して巡礼することによって次第に罪障を消滅し、永遠の救いを得ようとする観音巡礼が生まれた。

三十三所観音靈場 巡礼靈場が最初に成立したのは近畿地方の西國三十三所観音靈場で平安時代後期とされる。三十三所の数はむろん観音の十三身に因るものである。その後、鎌倉時代には関東地方に坂東三十三所、室町時代に秩父三十四所が成立、ようやく一般民衆が巡礼に参加するようになる。岩手県内での最も古い靈場の確実な例は糠部三十三所で永正九年（一五二二）の巡礼札が鳥越觀音堂（一戸町）に伝えられる。

三十三観音 江戸時代には各地に三十三所の地方靈場が生まれ、巡礼が

盛んになつたが、本家の西国三十三所がやはりもつとも有名で、各地の寺院などにはその土地に居ながらにして礼拝できるよう西国三十三所観音靈場の本尊を模した木像や石仏が造られた。岩手山の三十三観音石像もこの西国三十三観音である。

なお、三十三観音には二種類あり、三十三種類の観音を集めた三十三観音は室根山（室根村）などにその石仏が祀られているが、これはその殆どがなじみの薄い名前の観音さまで、数は非常に少い。ここで問題にしている三十三観音は、観音を本尊としている寺院・お堂を三十三カ

所巡礼するものであつて、したがつて同じ姿、同じ名前の観音さまが何度も登場する。西国三十三所観音の場合は聖観音、十一面観音、千手観音、如意輪観音、馬頭観音、不空羂索観音、准胝観音のいわゆる七観音で三十三観音にあてられてゐる。

西国三十三所観音と帰命寺の三十三観音

西国三十三所靈場は第一番を熊野那智山の青岸渡寺として近畿各県を回り、三十三番の詣り納めは岐阜県・谷汲の華嚴寺であつた。この尊像を模した例として帰命寺の三十三觀音があげられる。帰命寺は盛岡城下八幡町北裏にあつた淨土宗の寺で、盛岡の大仏で知られている。伝えによると元禄三年（一六九〇）西応（まつは西往）が開山、京都から三十三觀音を調えたという。文化三年（一八〇六）火災にあい再建できずに廃寺となり、三十三觀音などの仏像は本寺の大泉寺（盛岡市中央通一丁目）に移安された。今回は岩手山の三十三觀音石像の像容をみる上で参考として帰命寺三十三觀音を掲載した。なお、帰命寺三十三觀音像の尊名・尊容は、本来の西国三十三所觀音とほぼ一致している。但し、後世の修理のとき台座の入れ違い（六番と十八番）や、靈場名の書き違い（三十番竹生島・宝嚴寺が二体あり、二三番勝尾寺が無い）などがある。

岩手山頂お鉢の三十三観音石像

二組の三十三觀音石像があり、ともに西国三十三所の三十三觀音である。お鉢の柳沢口取付地点が第一番で、お鉢の内部・御殿に向けて並べられ頂上薬師岳を経て奥宮のすぐ手前の胎内潜りの岩の所に第三十三番が建てられている。札番（巡拝靈場の順通りに並べられるのが筋であるが、どちらの石像にも多少の順番違いがみられる。

西国三十三所観音石像が岩手山頂に安置された理由としては、(1)江戸後期において観音巡礼が盛んに行われ、各地に西国三十三所を模した靈

場が作られ、また、寺院などに西国三十三所の本尊を模した木像・石仏が設けられていたこと。(2)岩手山登山は難行を伴うものであり、難行苦行によつて罪障を消滅する巡礼本来の意義に適うものであり、立地として岩手山頂はふさわしい地点であること、があげられるが、更に(3)岩手山は観音靈場でもあること、つまり、観音菩薩は岩鷲山大権現の三本地仏の一つであること、および、岩手山は坂上田村麻呂にまつわる伝説が多く、岩鷲山大権現は田村明神とも称されていたが、坂上田村麻呂が東征にあたつて崇敬したのが京都の清水観音(清水寺)であり、山頂の大岩を清水観音にあてるなど、岩手山と観音菩薩の関係は深いこと、によるものであろう。

(A) 盛岡講中建立三十三觀音石像

内史略（后二十）に「丁巳同年（安政四年）閏五月十二日惣市中兼々信仰の者より 岩鷺山へ麓より御殿（山頂お鉢の内部）迄の間 詣の道しるべ 三十三觀音の像 石にて彫り奉納。右講中 同日白木綿觀音の像 背に染め、上着に用い参詣。夕顔片原丁に神樂等これあり、往来筋大に賑ひ、参詣群集す。此の賦 方人足七百人也と云々」とあつて、当日にぎわいと道しるべ（道程石）も同時に建てられたことが知られる。奉納者は盛岡の八日丁（現本町通二丁目）を中心とする町人で、町名のわかる一〇基の内訳は、八日丁11、大工丁3、花屋丁2、油丁1、本丁1、鍛冶丁1、馬町1、山岸1、安庭村1、大廻1である。

像容は一覽表のとおり、西国三十三所觀音に殆んど忠実であるが、十番とみられる像が聖觀音に造られている。十番三室戸寺の本尊は千手觀音であるが、帰命寺の十番像も聖觀音に造られている。三室戸寺には本尊の千手の他に、来迎阿弥陀三尊中の聖觀音もあつて信仰をあつめているので、あるいは石仏はこれを採つたものかも知れない。なお、十五番、

(B) 花巻町中村巳吉建立三十三觀音像

明治三九年（大正四年）（一九〇六年十五）現存三三体  
明治三九年間から十年間にわたつて奉納した三十三觀音である。(A)と同じくお鉢の柳沢口取付地点を第一番とし、(A)とほぼ交互に建てられてゐる。これも西国三十三所觀音であるが、像容は簡略で必ずしも札番の觀音に忠実ではなく、特に千手、十一面、聖觀音はほぼ同じ姿に見えるものが多々。石工は不明で作技も優れたものではないが、独力で十年を要して建立した情熱には驚かされる。当時は岩手山神社の整備期であり神社神道による岩手山信仰の高揚期であつた。

なお、中村巳吉は昭和二年（一九二六）には分レに岩手山神社の石造大鳥居No.3を建てている。

二四番にあたる像は見つからなかつた。

三十三觀音對照一覽

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	札順	西國三十三所觀音靈場	寺名	所在	地
清きよ 今観 水みず 熊音 寺寺	今園 井城じょう 寺寺	石山 間法 寺寺	正岩 醸酬 寺寺	上法 室戸 寺寺	三み 興福寺 室南円堂	長岡 谷寺	岡 壇蓋 寺寺	葛岡 宝院 華坂 寺寺	施	粉	紀	青せい 岸がん 渡寺	寺	寺	寺					
清東水山区	京都 市今東 熊野区	園大 城津寺 市町	滋賀 県石大 山津内市 烟	京都 市伏 闌見区	京都 府宇治市	京都 府東宇治市	登奈良市	初櫻井 町市	奈良 県高取 明日香 郡村	大阪 府藤井寺 市	粉那 河町	紀三井 寺町	和歌山 県那智 勝浦町	所	在	地	所	在	地	
(十一手)	十一面	如意輪	如意輪	千手	准胝	千手	不空羈索	十一面	如意輪	千手	千手	千手	千手	千手	千手	如意輪	本尊觀音			
千手	十一面	如意輪	如意輪	千手	准胝	聖觀音	不空羈索	十一面	如意輪	(千手)	千手	千手	千手	千手	千手	如意輪	觀三帰 十命 音三寺			
⑨		⑩	⑦	⑤	③	①	⑧	⑥	③	①	⑦	⑤	⑥	③	⑦	No.石碑	(A) 盛岡講中建立像(安政4)	札番銘	尊容	吉日
十六番		□四番	十三番	十二番	十一番	田番		八番	七番	六番	五番	四番	三番	二番	一番	No.石碑				
千手		如意輪	如意輪	千手	准胝	聖觀音	不空羈索	十一面	如意輪	千手	千手	千手	千手	千手	千手	如意輪	尊容	銘年	吉日	同八百丁屋田太
八日丁同新四治郎		油丁久 大兵衛	八日赤 川丁和 大屋	八日赤 川丁和 大屋	山岸 長右 工門	八日丁 泰治	鉄之助		大工丁	八日丁 世話人	八日丁 人作之助	八日丁 千圓助治	八日丁 春松	八日丁 久助	八日丁 同新四治郎	その他銘				
⑧	96か	⑨	②	⑩	⑧	⑦	③	②	⑧	⑦	⑦	76か	74か	③	②	No.石碑	(B) 花卷町中村巳吉建立像(明治39~大正4)	札番銘	尊容	のその銘他
十六番		十四番	十三番	十二番	十一番	九番	八番	七番	六番	五番						No.石碑				
十一面か	十一面か	如意輪	如意輪	十一面か	准胝か	聖觀音か	不空羈索か	十一面か	如意輪	千手	千手	千手	千手	千手	千手	如意輪	尊容	銘年	吉日	同新四治郎
明治四十 年			明治 四十年	牟 舟 十二																
		中村巳吉	中村巳吉	花卷	中村巳吉	中花卷町 中村巳吉	中花卷町 中村巳吉	中花卷町 中村巳吉	中花卷町 中村巳吉	中花卷町 中村巳吉	中花卷町 中村巳吉	中花卷町 中村巳吉	中花卷町 中村巳吉	中花卷町 中村巳吉	花卷					

33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
華巖寺	觀音正寺	長命寺	寶嚴寺	松尾寺	成相寺	円教寺	一乘寺	清水寺	中山寺	勝尾寺	總持寺	穴の太寺	善峰寺	行願寺	六頂角法堂	六波羅密寺
岐阜県揖斐郡谷汲村	安浦町	長命寺	江八幡市	滋賀県東浅井郡竹生島	京府成宮相津市	書写姫路市	北加西町	社加東郡	兵庫県中宝塚市	粟箕面市間谷	大阪府茨木市	京都府曾我岡部町	大原野小塩町	六中京区	六中京区	京都市東原通区
十一面手	千手	尊面千手 体聖十 三一	千手	馬頭	聖觀音	如意輪	聖觀音	千手	十一面	十一面	千手	聖觀音	千手	千手	如意輪	十一面
十一面手	千手	千手	馬頭	聖觀音	如意輪	聖觀音	千手	十一面			千手	十一面	千手	千手	(如意輪)	十一面
(148)	(144)	(137)	(133)	(135)		(141)	131か	(136)	(140)	118か	130か	117か	128か	(108)	(106)	(101)
卅三番	三十一番	三十番	廿九番	廿七番	廿七番	廿七番	廿五番	廿四番	廿三番	廿三番	廿三番	廿三番	廿三番	十九番	十八番	十七番
十一面手	千手	十一面か	千手	馬頭		如意輪	聖觀音	千手	十一面	十一面	千手	聖觀音	千手	千手	如意輪	十一面
五年安政四月吉日																
八日同新八他	安庭村仁六太歲	真館	同村	馬中町村・佐馬兵八衛	金太良	同丁青物間屋	同村仁右工門	中松野屋	花田丁	花屋治丁	八日丁當德太郎	本村丁木屋助	大梅木屋久太	大工丁吉田寅之助	大工丁吉田勇之助	丑吉松
(147)	(146)	(145)	(139)	(138)	134か	132か	129か	(119)		(111)	(110)	(107)	(105)	(103)	(102)	(100)
卅二番	卅二番	卅一番	二十九番	二十八番	二十七	二十七	二十七	二十五番		二十三番	二十二番	二十番	十九番	十八番	十七番	
十一面手	千手	千手	千手	馬頭	聖觀音か	如意輪	聖觀音か	十一面か		十一面	十一面か	十一面か	十一面か	如意輪	十一面	
			建立大正四年							年明治四十三五月	"	"	年明治四十一五月	"	年明治三十九五月	
中花村卷已町吉	中花村卷已吉	"	"	"	中村已吉	中花卷町	中花村已吉	中村已吉		"	"	"	"	中花卷四日町	中村已吉	

1  
番



帰命寺三十三觀音像  
(木造)

岩手山頂三十三觀音像  
(盛岡講中建立)



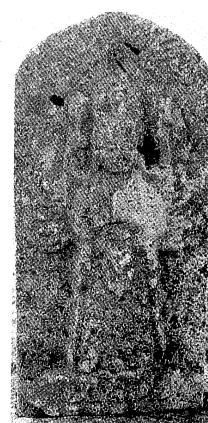
2  
番



3  
番



4  
番

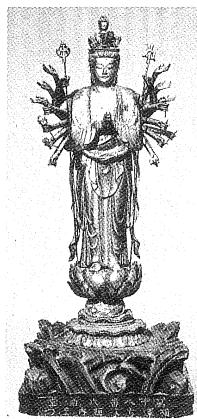




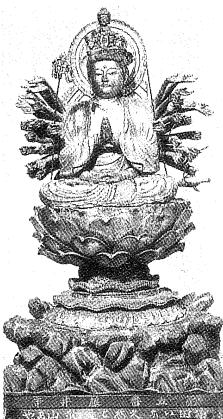
8番



7番



6番



5番



12番



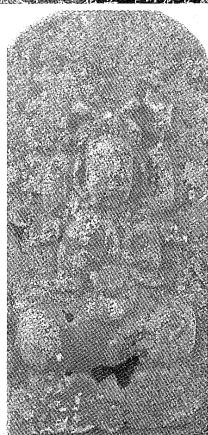
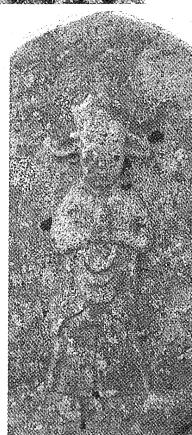
11番

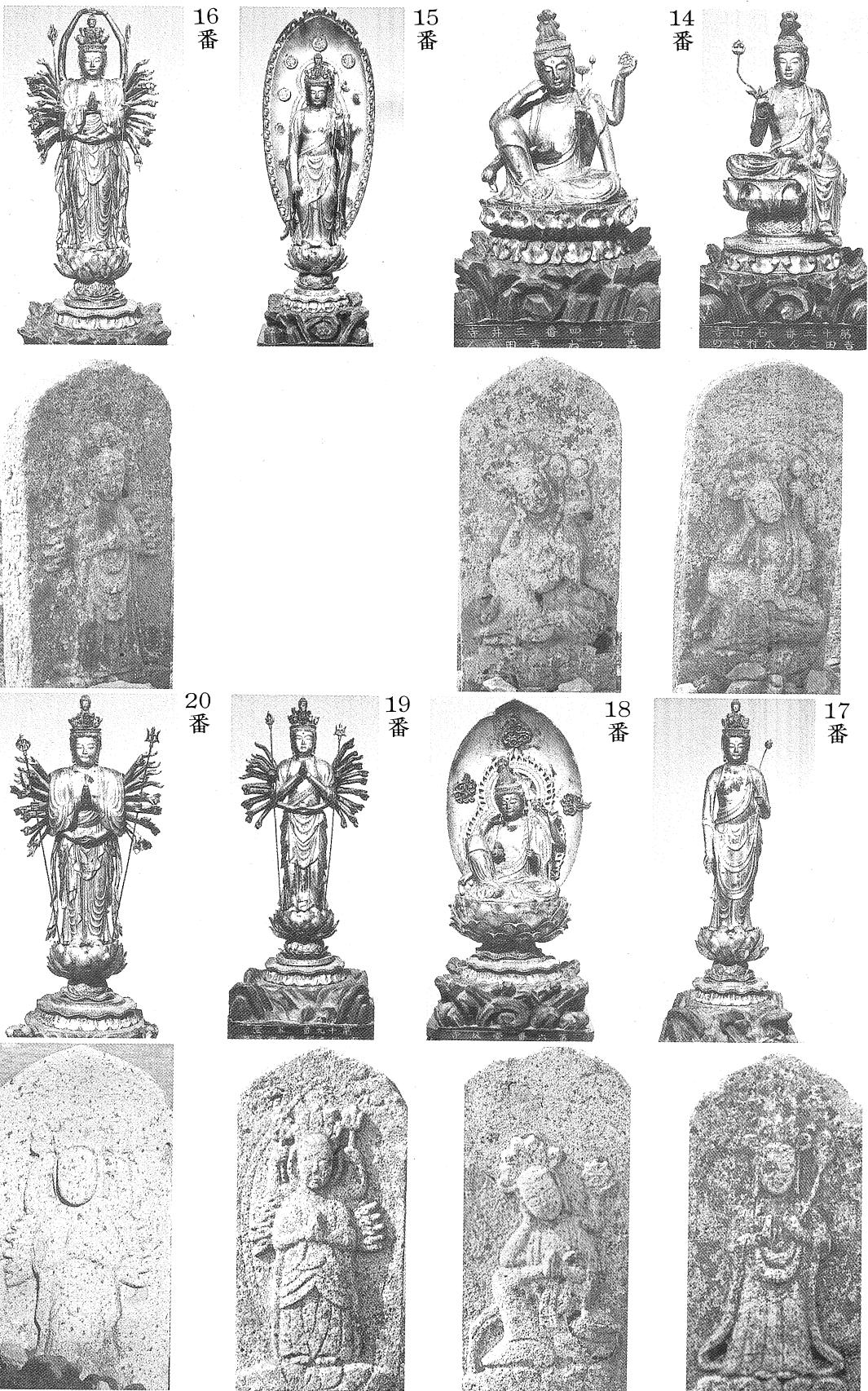


10番



9番



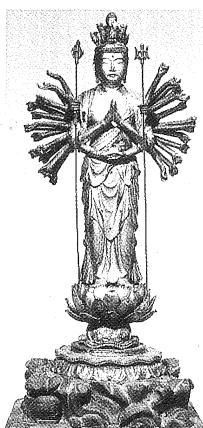




24 番



23 番



22 番



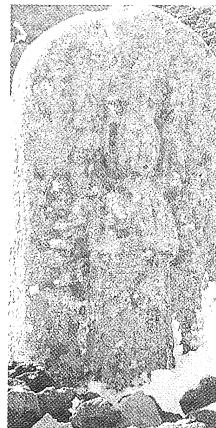
21 番



28 番



27 番

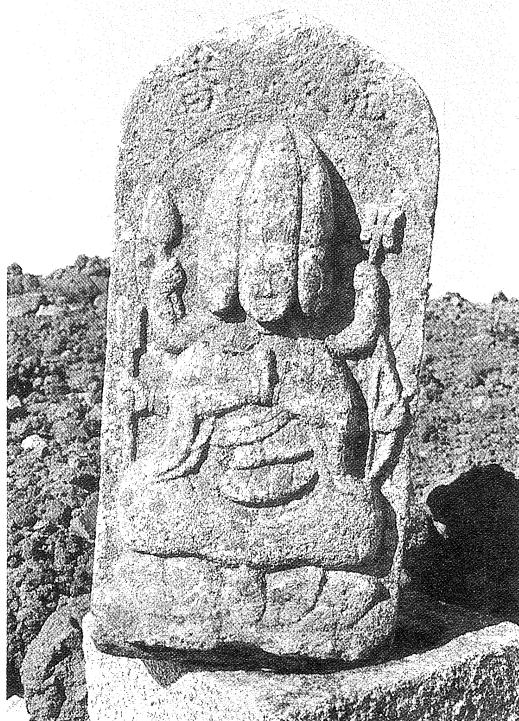


26 番



25 番





33  
番



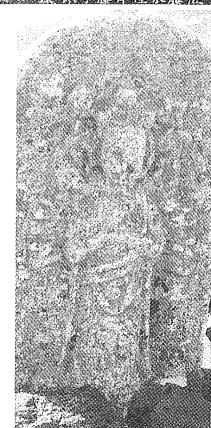
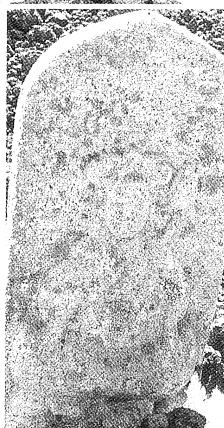
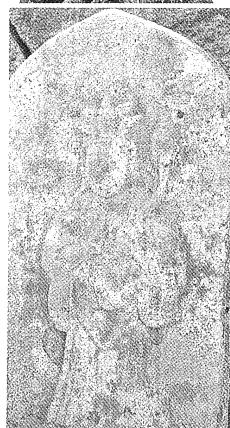
32  
番



31  
番



30  
番



# 六、平笠口の石造文化財

## 概説

**範囲** 国天然記念物焼走りの北方にある上坊岩手山神社（西根町平笠）から平笠不動を経て、熊野権現で山頂お鉢に取付くまでを「平笠口」とした。

**造立数** 平笠口の石造文化財の造立数は二六件、四一基である。地点別では、岩手山神社が十一件、十七基で最も多く、登山道に文政五年建立の道程石が九基現存しており、平笠不動には古い石造物が多い。

**上坊岩手山神社（新山堂・新山権現）** 北口の里宮で、別当は大蔵院であつた。寛文十年（一六七〇）野火で焼失し、再興された記録がある（『嚴手山記』所載大蔵坊記録）。一对の石燈籠が四組あり、最古の天保九年No.204・205と慶応二年No.198・199の石燈籠には「岩鷲山」と刻み、安政二年の石燈籠No.192・193には嚴鷲山大権現のほか、不動明王、三十六童子、阿弥陀三尊、薬師如来と岩鷲山に關係のある尊名が刻み込まれていて興味深い。

石造物は江戸後期のものと、近年のものに大別される。神社の現地点より更に西側に古上坊跡という所があり、そこにも石碑があるといふ。近年の石造物では大黒天石像（大国主命）No.203は岩手山神社の主神大穴牟遲命（顯國魂大神）の別名であり、聖觀音石像No.206は岩鷲山大権現三本地仏の一である。

**二合目** 文政五年（一八二二）の道程石No.209があり、田頭村清五と刻まれている。平笠口登山道には文政五年の道程石が二合目から八合五タ

目まで九基ある。『内史略』により文政二年に柳沢口登山道に道程石が建てられたことが知られ（15頁参照）、平笠口の道程石建立はそれに刺激されたものであろう。

**二合五夕目** 二合五夕目の道程石があり、そこからまもなくの地点に石祠がある。拝所に違いないが銘文は無く、平笠口の祈禱祠は順路通りでないので拝所の名称はわからない。

**三合目・駒形権現**

三合目には道程石と石祠が並んで建てられている。これも拝所の名称はわからないが、そこから約三百米のところに駒形権現がある。慶応二年石燈籠No.214には馬形大権現とある。

**三合夕目**

三合目付近からはコメツガ林の急坂を登る。三合五夕目に道程石が建てられている。

**五合目（鶴嘴）**

急坂を登り切ると焼走りからの新登山道との合流点ツルハシである。ここから道は緩やかになり、まもなく石祠No.217がある。鶴嘴権現を祠つたものであろうか。五合目まではコメツガやミヤマハンノキの林があり、この地点から真上の頂上方向にかけては急斜面に火山砂礫が露出堆積し「御砂子」と呼ばれている。ツルハシはその砂礫の部分が下方へ張出し、雪が降ると白くなり、あたかも鶴が嘴を伸ばしているように見えるのでツルハシといわれている。

**五合五夕目（三十六童子）**

五合五夕日にある大熔岩塊を三十六童子と呼んでいる。三十六童子とは本来は仏教を守護する三十六人の神王で三十六天あるいは三十六善神と呼ばれるものであろうが、岩手山にある熔岩塊を三十六童子に見立てて礼拝したものである。但し、三十六童子と呼ばれる岩塊はかつてはお鉢の内部にあつたらしく、貞亨三年の噴火の記録に「御山三十六童子の岩も相見え申さず様に石砂を上げ御座候」とか、「御嶺へ上り見申し候えば三十六童子御部屋一切見え申さず平地に罷まかり」と



登山道三合目

成候」（『巖手山記』所載）と記されている。

五合五夕日道程石 No. 219 のほかに近年の石祠 No. 220 と首のない石地蔵 No. 219 がある。

**六合目・六合五夕目** それぞれ道程石が一基ある。このあたりは熔岩石の急坂の道で、平地になつたところで前方に平笠不動の岩峰がそびえ、六合五夕目の道程石があり、左手には山頂お鉢が見える。

**平笠不動** 岩手山を真東から見ると北肩のあたりにトゲのよう屹立する小岩峰がある。これを柳沢口の不動岩（御不動）に対して平笠不動と称している。柳沢不動と同じくこれも旧外輪山の始端となつていて山頂との間は平地となり、これまた柳沢口と同じく不動平と呼んでいる。岩

の下が拝所となつていて、天明九年（一七八九）石祠 No. 227 があり、岩手中では山頂とともに最も早くから整えられたことが知られる。

注目を要するものとしては文政六年（一八二三）石宝剣 No. 225 がある。これには「奉新此度接待小屋建立」と刻まれていて、平笠口接待小屋の設置年代が知られる。柳沢接待小屋の四年後のことであり、小屋跡は不動岩の少し手前にある。

**七合五夕目・八合五夕目** 平笠不動からお鉢へは急坂の直登路で、途中に二基の道程石があり、三十分ほどでお鉢の熊野権現に取付く。

### 岩手山上坊神社講中の祈禱詞

（登山道の拝所順とは無関係であるが参考のため掲載する）

#### 拝 詞

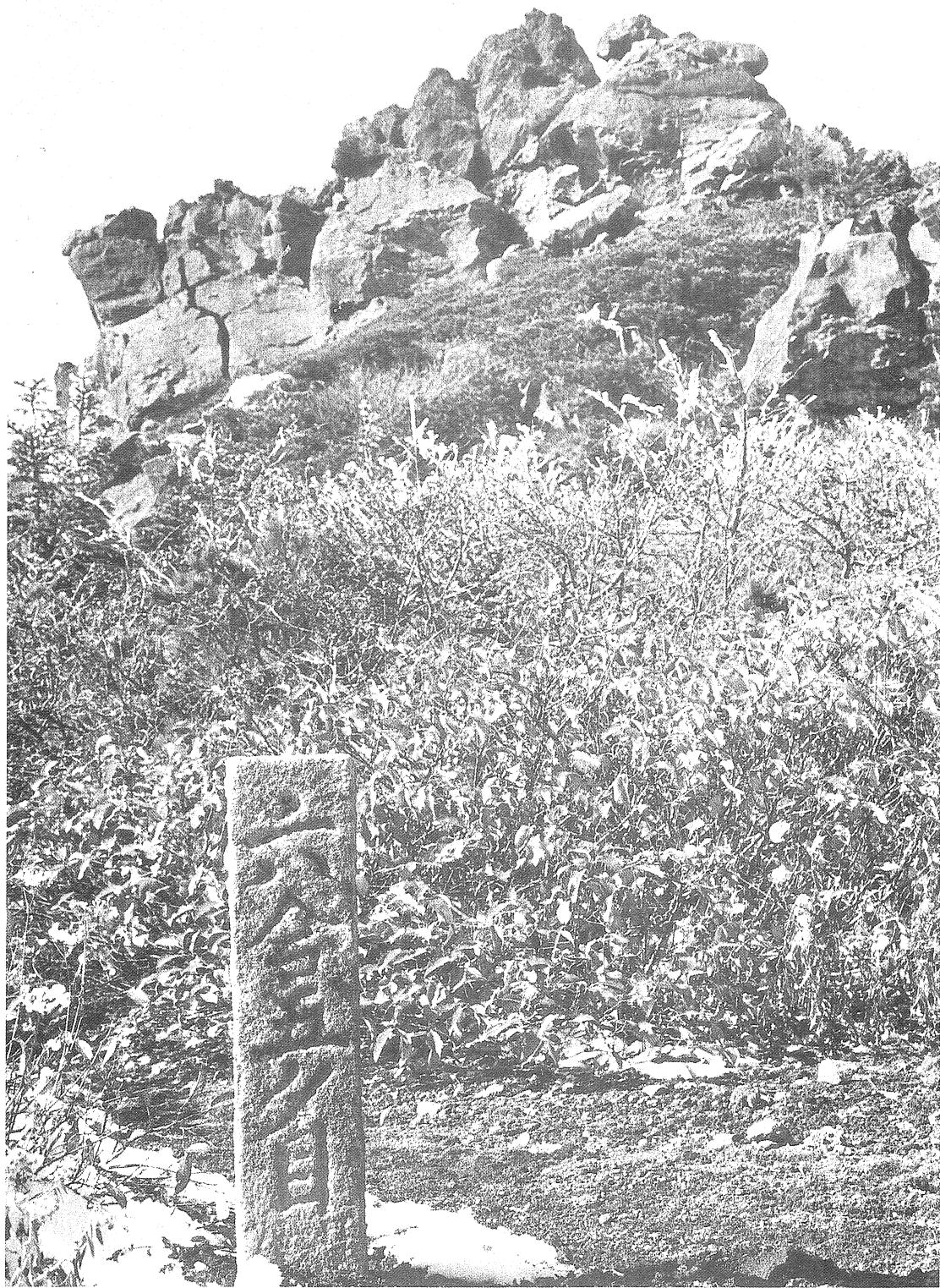
ナムキヨウメヨウクイザンガ  
南無帰命頂礼懺悔々々六根罪消

ナムキヨウメヨウクイザンガ  
三返唱ふる

ナムソラ  
一、南無空には梵天帝釈日流日月八流雷王子天皇々々雷日天月天

ロッコンザイショウ  
御注連に八大金剛童子の一時礼拝

イカヅチニテガツテン



六合五夕目から「平笠不動」を仰ぐ

御<sup>オ</sup>主<sup>シ</sup>連<sup>メ</sup>に<sup>ハ</sup>ハチ<sup>ハ</sup>大<sup>ハチ</sup>金<sup>ダイ</sup>剛<sup>コンゴ</sup>童<sup>ゴード</sup>子<sup>ウジ</sup>の<sup>イチ</sup>持<sup>ジ</sup>札<sup>ライ</sup>拜<sup>ハイ</sup>

ナム  
キミヨウチヨウライザン  
ゲザンゲロツコンザイショウ  
ニハシ  
モウ

ナムダイヒダイヒキヨミズカンノンオシメ

二、南無帰命頂礼讃悔々々六根罪消伊勢神明天照大神内宮外宮  
岩戸に大日如来御注連ニハ大金剛童子の一時礼拝  
ナムキヨウサヨウライザンゲイロツコウザイシヨイセシンミヨウテンシヨウダイジンナンイグーゲグ  
ナムクマナボンダーチダイヨリゴンゲンシャココハボホアソシヨ

三、南氣熊野は日本第一大領権現けん社公法八社はゆや三所の権現やく一王子やく王一万のげんぞく十万の金剛童子の懺悔々々は六根罪消前罪所々々々一時に消滅内示は後力宿顔がひりよう満足一チジ

四、南氣湯殿は神体量部の第一大権現御滝に大照は不動明王米山薬  
シタノイコングン オオバガゲンハラ カワ ハチダイコウブドクン フドウミヨウオウヨネヤマヤク

師体内権現 大場権現 払ひ川に八大金剛童子の一時礼拝  
ナムキヨウチヨウライザンゲサングロツココサシヨウ  
五、南無帰命 頂礼懺悔々々六根罪消 かつた藏王権現御注連に八大金  
ジマドウシイチジライハイ

六、南無帰命頂礼懺悔々々六根罪消  
ナムキヨウチヨウライザンゲザンゲロツコンザイショウ  
センムジユツコクチエンノウ  
コウシテアシニウタツシガツテンシオ  
シキニハチダイイコンゴウドウラシ  
イチヂルシハイ

七、  
千代ノ國天皇  
南無帰命頂礼  
御主連  
の誓現  
の  
千代ノ國天皇  
南無  
キヨミツナガシイザン  
ヨロコビシヨウ  
ヤマガツサンチヨウカイアフサハグロ  
ツキ山月山鳥海荒沢羽黒は三所

八、南無帰命頂礼懺悔々々六根罪消  
童子の一時礼拜

九、南無帰命頂礼懺悔々々六根罪消  
注連に八大金剛童子の一時礼拝

十、南無帰命頂礼懺悔々々六根罪消  
金剛童子一時礼拝

三 南無頂礼懺悔々々六根罪消  
月山月山六日岳の  
御注連に八大金剛

ハチショウザン  
タキダイシヨ  
フドウミヨウオウ  
ハチダイ

大金剛童子の<sup>一時礼拝</sup>  
三三、南無帰命<sup>頂礼</sup>ハタクテ六根罪消  
の御注連に八大金剛童子の<sup>一時礼拝</sup>

ニジユウサンヤ  
トウダイシ  
セイシボサツ  
夜は徳大師の清志菩薩

三三、南無帰命頂礼懺悔々六根罪消  
ハチダイコングドウチイチザクライハイ

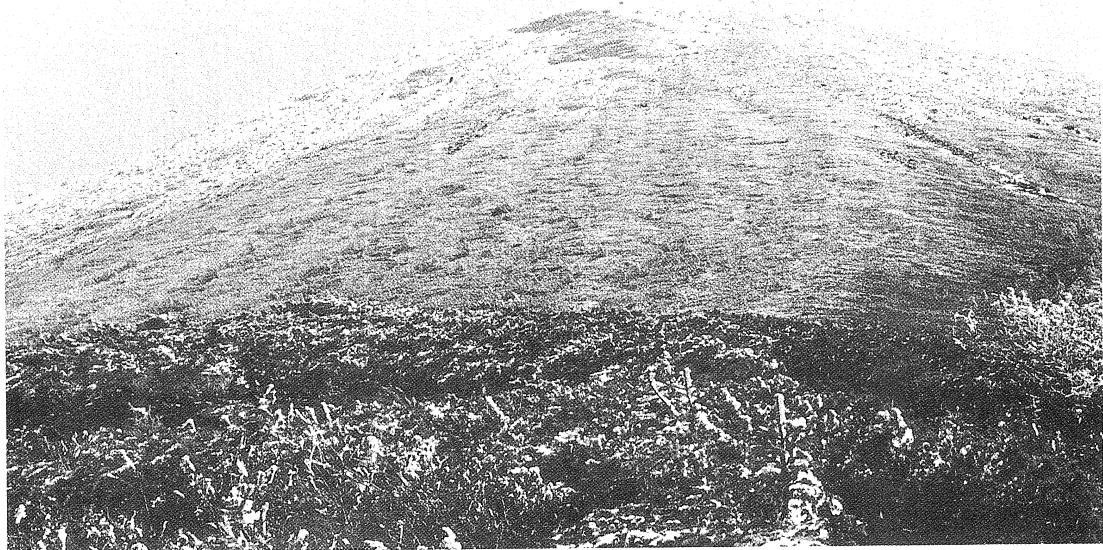
ツチブチ  
カンゼ  
オシメ

三吉、南無正一位志和稻荷は日本三社の  
社大だんの宿願がいりよう満足一時

ハイ  
ワジンダーダイミヨウジン  
神大明神

三五、南無帰命頂礼懺悔々々六根罪消  
ナムキミョウチヨウライザンゲザシゲロツコンザイシヨ

福一萬虚空藏菩薩の御注連に



## 平笠不動から岩手山頂をみる

(岩手山上防神社 伊藤織信氏の騰写資料による)

平笠口の石造文化財一覧

石碑No.	平笠口	地點	石地碑No.内	1	銘文・種類	年代	寸法cm	備考
204 205	203 202	200 201	198 199	196 197	194 195	192 193		
岩手山神社上坊								
13 14	12	11	9 10	7 8	5 6	3 4	1 2	
〔石燈籠〕 (竿石) 天保九年七月十日	〔大黒天像〕 (台)(横書) 大國主命 願主伊藤清五郎	〔石燈籠〕 (竿石) 岩清水権現 大更横間村久治	〔狛犬〕 奉納 盛岡市花工高橋仁助 (巣)慶応元丑年五月廿五日	〔石燈籠〕 岩鷲山 西根町平笠伊藤清五郎 願主抱村長之彌 同年同月	〔石燈籠〕 岩鷲山 西根町大更工藤直輝 同年同月	〔石燈籠〕 (竿石)昭和四十五年五月廿五日 安政二乙卯年五月二十七日 慶応二丙寅年	〔石燈籠〕 岩鷲山 西根町渡歐記念 昭和四十四年七月 昭和四十五年五月二十七日 南無阿弥陀仏	(竿石)不動明王 三十六童子 南無觀世音菩薩 (竿石)南無勢至菩薩 南無藥師如來 南無阿彌陀仏
一一八三八			一九三九	一八六五	一九七〇	一八六六		
117	総高137	72	総高205	140	206	210	170	
	像高62							
両基同銘			火袋から上を欠失	両基とも火袋欠失	両基同銘			



192  
193



上坊岩手山神社



194  
195



198 199

196 197

194 195



← 204 203  
205

202

200 201

213	212	211	210	209	208	207	206	石碑No.	平笠口
三合目		二合五夕目 約五百米地から	二合五夕目	二合目	岩手山神社			地點	
2	1	1	1	1	17	16	15	石碑点No.内	2
〔石祠〕	(道程名) 三合目 午五月	(石祠) 文政五年	(道程石) 二合五夕目 五月大吉辰	(道程石) 二合目 五月大吉日	午 文政五年 昭和四十五年十月 西根町平笠 伊藤 清五郎	文政五年 昭和四十二年四月 西根町平笠 伊藤 清五郎	〔聖觀音立像〕 昭和四十二年旧五月二十七日建之 岩手郡西根町平笠也 伊藤 清五郎	(台) 岩手山新山神社 寄進者 岩手郡西根町大更 昭和四十六年五月吉日建之 工藤 藤清直 藤清五郎輝	銘文・種類
	一八二三		一八二三	一八二三	一九六六	一九六七	一九七一	年代	
60	63.5	70	100	60	210	120	總高177	高寸	
	13		13.5	14	120	39	像高80	巾法	
	11.5		11.5	11.5	33	38		奥行cm	
								備考	



208



207



206



← 210

登山道・二合五夕目

209 →

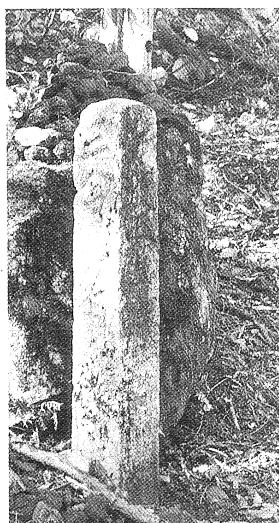


213

212

211

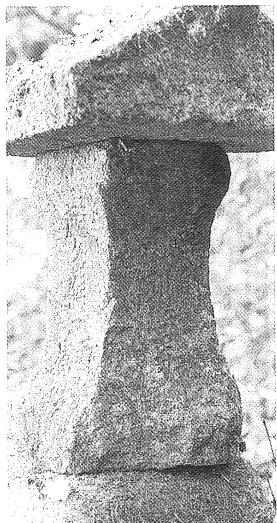
222	221	220	219	218	217	216	215	214	石碑 No.	平 笠 地 点
六 合 五 夕 目 平 笠 不 動 手 前	六 合 目	五 合 五 夕 目 三 十六 童 子	五 合 五 夕 目 少 し 手 よ り 前	三 合 五 夕 目	三 合 五 夕 目 約 二 百 m 付 近	三 合 五 夕 目 駒 形 權 現	三 合 五 夕 目 馬 形 大 權 現	三 合 五 夕 目 慶 応 二 丙 寅		
1	1	3	2	1	1	1	2	1	石地 碑点 No.内	3
〔道程石〕 五月吉日	〔道程石〕 六 合 目 文政五年	〔石 祠〕 昭和五十二年七月 （右側） 奉納者町 岩手川 大口 国恒沢 夫夫守	〔石 藏〕 文政五年 五月大吉辰 （左側）	〔道程石〕 五 合 五 夕 目 文政五年	〔石 祠〕 文政五年 五月大吉日	〔道程石〕 三 合 五 夕 目 沼宮内村	〔石 祠〕 大正十二年七月 馬 形 大 權 現 導師 別當所	〔石燈籠〕 六月十七日 馬 形 大 權 現 導師 別當所	銘文 ・ 種類	
一八二三 一一	一八二三 一一	一九七七		一八二三		一八二三	一九三	一八六六	年代	
54		50	39	61	71	81	44	73	高 寸	
13				13.5		13			巾 法	
11.5				13		11.5			奥 行 cm	
			首 欠 失					火袋と宝珠を 消失	備 考	



216



215



214



217



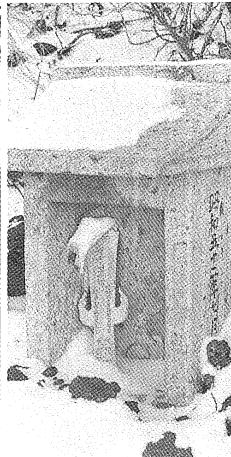
三十六童子



218



222



220



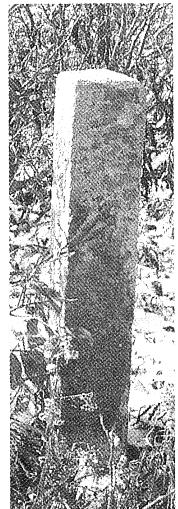
219

← 221

232	231	230	229	228	227	226	225	223 224	石碑 No.	平 笠 口
八合 五 夕 目	七 合 五 夕 目				平 笠 不 動				地 点	
1	1	8	7	6	5	4	3	1 2	石地 碑点 No.内	4
〔道程石〕 八合五夕目 五月吉日	〔道程石〕 七合五夕目 五月吉日	〔標柱〕 奉納 文政五年	〔ゴンゲンサマ〕 奉納 文政五年	〔浮彫不動明王立像〕	〔石祠〕 奉奇進 五月吉日	〔石宝劍〕 納 田頭村 大聖不動明王 工藤若松 寺田萬治郎 行者伊太郎 者	〔石宝劍〕 正一位岩驚山大權現 （裏）奉新此度撰待小屋建立 同月	〔標柱〕 村工藤弥八郎 正一位岩驚山大權現 文政六年五月廿一日 同月	銘文 ・ 種類	
一八二三	一八二三				一七八九	一九二三	一八二三		年 代	
108	77	80	32	總高48	72	52	59	74	高 寸	
13.5	12	14	34	像高31				13	巾 法	
13	12	13.5	32					13	奥行 cm	
								両基同銘。	備 考	



225

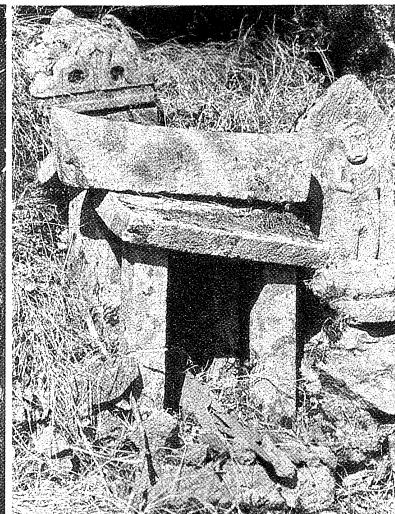


223

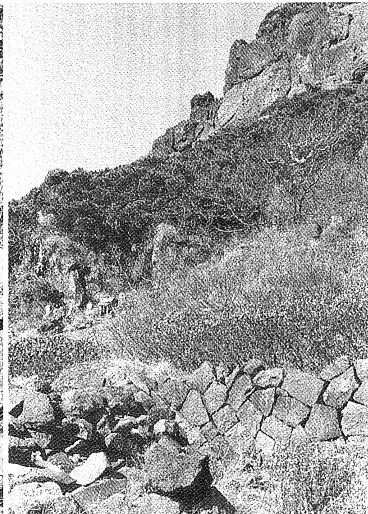
224



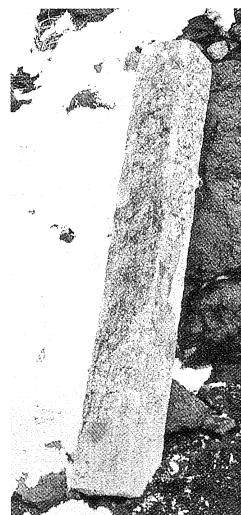
227側面



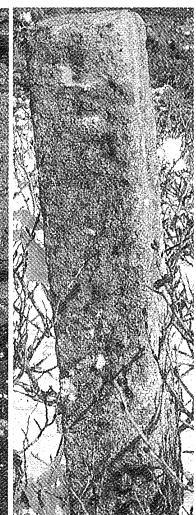
227



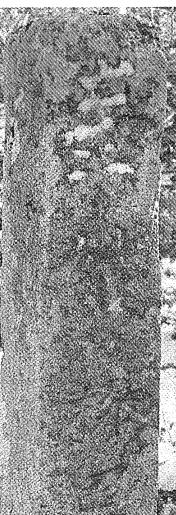
接待小屋跡



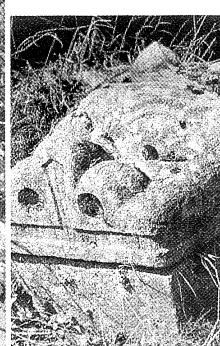
232



231



230



229



228

## 七、零石口の石造文化財

### 概説

範囲 岩手山神社新山宮（零石町大字長山頭無野）から御神坂駐車場を

経て登山道により不動平御不動で柳沢口登山道と合流するまでを「零石口」とした。

造立数 零石口の石造文化財の造立数は十三件は十七基で、その殆んどは岩手山神社にある。但し、今回の登山道調査には調査もある。

岩手山神社（巖鷲山新山宮） 坂上田村麻呂が岩手山の悪鬼を退治したときこの地に一宿して攻め登つたという伝説があり、それによつてこの地を「野宿あるいは一の関といい、巖鷲山田村大明神として祀つたといふ。『零石歳代日記』に「延宝二年（一六七四）南部重直公、新山堂を再興す」とある。別当は円蔵院であつた。

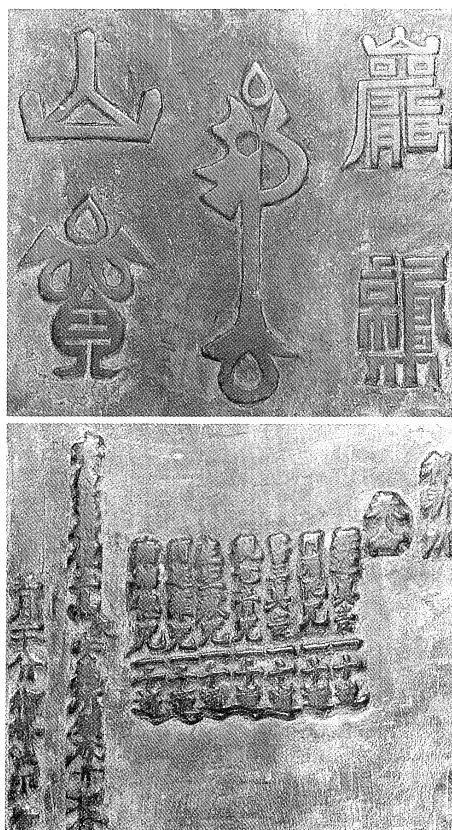
岩手山神社には十件十四基の石造物がある。最古は天保四年（一八三三）石燈籠No.241で、江戸時代のものとして他に嘉永七年（一八五四）手水鉢No.236、安政六年（一八五九）狛犬No.243・244がある。他是明治後期以後の岩手山神社高揚期のものに、石鳥居や石燈籠があり、近年の復興を示すものに「岩鷲山新山宮由来」を刻んだ碑（昭和56、No.242）がある。登山道 今回は三基の石造物しか確認できなかつたが、ゴンゲンサマや石鳥居等があり拝所であろうか。また、他に石祠もあるといふ。今後の調査を要する。

なお、零石口の拝所としては円蔵院の記録に「滴石かけ口の拝所」、「届岩 虚空藏 滝明神 是れ也。一、御釜・御地獄ト申ス拝所ハ、

御天ヨリ未申（西南）ノ方ニ当ル拝所也。御祭礼ノ節、毎年此ノ所ヨリ硫黄取り指上ル也」（『岩手山』）とある。

### 零石口の祈祷詞

- (一) 南無帰命頂礼 サンゲサンゲ 六根罪消 オシメ八大 金剛童子ノ  
一時礼拝。
- (二) 正一位岩鷲権現 之メノ峯ハ 三十六童子 大宮本社ハ三所ノ権現  
田村ノ明神 能氣ノ皇子 一時ニ御本尊 荒ハバキ 一時礼拝。
- (三) 南無東方 浄瑠璃光如來 七千夜叉 為法願力  
通法皆罪消カイシイ清淨 一時礼拝。
- (四) 南無帰命頂礼 サンギサンゲ 六根罪消 オシメ八大金剛童子ノ  
南無大悲ノ清水権現 一時礼拝。
- (五) 南無帰命頂礼 サンギサンゲ 六根罪消 オシメ八大金剛童子ノ  
南無大悲ノ不動明王 一時礼拝。
- (六) 南無上り夜叉 下リ明見 王子眷族若王子 南無大悲 三社ノ権現  
一時礼拝。笠詰権現。
- (七) 南無帰命頂礼 サンギサンゲ 六根罪消 オシメ八大金剛童子ノ  
南無大悲ノ御滝ノ明神 一時礼拝。
- (八) 南無帰命頂礼 サンギサンゲ 六根罪消 オシメ八大金剛童子ノ  
南無大悲 虚空藏明王 一時礼拝。
- (九) 南無帰命頂礼 サンギサンゲ 六根罪消 オシメ八大金剛童子ノ  
南無大悲ノ新山権現 一時礼拝。
- (十) 南無熊野ハ 日本第一大権現 ケンシヤ籠リ夜叉 ユヤ三所ノ権現  
若王子 若王子 一萬ノ眷族 十万ノ金剛童子ノサンギサンゲ  
六根罪消前罪消 前罪ゴク一時ニ消滅 シリテ信実 宿願皆了満足



巖鷲山宝印版木



坂上田村麻呂伝説の大宮神社

一時礼拝。

- (土) 南無帰命頂礼 サンギサンゲ 六根罪消 オシメ八大金剛童子ノ  
南無大悲ノ天照大神 一時礼拝。
- (日) 南無大悲ノ新山大權現 ヤワタ八幡大菩薩 オシメ八大金剛童子ノ  
一時礼拝。
- (月) 南無大悲ノ月山鳥海 羽黒ハ三所ノ權現 オシメ八大金剛童子ノ  
一時礼拝。
- (火) 南無帰命頂礼 サンギサンゲ 六根罪消 オシメ八大金剛童子ノ  
早池峯權現 一時礼拝。
- (水) 南無大悲諸神諸仏 サンギサンゲ 六根罪消 オシメ八大金剛童子ノ  
姫神權現 一時礼拝。
- (木) 南無大悲諸神諸仏 諸大權現 諸菩薩 オシメ八大金剛童子ノ  
一時礼拝。

嘉永六歳（一八五三）丑歳五月廿七日

岩鷲山大權現ニ参詣仕候

田中林太郎

『岩手山』所載「零石村下久保田中助左衛門家記録」  
『山村民俗誌』昭和八年刊 より)

(二)に見える大宮本社は、零石町大字西根字大宮の大宮神社で、延暦二十年悪鬼退治のとき坂上田村麻呂將軍が本陣をしいた場所で、岩鷲山田村明神として祀り、大きな宮があつたので大宮と称するようになつた伝え、零石では大宮神社を巖鷲山の本社と称している。

零石口の石造文化財一覧

石碑 No. 碑	零 石 口	地 点	零石口の石造文化財一覧							
			242	241	239 240	237 238	236	235	234	233
岩手山神社										
10	9	7 · 8	5 · 6	4	3	2	1	石地 碑点 No.内	1	
鎮守奉獻	(裏)岩鷲山新山宮由来 (写真参照のこと)	〔石燈籠〕 （竿石） 五穀成就 奉納	〔石燈籠〕 （竿石） 昭和九年旧五月二十七日 奉納	〔石燈籠〕 （竿石） 昭和九年旧五月二十七日 奉納	〔平水鉢〕 奉寄進 五月二十七日 □二十七日 興兵衛	御大正天皇即位記念 嘉永甲寅歲 西山村青年団上長山分團建立	〔石鳥居〕 明治三十七八年日露戰役記念 紀元一千五百六十五年旧五月建立 境内植林杉苗三千本	〔標柱〕 岩手山神社 昭和五十八年七月吉日	銘文・種類	
一九八一	一八三三	一九三四	一九三四	一八五四	一九四〇	一九〇五	一九八三	年代		
169	120	140	158	55	130	約360	192	高寸		
77				51	50		34	巾法		
15				51	40		32	奥行cm		
				嘉永七年	五角石			備考		



234



233

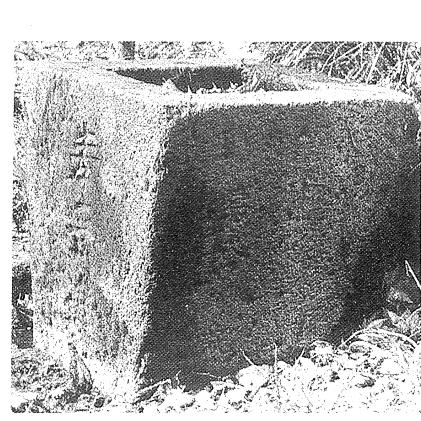


237

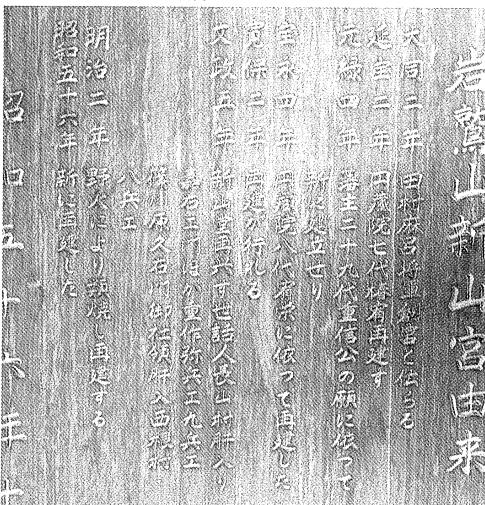
239

241

238 240



236



242



235

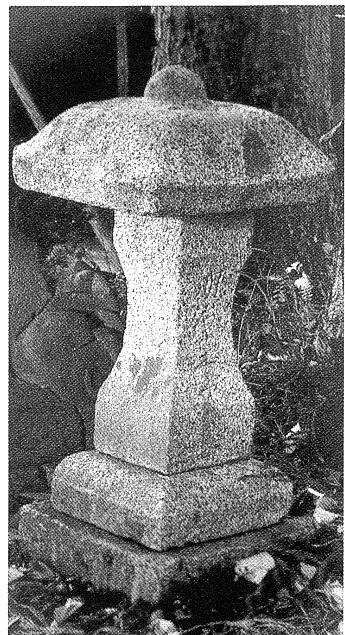
	249	248	247	245 246	243 244	石 No. 碑	零 石 口
	登山道 三km 地点より 二百m上	登山道 三km付近	御神坂駐車場よ り二・三km付近 (二の鳥居)	登山道	岩手山神社	地 点	石 碑 口
	1	1	1	13 14	11 12	石地 碑点 No.内	2
	〔石鳥居〕  石工 中村	〔ゴンゲンサマ〕	年百六千二紀皇 武運長久祈願 森 崎 市太郎 他七名の名あり	〔石燈籠〕 (竿石) 明治廿三年	狛犬 奉納 ----- 安政六己未年 (永山村・安庭村等の) 名がある。	銘文 ・ 〔種類〕	
			一九四〇	一八九〇	一八五九	年代	
	56		42	78	總高70	高寸	
	90		92		像高50	巾法	
		登山者による。 調査もれ。				奥行 cm	
							備考



243 244



247



245  
246



249

## 八、岩手県内の岩手山・岩鷲山信仰碑

### 概説

岩手山神社宮司小原實麿氏によると、かつては宮城県本吉郡から毎年参拝に来ていたという。本吉郡では「南部の御山は出世の御山、最上の山はハジの山」といい、男性は結婚前に南部五山に登拝する習わしがあつた。南部五山とは石神山・六角牛山・早池峰山（以上遠野三山）、五葉山・岩手山のことで、しだいに岩手山のみへの登拝で済ますようになり、一村を代表して十人ぐらいで参拝し、お札を五百枚ほどいただいて帰つて行つた。本吉郡からの代参は遠洋漁業が始まるまで続いたという。

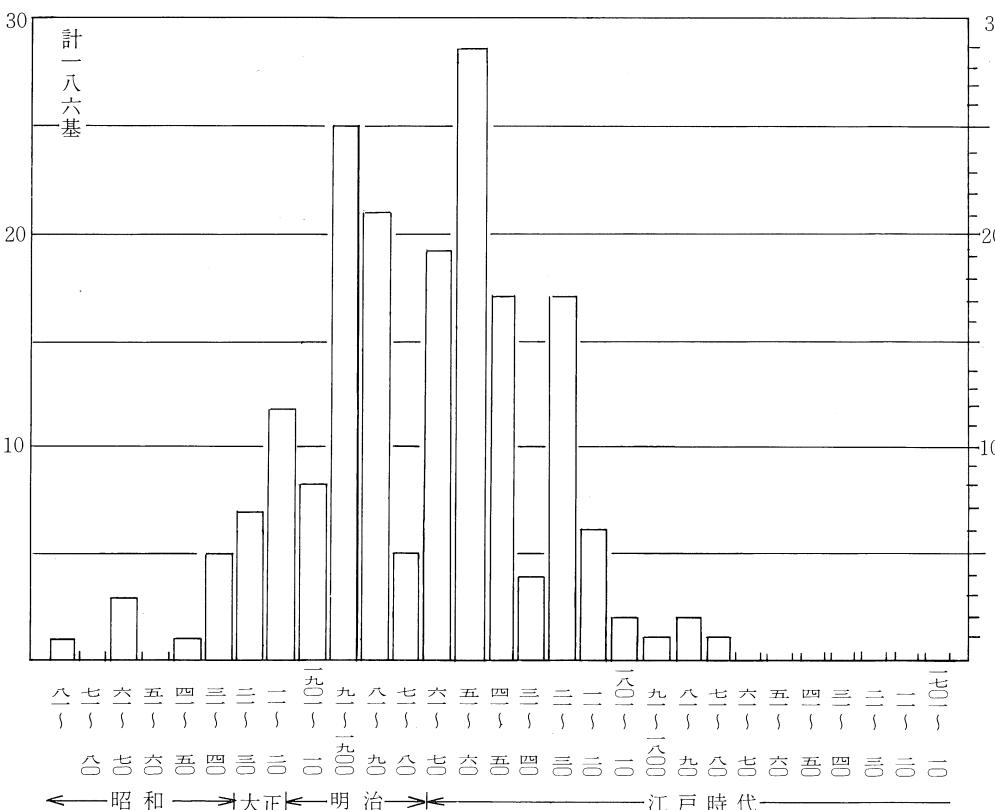
岩手県内一円に岩手山・岩鷲山と刻む石碑が建てられている。この多くは岩手山登拝、代参を記念してその参詣者あるいは講中によつて建てられたものである。市町村によつて石碑調査には精粗があり、その総数は完全には把握できないが、手元にある資料でまとめてみた。一応その概略はつかめよう。それによると、総数二二八基で、西根町や玉山村が多い。最古は岩手山頂奥宮の明和八年（一七七一）石宝剣で、連続的にみられるのは一七〇〇年代末頃からである。

第三図でみるとその最盛期は十八世紀で、江戸後末期から明治時代である。一八五〇年代は最も多く二九基が造立があつたが、これは丁度岩手山頂に三十三觀音石像が建立された時期にあたつている。

興味深いのは山田町、千厩町など遠隔の地に古い石碑がみられることで、その地方での参拝の実態等は今後の課題となろう。

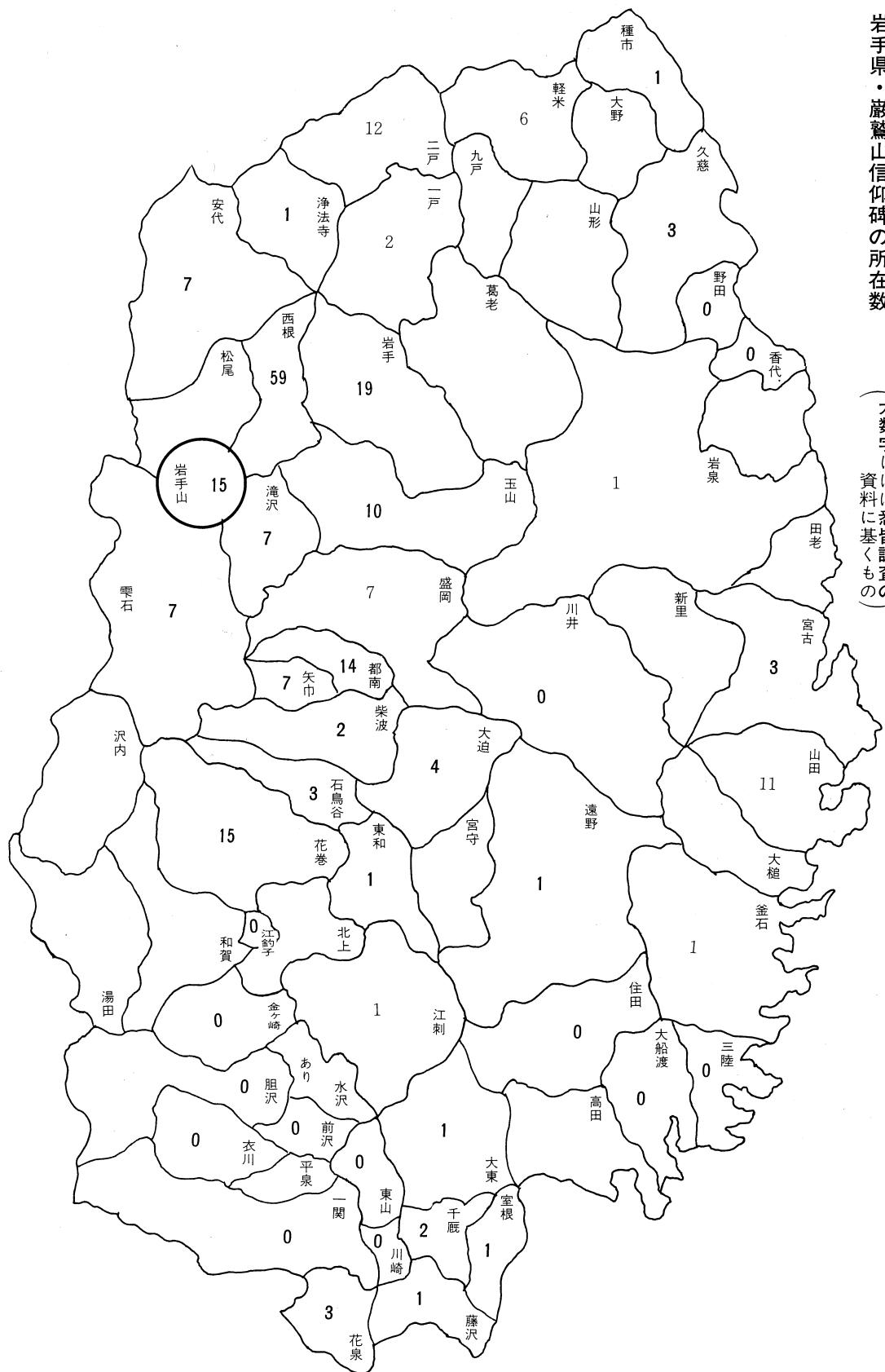
滝沢村には岩手山地域を除けば意外に少ない。七基で、最古の碑は篤木にある文政七年（一八二四）である。

（第三図）岩手県内岩手山・岩鷲山碑の造立年代分布

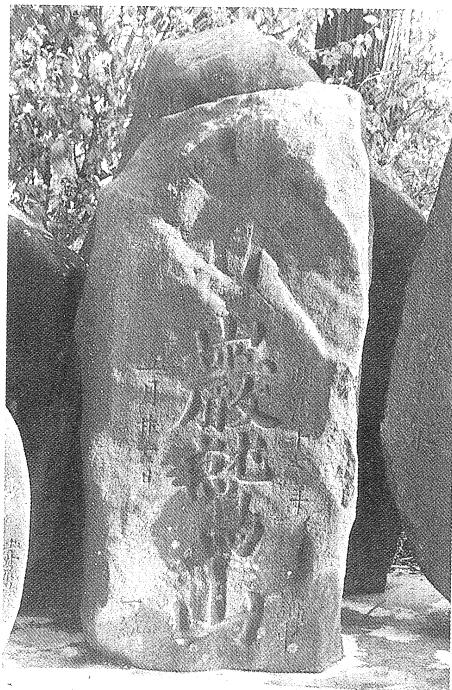


岩手県・巖鷲山信仰碑の所在数

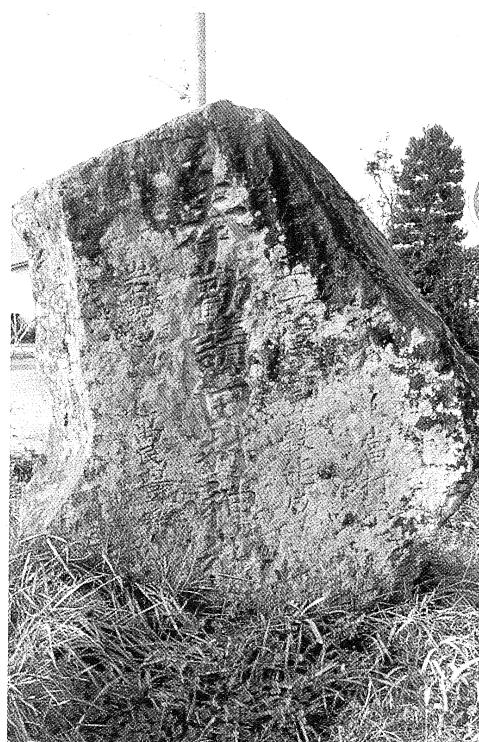
(太数字はほぼ悉皆調査の資料に基づくもの)



滝沢村の岩手山・巖鷲山信仰碑



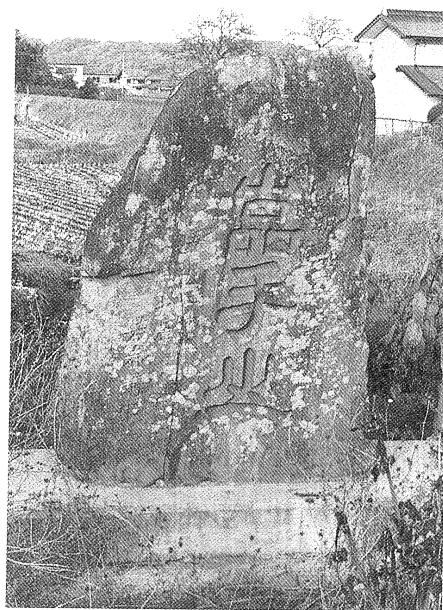
明治17年(大釜)



文政7年(篠木)



(一本木)



明治31年(大沢)

岩手県内の岩手山・巌鷦山信仰碑一覧表

(太字の市町村は悉皆調査済の資料による)

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	No.		
安代町					淨法寺町	一戸町	二戸市													市町村	和暦
明治 28	安政 3	安政 2	嘉永 3	明治 12	明治 4	慶応 4	昭和 12	昭和 3	大正 13	大正 9	大正 4	明治 38	文久 2	文久 1	安政 6	安政 2	嘉永 3	天保 3	西暦	主 銘	
一八九五	一八五六	一八五五	一八五〇	一八七九	一八七一	一八六八	一九三七	一九一六	一九一四	一九一〇	一九一五	一九〇五	一八六一	一八五九	一八三二	一七八七	岩鷦山大権現	一七三七	主 銘		
岩鷦山・田村山	巌鷦山・金毘羅大権現	巌鷦山大権現	巌鷦山・金毘羅山・岩手山	巌鷦山・庚申・廿三夜	巌鷦山	岩手山	岩手山	岩手山	岩手山	岩手山	岩手山	岩手山	岩手山	岩手山	岩手山	下斗米大富社	釜屋敷	金田一湯田	所 在 地		
土沢・稻荷社	岩屋	小柳田駒形社	寄木駒形社	宮沢	樋ノ口	婦帶	愛宕社	村松八幡社	"	似馬八幡社	藤村小屋敷	上米沢	白滝七滝	川又大明神平	愛宕山	下斗米大富社	釜屋敷	金田一湯田	所 在 地		
⑤	⑤	⑤	⑤	④	③	○	①	①	①	①	②	①	①	①	①	○	①	②	典 拠		
38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	No.		
盛岡市							軽米町							久慈市			安代町		市町村	和暦	
			安政 6	弘化 5	文政 10	文化 12				明治 44	安政 6	文政 12	明治 25	"	明治 21	"	明治 30	明治 29	西暦		
			一八五九	一八四五	一八四八	一八二七	一八二五			一九二一	一八五九	一八二九	一八九二	"	"	一八八八	一八九七	一八九六	西暦		
岩手山神社	湯殿山・巌鷦山・若木山	巌鷦山	巌鷦山	岩手山	西熊野三十三社・巌鷦山 ヶ所供養塔	巌鷦山	岩手山	岩手山神社	巌手山神社	巌手山	巌手山	巌手山	十和田山神社・岩手山神社	十和田山神社・岩手山神社	岩手山神社	岩手山神社	岩手山・湯殿山・三峰山	岩鷦山	主 銘		
岩手山神社	山岸	藤倉神社	上米内庄ヶ畑	盛岡八幡宮	"	田貝	上鹿妻愛宕社	晴山	古屋敷	高清水	君成田	上野場	下野場	長内町二子	"	上長内	荒屋白山社	中佐井	石神	所 在 地	
⑩	⑪	⑫	⑬	⑩	⑨	⑨	⑧	⑦	⑦	⑦	⑦	⑧	⑥	⑥	⑥	⑤	⑤	⑤	典 拠		

58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	No.	
西根町																				市町村	
寛政11									明治35	明治34	明治33	〃4	慶応4	〃5	安政5	嘉永3	文政5	〃	文政1	和暦	
一七九九									一九〇二	一九〇一	一九〇〇	〃	一八六八	〃	一八五〇	一八三	〃	〃	一八一八	西暦	
岩鷲山	岩鷲山	岩鷲山・玉東山	巖鷲山	巖鷲山	巖鷲山	巖鷲山塔	巖鷲山	巖鷲山	巖鷲山	巖鷲山	巖鷲山	巖鷲山	巖鷲山	巖鷲山	巖鷲山供養	富士山・岩鷲山・白山・大権現	湯殿山・月山・羽黒山・金毘羅山・玉東山・岩鷲山	岩鷲山供養	主銘		
荒木田	細沢	丹藤	秋浦	大平追分	橋場	川口松原	久保	沼袋	沼袋外山	雪浦白旗社	黒内	葉木田	大渡	土川	一方井	川口稻荷社	川口稻荷社	葉木田	所在地		
⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	No.
西根町																				市町村	
文久1	万延2	安政6	安政5	安政4	安政2	嘉永7	〃6	嘉永6	嘉永4	嘉永2	弘化4	弘化2	天保14	天保12	天保3	文政13	文政10	文政7	文政6	和暦	
一八六一	一八六一	一八五九	一八五八	一八五七	一八五四	〃	一八五三	一八五一	一八四九	一八四八	一八四五	一八四三	一八四	一八三二	一八三〇	一八七	一八四	一八三	一八三	西暦	
岩鷲山	湯殿三山・巖鷲山・金毘羅山	岩鷲山	湯殿三山・巖鷲山・鳥海山	岩鷲山塔	岩鷲山	岩鷲山・玉東山塔	勢至・岩鷲山塔	金毘羅	巖鷲山	湯殿三山・巖鷲山・玉東山塔	金毘羅大権現塔・岩鷲山・二十三夜塔	巖鷲山・早池峯山・玉東山	巖鷲山	瀧不動明王・金毘羅山・岩鷲山	鳥海山・岩鷲山供養	鳥海山	湯殿三山・巖鷲山・鳥海山	正一位巖鷲山供養	主銘		
平笠・谷地中	大更・松川	大更・兩沼	平館・堀切社	大更・山後	田頭・間羽松	大更・淡川	大更・岡村	大更・中関	平館・共新	田頭・茨島	田頭・館腰	大更・大石平	大更・中関	寺田留の沢	寺田川原目	大更大石平	大更金毘羅	平笠二地割	所在地		
⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯																			典拠		

No.	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98
西 根 町																			市 町 村	
" 26	" 26	" 26	" 23	" 22	" 21	" 20	" 19	" 18	" 18	( " 17 )	明治 13	" 2	" 2	慶応 1	" 1	元治 1	" 3	" 3	文久 3	
" "	" "	一八九三	一八九〇	一八八九	一八八八	一八八七	一八八六	" "	一八八五	一八八四	一八八〇	" "	一八六六	一八五六	" "	一八六四	" "	" "	一八六三	
湯殿山神社・岩手山神社・金毘羅神社	岩手山	巖手山	岩手山神社	湯殿三山・鳥海山・巖鷲山	岩手山神社	巖鷲山	巖鷲山	鳥海山・巖鷲山	巖鷲山	巖鷲山	巖鷲山	巖鷲山供養	主 銘							
寺田・荒木田	平館・桟沢	" "	田頭・中村	平館光繁稻荷	" 宮田社	" 留石	平笠・宮田社	大更・白屋	寺田・荒木田	" 白屋	大更・北切	" 白山	田頭・稻荷社	平笠・吉祥寺	" 中村	田頭・高宮	平館・森子	田頭・大宮社	寺田・川原目	
(15) 118	(15) 117	(15) 116	(15) 115	(15) 114	(15) 113	(15) 112	(15) 111	(15) 110	(15) 109	(15) 108	(15) 107	(15) 106	(15) 105	(15) 104	(15) 103	(15) 102	(15) 101	(15) 100	99 No.	
西 根 町																			市 町 村	
安政 2	嘉永 7									" 25	昭和 4	( " 32 )	" 31	" 30	" 30	" 29	" 29	( " 28 )	" 27	和 暦
一八五五	一八五四									一九五〇	一九五元	一八九九	" 一八九八	" 一八九七	" 一八九六	" 一八九五	" 一八九四	" 一八九三	西 暦	
巖鷲山	巖鷲山	新山社	岩鷲山	岩手山	岩手山神社	岩手山神社	岩手山神社	岩手山神社	巖鷲山	巖手山神社	巖手山藥師堂	巖手山神社	巖手山神社	岩手山神社	岩手山神社	岩手山神社	金毘羅山・岩手山	巖鷲山	主 銘	
元御所	滝沢	" 新山	平館・ワシ森	田頭・間羽松	大更・一ツ森	" 山崎	" "	平館・新山	寺田・上寺田	寺田・新田	田頭・東慈寺	大更・大石平	平笠・蟹沢	大更・中関	田頭・大宮社	寺田・谷地中	平館・桟沢	平笠・長根	田頭・間羽松	
(16)	(16)	(15)	(15)	(15)	(15)	(15)	(15)	(15)	(15)	(15)	(15)	(15)	(15)	(15)	(15)	(15)	(15)	(15)	典拠	

138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	137	126	125	124	123	122	121	120	119	No.
滝沢村					玉山村										雲石町					市町村
明治17	安政3	嘉永9	弘化4	文政7						〃34	〃29	〃27	明治25	万延1	昭和4	〃31	〃16	〃14	明治12	和暦
一八四	一八六	一八七	一八七	一八四					一五〇	一六六	一五四	一五三	一六〇	一六六	一六六	一六三	一六二	一六一	一八九	西暦
巖鷲山	巖鷲山(追分石)	巖鷲山	巖鷲山	正一位奉勸請田村神社	岩鷲山・玉東山	早池峯山・岩手山・玉東山	巖手山・姫神山	巖手山	岩手山・玉東山	岩手山神社	岩手山	岩手山大神・玉東山大神	巖手山	巖手山	巖手山	巖手山	巖手山	巖手山	主銘	
大釜	分レ	谷地上	一王子	篠木	好摩	卷掘	芋田	百目木	松内在家	生出	〃	永井沢	好摩	永井沢	大林	駒木場	篠ヶ原川	上西根	町場	所在地
⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	典拠	
158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	No.
宮古市			岩手山										滝沢村					市町村		
嘉永5	〃10	文政6		〃58	〃45	〃42	〃39	〃12	〃5	昭和4	〃5	大正5	〃6	〃3	文政2	天明6	明和8	明治31	和暦	
一五三	一五七	一五三		一五三	一五〇	一五七	一五四	一五七	一五〇	一五元	〃	一五六	一五三	一五〇	一五九	一五六	一五九	一五六	西暦	
早岩池峯山供養塔志和稻荷	巖鷲山	巖鷲山(石宝剣)	岩鷲山大権現	岩鷲山大権現	岩鷲山	巖手山神社植林記念碑	岩手山神社	奉納岩手山(石宝剣)	巖手富士	奉納岩手山神社	巖手山神社	奉納縣社岩手山神社奥宮	奉新一位巖鷲山大権現(石宝剣)	奉新一位巖鷲山大権現(石宝剣)	奥の富士	巖鷲山	巖鷲山宝鉄(石宝剣)	巖鷲山・田村大明神・馬頭観音	嵐手山	主銘
鍬ヶ崎	藤原上町	鍬ヶ崎	御不動	雪石岩手山神社	上坊岩手山神社	雪石岩手山神社	柳沢口馬返し	山頂奥宮	山頂奥宮	柳沢口馬返し	山頂奥宮	山頂奥宮	平笠不動	山頂お鉢	柳沢口政所	山頂奥宮	一本木	大沢	所在地	
⑳	⑳	⑳	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	典拠	

178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	No.
矢巾町				紫波町	釜石市	遠野市	山田町												岩泉町	市町村
安政5	〃2	嘉永1	文政13			弘化4		〃	昭和15	元治2	安政2	〃6	〃6	嘉永2	弘化3	天保10	寛政2	大正6	一九二七	和曆
一八五	一八九	一八六	一八〇			一八七		〃	一八〇	一八五	一八五	〃	一八三	一八九	一八九	一八九	一九〇	一九〇	西曆	
岩鷲山大権現	巖鷲山・早池峯山・南昌山	巖鷲山大権現	巖鷲山・早池峯山・玉東山	巖鷲山	巖鷲山	巖鷲山・早池峰・志和三山塔	巖手山神社・志和稻荷神社	巖手山神社・志和稻荷神社	巖手山神社・志和稻荷神社	巖手山・早池峰・志和稻荷	金毘羅山・巖鷲山・早池峰	岩手山・十和田神社	岩手寺	主銘						
桜屋	煙山	和味	下煙山			嬉石町	上郷平倉	織笠	馬指野	織笠	馬指野	手前	間木戸一里塚	北浜町	大浦	織笠	田子ノ木口	田子ノ木	長安寺	所在地
②6	②6	②6	②6	②5	②5	②4	③9	○	②2	○	○	②3	②3	②3	②2	②3	○	②2	②1	典拠
198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	180	179	No.
花巻市				都南村												矢巾町		市町村		
明治2	嘉永1	天保15		大正	〃36	〃23	〃16	〃14	〃14	〃14	明治12	慶応4	嘉永4	〃10	〃9	文政8	〃44	明治3	一九〇	和曆
一八九	一八六	一八四			一五三	一九〇	一八三	〃	〃	一八一	一八九	一八六	一五一	一八七	一八三	一八五	元二	一九一	西曆	
巖手山・早池峰山	巖鷲山	岩鷲山大権現	早池□□□・巖鷲□□	巖鷲山・金毘羅大権現・湯殿山	鳥海山	岩鷲山	鳥海山	岩手山	鳥海山	鳥海山・岩手山	鳥海山・湯殿山	鳥海山	巖鷲山	巖鷲山大権現	巖鷲山大権現	岩手山大神・金神神社	岩手山	岩手山大神	主銘	
宿	下似内	四日町	津志田	下飯岡	上羽場	湯沢	羽場	津志田	〃	下飯岡	上飯岡	〃	下飯岡	飯岡	大ヶ生	上飯岡	太田	室岡	所在地	
②9	②9	②9	②7	②7	②7	②7	②7	②7	②7	②7	②7	②7	②7	②7	②7	②7	②6	②6	典拠	

野田村・普代村・川井村・江釣子村・前沢町・金ヶ崎町・胆沢町・衣川村・一関市・東山町・川崎村・大船渡市・住田町・三陸町

1、この一覧表は「石碑」のみの書上げであり、石燈籠等の「建造物」や、石仏等の「像容」は含まない。但し、石宝剣は「石碑」に準ずるものとして書入れた。

2、「岩手山」の範囲は、各岩手山神社から山頂までとした。

「岩手山」の範囲は、各岩手山神社から山頂までとした。本文では、柳沢口の「分レ」「一王子」を「岩手山」に入れて説明したが、この表では「滝沢村」を入れてある。

「典拠」欄の番号は次頁のとおりである。

但し、無番号の○印は筆者調査によることを示す。

(第十一表) 岩手山・岩鷲山信仰碑の造立年代上位二〇

17	17	17	14	14	14	13	12	11	8	8	8	7	6	5	4	3	2	1	No.			
千 鶴 町	西 根 町	滝 沢 村	宮 古 市	岩 手 山	西 根 町	岩 手 町	岩 手 山	岩 手 山	岩 手 町	盛 岡 市	石 鳥 谷 町	西 根 町	山 田 町	西 根 町	山 田 町	岩 手 山	市 町 村	和 暦				
〃	7	7	7	6	6	6	5	3	2	1	1	文 政 1	12	11	11	天 明 6	明 和 8	西 暦				
〃	〃	八 四	〃	〃	八 三	八 三	八 三	八 九	八 〇	八 八	八 五	文化 7	享 和 1	二 九	一 九	一 九	一 九	正 一位 岩 鷲 山 (石 宝 劍)				
巖 鷲 山 峰 大 權 現 現	湯 殿 三 山	正 泰 勤 請 田 村 神 社	正 泰 勤 請 田 村 大 權 現 現	富士 山 ・ 岩 鷲 山 ・ 鳥 海 山	大 峰 山 ・ 白 山 ・ 大 權 現 現	巖 鷲 山 供 養	巖 鷲 山 供 養	湯 殿 山 ・ 月 山 ・ 羽 黒 山	金 毘 羅 山 ・ 玉 東 山 ・ 岩 鷲 山	巖 鷲 山 供 養	巖 鷲 山 供 養	巖 鷲 山 供 養	巖 鷲 山 供 養	巖 鷲 山 供 養								
南 小 梨	大 更 ・ 金 毘 羅	篠 木	鍬 ヶ 崎	平 笠 不 動	平 笠 不 動	川 口 稻 荷 社	山 頂 お 鉢	柳 沢 口 改 所	打 越	川 口 稻 荷 社	葉 木 田	上 鹿 妻 愛 宕 社	新 堀	北 滝 田	荒 木 田	田 子 ノ 木	山 頂 奥 宮	山 頂 奥 宮				
⑯	⑮	⑯	⑰	⑯	○	⑮	⑯	○	○	⑭	⑯	⑯	⑨	⑯	⑯	○	○	典 拵				

各市町村の石碑資料の典拠一覧(太字はほぼ悉皆調査済の市町村である)

二戸市  
①黒沢恒雄『福岡の石碑』、  
②同追加筆記資料

③一戸町教委『一戸町の石造文化財2』(拙稿)、筆者調査

④淨法寺町教委中村裕氏調査資料

安代町  
⑤岩手県立博物館調査資料

⑥久慈市教委『久慈市の石碑』(拙稿)

⑦ 軽米町教育委員会調査資料（継続中）

## ⑧ 東洋大学『晴山の民俗』

野田村  
野田村教委『野田の石碑』になし。

⑨ 盛岡市教委調査資料 ⑩ 岩手放送『岩手山』

〔①岩手県教委・歴史の道 小本街道〕  
〔②同 沢内街道〕

西銀町 岩手町見聞録 第一次調査報告書

○ 指揮　西林時の石造工作員。  
⑯ 霊石町教委『靈石の石碑』

⑯玉山村教委『玉山村の石碑』

滝沢村  
⑯今回の調査資料  
⑰『滝沢村誌』

岩手山（各登山口の岩手山神社（山頂）全

宮古市 ②〇宮古市教委 『宮古市の石碑』

岩泉町  
㉑『岩泉地方史』

山田町  
㉒ 小島俊一『陸中海岸の石仏』

普代村教委『普代の石碑』になし。

川井村　『川井村郷土誌』になし

遠野市  
④『遠野の道』

釜石市  
②4 歴史の道・浜街道

紫波町史

矢巾町 ②6 矢巾町教委『路傍の祈り』  
都南村 ②7 都南村教委『都南の石碑』

花巻市 ②8 『花巻市文化財調査報告書第七集』 ②9 『同第八集』

石鳥谷町 ③5 菊池邦雄『石碑の歴史』(広報いしどりや第二十九三号)

大迫町 ③1 『大迫町史・民俗』

東和町 ③2 東和町教育委員会調査票

江釣子村 江釣子村教委『江釣子村石碑分布調査報告書』なし。

水沢市 『水沢市史6民俗編』に、存在はするが基数等の記載なし。

江刺市 ③3 『歴史の道・盛街道』

前沢町 鈴木透氏調査資料なし。

金ヶ崎町 『金ヶ崎町史』なし。

胆沢町 胆沢町教委『胆沢之古碑』なし。

衣川村 衣川村教委『衣川の社寺と古碑』なし。

一関市 『一関市史』、阿部四郎「萩荘の石碑について」(県南史談会『研

究紀要』第十二集)なし。

花泉町 ③4 『花泉町史』

東山町 東山町文化財調査委員会『(碑石)調査報告書』なし。

大東町 ③5 大東町教委『大東町の古碑』

千厩町 ③6 千厩町教委『千厩町の古碑』

藤沢町 ③7 藤沢町教委『第8回文化財調査記録』

室根村 ③8 室根村教委『室根の古碑』

川崎村 『川崎村の石造文化財第二部』原稿(拙稿)なし。

大船渡市 大船渡史談会『路傍の信仰』なし。

住田町 根来功範『住田風土記4集』『路傍の古碑』なし。

三陸町 片山三郎『ふるさとの神さま佛さま』なし。

種市町 ④0 種市町教委『種市町の石碑(II)』

## 参考・引用文献

『巖手山記』小原実義(岩手山神社社司)著 昭和十五年刊

『岩手山』岩手放送株式会社発行 昭和四十八年

岩手史叢『内史畧』岩手県文化財愛護協会 昭和四十九・五十年刊

『巖手郡誌』岩手県教育会岩手郡部会 昭和十六年

『滝沢村誌』福田武雄著、滝沢村発行 昭和四十九年

『滝沢村の文化財』滝沢村教育委員会 昭和六十年

『零石町史』零石町 昭和五十四年

『零石歳代日記』零石町誌史料第一集零石町教育委員会 昭和三十八年

『岩手県史』第五卷 岩手県 昭和三十八年

『南部叢書』『盛岡砂子』『邦内郷村志』『旧蹟遺文』『奥々風土記』

太田孝太郎編 東洋書院発行 昭和五十七年

『西根町の石造文化財』拙稿 西根町教育委員会発行 昭和六十年

『岩手山登山案内図――足であるいた実地踏査報告書』小野寺時美 昭和五十八年

五十八年

## 岩手山の石造文化財

昭和六十一年三月三十一日発行

著者・編集 大矢邦宣

発行 滝沢村教育委員会

〒030-0111 岩手県岩手郡滝沢村大字鶴飼

第十一地割字中鶴飼五五番地  
TEL 0196(八四)一一一

印 刷 川口印刷工業株式会社

盛岡市本町通二丁目一三の八